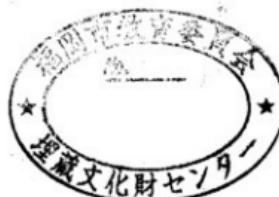


福岡市西区

# 吉武塚原古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集



1 9 8 0

福岡市教育委員会

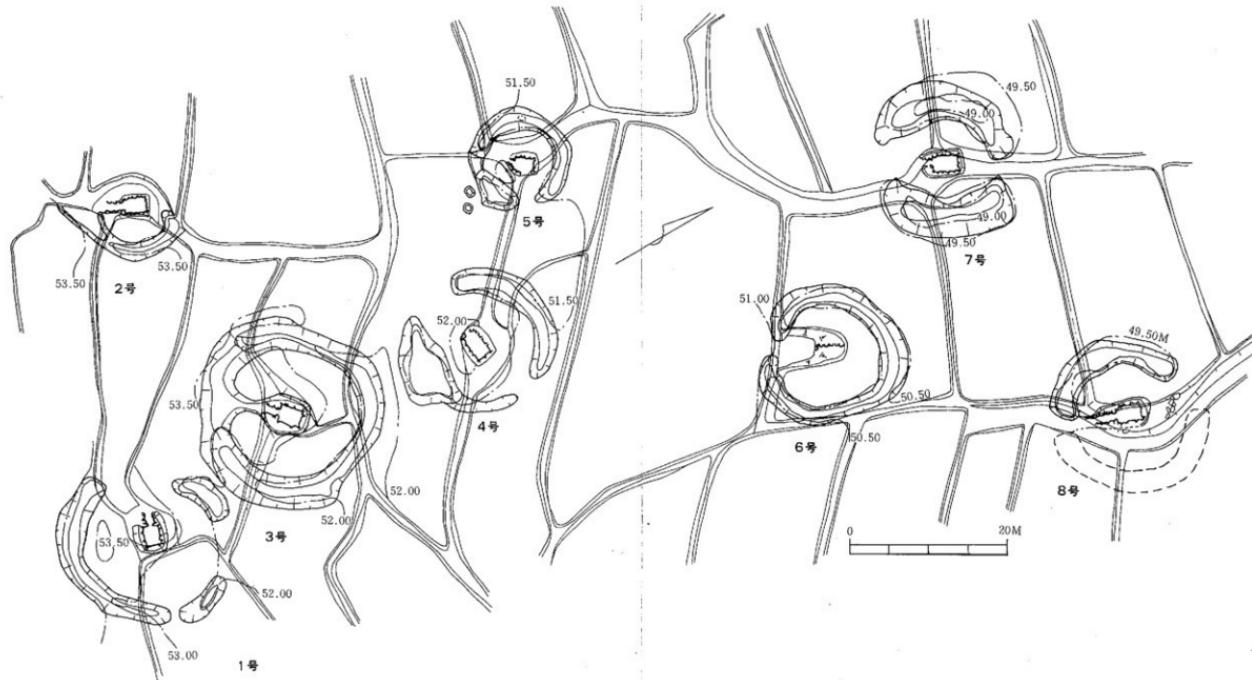


Fig. 1 塚原古墳群現況図・墳丘図 (縮尺1/500)

表紙は 4 号玄室内出土の胸付蓋付短須瓶



調査前と調査終了後の吉武原。

# 吉武塚原古墳群

## 序 文

本市の西南部一帯は、美しい墓盤目をなす田園風景が、条里施行時の姿をほぼとどめて広がっており、条里制の研究に重要な地域とされております。

近年この地域において、ほ場整備事業が行われ、このために消滅する埋蔵文化財の調査の件数も増加の傾向にあります。

このたびのほ場整備事業は比較的小規模な事業でありましたが事業区域内に古墳8基が存在し、その大半が基幹道路にかかるため、教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施いたしました。

53年度の調査に当りましては、吉武天神土地改良事業施行組合のご理解により実施し、54年度につきましては国庫補助事業により実施しました。

本書が市民各位の文化財保護思想育成に活用されるとともに、学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

調査に際しましては、多くの方々のご協力をいただきましたことに、厚く謝意を表する次第であります。

昭和55年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例　　言

- 1 本書は福岡市西区吉武字塚原・天神地区の古墳整備事業に伴い一部原因者の負担と昭和54年度国庫補助事業として福岡市教育委員会文化課が発掘調査を実施した吉武塚原古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 事業は福岡市教育委員会文化課が行なった。発掘調査は二宮忠司が担当し、事務は三宅安吉・国武勝利・岡崎洋一が担当した。調査補助員として渡辺和子・福尾正彦が参加した。
- 3 本書の執筆・実測・写真・トレース等は二宮と渡辺が行なった。また拓影は手嶋寿美子・深見まさ代の協力を得た。
- 4 遺跡の調査・遺物に関して森貞次郎・西谷正・小田富士雄諸先生ならびに武末純一・柳田純孝・飛高憲雄・柳沢一男・力武卓治・塩屋勝利・宮内克己諸氏の助言・協力を得た。
- 5 本書は二宮・渡辺が編集した。
- 6 鉄津の分析に関しては大澤正己氏に依頼し、紙面上夫婦塚古墳群（四箇周辺遺跡調査報告書）の中に収録した。

### 調査の組織と構成

#### 1. 発掘調査の組織

調査委託者 吉武土地区面整理組合

調査主体 福岡市教育委員会

#### 2. 発掘調査の構成

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第二係

事務担当 三宅安吉・国武勝利・岡崎洋一

発掘担当 二宮忠司・柳田純孝・補助員 渡辺和子・福尾正彦

資料整理 山崎由実子・隅田友子・原田順子・的場由利子・手嶋寿美子・花畠照子・岩永真弓・亀井康子・高木正子・江田紹代・雪吉良子・水谷紀世・高木順子

調　　査 牛尾準一・平田正義・古賀俊雄・白土義実・森邦雄・堀川亮二・青柳美智子・結城しづ・柴田信子・白板フサヨ・宮崎はずえ・宮崎文子・惣慶富子・伊藤ミドリ

協　　力 著者 吉住ふさの・仁田原紹代・柴田勝子・柴田タツ子・石橋千恵・牛尾くめ・結城千賀子 他

## 本文 目 次

第 1 章	発掘調査の概要.....	2
1	吉武塚原古墳群の位置と周辺.....	2
2	発掘調査に至るまで.....	2
第 2 章	調査の記録.....	3
	第 1 号墳.....	6
	第 2 号墳.....	7
	第 3 号墳.....	13
	第 4 号墳.....	17
	第 5 号墳.....	29
	第 6 号墳.....	35
	第 7 号墳.....	37
	第 8 号墳.....	44
第 3 章	結語にかえて.....	51

## 挿 図 目 次

Fig. 1	吉武城原古墳群現況図・墳丘図	(縮尺1/500)	
Fig. 2	吉武古墳群と周辺道路分布図	(縮尺1/5,000)	1
Fig. 3	土器分類図	(縮尺1/6)	4
Fig. 4	1号墳現況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 5	墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 6	土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 7	石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 8	土器実測図	(縮尺1/8)	*
Fig. 9	鉄器実測図	(縮尺1/2)	*
Fig. 10	2号墳現況図	(縮尺1/200)	*
Fig. 11	墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 12	土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 13	石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 14	後遺部開発状態実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 15	土器実測図-1	(縮尺1/3)	9
Fig. 16	土器実測図-2	(縮尺1/3)	10
Fig. 17	土器実測図-3	(縮尺1/4)	11
Fig. 18	玉・鉄器実測図	(縮尺1/2・1/3)	12
Fig. 19	3号墳現況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 20	墳丘図	(縮尺1/200)	*
Fig. 21	土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 22	石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 23	後遺部開発状態実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 24	土器実測図-1	(縮尺1/3・1/4)	15
Fig. 25	土器実測図-2	(縮尺1/3・1/4)	16
Fig. 26	玉・鉄器実測図	(縮尺1/2・1/1)	16
Fig. 27	4号墳現況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 28	墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 29	土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 30	石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 31	遺物出土状態実測図	(縮尺1/30)	*
Fig. 32	土器実測図-1	(縮尺1/3)	19
Fig. 33	土器実測図-2	(縮尺1/3)	20
Fig. 34	土器実測図-3	(縮尺1/3)	21
Fig. 35	土器実測図-4	(縮尺1/3)	22
Fig. 36	土器実測図-5	(縮尺1/3)	23
Fig. 37	土器実測図-6	(縮尺1/3・1/4)	24
Fig. 38	土器実測図-7	(縮尺1/3・1/4)	25
Fig. 39	土器実測図-8	(縮尺1/3・1/4)	26

Fig. 40 玉・鉄器実測図-1	(縮尺1/2)	27
Fig. 41 鉄器実測図-2	(縮尺1/3)	28
Fig. 42 5号墳規況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 43 墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 44 土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 45 石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 46 土器実測図-1	(縮尺1/3)	*
Fig. 47 土器実測図-2	(縮尺1/3)	31
Fig. 48 上部実測図-3	(縮尺1/3)	32
Fig. 49 土器実測図-4	(縮尺1/3・1/4)	33
Fig. 50 玉・鉄器実測図	(縮尺1/1・1/3)	34
Fig. 51 6号墳規況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 52 墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 53 石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 54 土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 55 土器実測図-1	(縮尺1/3・1/4)	*
Fig. 56 土器実測図-2	(縮尺1/3・1/4)	*
Fig. 57 玉実測図	(縮尺1/1)	36
Fig. 58 7号墳規況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 59 墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 60 土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 61 石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 62 土器実測図-1	(縮尺1/3)	*
Fig. 63 土器実測図-2	(縮尺1/3)	39
Fig. 64 土器実測図-3	(縮尺1/4・1/6)	40
Fig. 65 土器実測図-4	(縮尺1/4)	41
Fig. 66 鉄器実測図	(縮尺1/2)	42
Fig. 67 玉実測図	(縮尺1/5)	43
Fig. 68 8号墳道部閉塞状態実測図	(縮尺1/40)	45
Fig. 69 8号墳規況図	(縮尺1/200)	折り込み
Fig. 70 墳丘図	(縮尺1/100)	*
Fig. 71 土層図	(縮尺1/60)	*
Fig. 72 石室実測図	(縮尺1/40)	*
Fig. 73 土器実測図-1	(縮尺1/3)	*
Fig. 74 土器実測図-2	(縮尺1/3)	47
Fig. 75 土器実測図-3	(縮尺1/3)	48
Fig. 76 土器実測図-4	(縮尺1/3・1/4)	49
Fig. 77 玉実測図	(縮尺1/1)	50
Fig. 78 ヘラ記号図	(縮尺1/3・1/4)	52
Fig. 79 壁内面の同心円文タタキ	(縮尺1/3)	53

●主な遺跡

1. 牛丸B遺跡
2. 長樂寺址
3. 金武古墳群飯盛D群
4. 金武古墳群吉武R群
5. 金武古墳群吉武Q群
6. 金武古墳群吉武P群
7. 吉武牛谷遺跡
8. 金武古墳群吉武塚原
9. 金武古墳群吉武K群
10. 七反田遺跡
11. 乙石B遺跡
12. 吉武塚原遺跡
13. 金武古墳群吉武O群
14. 金武古墳群吉武N群
15. 金武古墳群吉武M群
16. 金武古墳群吉武H群
17. 金武古墳群吉武J群
18. 乙石C遺跡
19. 金武古墳群乙石日群
20. 金武古墳群乙石G群
21. 乙石北遺跡
22. 金武古墳群吉武I群
23. 金武古墳群吉武F群
24. 金武古墳群吉武G群
25. 金武古墳群吉武E群
26. 金武古墳群吉武D群
27. 金武古墳群吉武C群

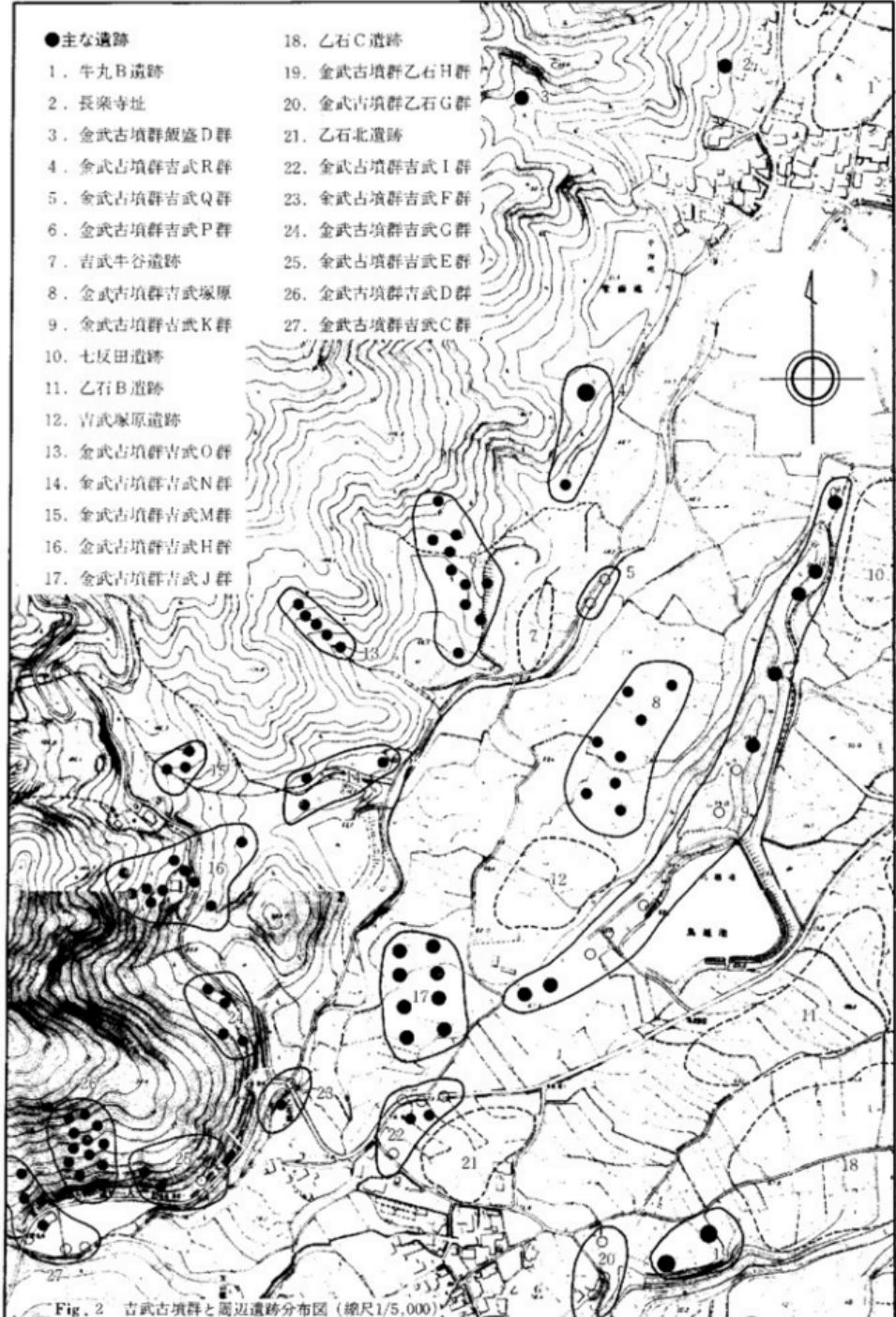


Fig. 2 吉武古墳群と周辺遺跡分布図 (縮尺1/5,000)

## 第1章 発掘調査の概要

### 1 吉武塚原古墳群の位置と周辺

背振山系から派生した山塊は、西山・飯盛山・叶岳から長垂の海岸まで続いている。ここで糸島平野と早良平野を分断する。西山・飯盛山・叶岳・長垂山の東山麓は多くの低丘陵形成がみられ、これらの低丘陵上には10数基を単位とした群集墳が数多く存在し、「サワラ古墳群」<sup>注1</sup>中の拾六町支群・羽根戸・野方支群・長石・乙石・萩原支群に分けられている。また古代における怡土より早良郡方面へ向ける重要な交通路でもあった日向峠も西へ2kmの地点にあり、歴史的・政治的にも古くよりまとまるある地域であった事が窺われる。

本古墳群は早良花崗岩を母岩とする飯盛山の東山麓に位置し、長石・乙石・萩原支群の中に包括されている。飯盛山に源を発した日向川は古墳群の西側山麓に沿って北流し、東側は西から北へとのびる舌状の低丘陵のために古墳群は東西を限られ南から北へ向かって、ゆるやかな傾斜をもつ標高49mから53mの間の一見盆地様相を示す平坦な水田に立地している。

当古墳群の周辺には先土器・繩文・弥生時代の遺跡として吉武塚原・吉武牛谷・牛丸A・B七反田・萩原・乙石北・乙石A~C・乙石浦田の遺跡が確認されている。さらにこの周辺一帯には金武古墳群吉武B~K・M~Q群・金武乙石B~C・E~G群、飯盛古墳群D群が密集して形成されている。当古墳群もそれらの一部をなすことはいうまでもなく、その中で一番標高の低いところに立地している。東側の舌状の低丘陵上には装飾古墳（吉武K群）がある。また「筑前国統風土記」の「……乙石の北二町斗に石窟二あり。共に口は南にむかえり」にみられる夫婦塚1・2号墳は南に所在する。この古墳は緊急調査が実施されており、五輪鏡が出土した。<sup>注2</sup>また西側には、やはり調査の実施された乙石C群1・2・3号墳、吉武E群3・4・5号墳が所在し、調査の結果斜面に構築された小形の横穴式石室であることが明らかとなった。なお当古墳群は吉武L群として報告されていたが、本書では吉武塚原古墳群とした。

### 2 発掘調査にいたるまで

昭和53年に吉武天神土地改良事業組合から水田利用再編対策事業としては場整備事業を実施するが地区内に古墳があるので調査してほしいとの依頼があった。分布調査により地区内に8基の円墳が存在し、再三の協議を重ねた結果、保存することは困難との結論に至り、発掘調査を実施することとした。調査は昭和54年3月から実施することとし、3月は組合から作業員等の動入をお願いし、昭和54年4月から国庫補助事業を受けて調査を実施することとなった。

## 第2章 調査の記録

### 各古墳の概要

調査記録の詳細は、各項で記載するのでここでは各古墳の特徴にふれてみたい。1号～8号墳まですべて周溝を持つ古墳群で、その周溝のあり方も5つのタイプに区別できる。石室開口方向はほぼ西側に1号と4号、南側は3号、ほぼ北側は2号、5～8号である。墳丘の形態・大きさは下記の表で示すごとく周溝まで含むと最大が45m、最小でも26mと規模が大きい。

出土遺物も残存状態から考えられない程の出土量である。1・3・6号墳は盜掘を受けて量的には少なかったが、他の2・4・5・7・8号墳の石室・周溝から多種多様の器種が検出された。特に4号玄室から出土した一括資料、1・8号墳から出土した陶質土器、5号墳から脚付六連杯、4号玄室の脚付有蓋壺・鋳造鉄斧を含む鉄器・玉類を検出した。

第1表 墳丘計測表 \*内径・外径・周溝(幅・深さ)は、玄室センターを中心に最大部分を計測したものであり、細部のデータとは若干のくい違いがある。(床面高は標高を示す)

	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳
墳形	不整円形	不整円形	円形	不整円形	円形	不整円形	不整円形	不整円形
方位	N-16°-W	S-28°-W	S-41°-W	S-86°-W	S-38°-W	S-36°-W	S-27°-W	S-15°-W
石室面積	4.75m <sup>2</sup>	4.94m <sup>2</sup>	6.09m <sup>2</sup>	6.70m <sup>2</sup>	4.14m <sup>2</sup>		6.20m <sup>2</sup>	6.60m <sup>2</sup>
床面高	53.35m	53.34m	51.54m	51.78m	51.88m	50.86m	(50.17m) (49.89m)	49.62m
内径	29.7m	9.6m	31.8m	22.5m	15.7m	24.8m	19.5m	12.5m
外径	40m	14m	45.4m	41.5m	26m	34.8m	39.2m	18.5m
周溝幅	6.2m	4.3m	6.0m	5.3m	5.0m	5.0m	8.0m	7.0m
周溝深さ	0.75m	0.25m	0.25m	0.25m	0.25m	0.25m	0.25m	0.35m

### 土器

1～8号墳の石室内・周溝内より数多くの須恵器・土師器が出土した。実測を行なった土器だけでも500点以上で、まだ実測可能な資料が数多くある。本報告書では、事実の報告という点から図面類を主に収録することにとめた。このため紙面の都合上、土器等の説明を簡略しなければならなかつた。このため多量にある須恵器の杯蓋・杯身・有蓋高杯・無蓋高杯・魁等について説明を簡略にするためにあらかじめいくつかに類別しておきたい。

須恵器　杯身・蓋は5類に大別する。I類の蓋は体部と天井部との境に凹線があり、口縁内面には段をもつ。杯身では立上りが高く(1.3cm内外)やや内寄する形態をもつ。ヘラ削りは2/3～1/2程度。II類は口縁内面に弱い段をもつが天井部と体部の境には凹線は認められない。杯身はI類より立上りは低く、1cm前後、I類より内寄する。ヘラ削りは1/3程度。III類は、小型化が著しく、杯蓋では内面の沈線、体部と天井部との境もきえて先端部も丸くおさまる。杯身は立

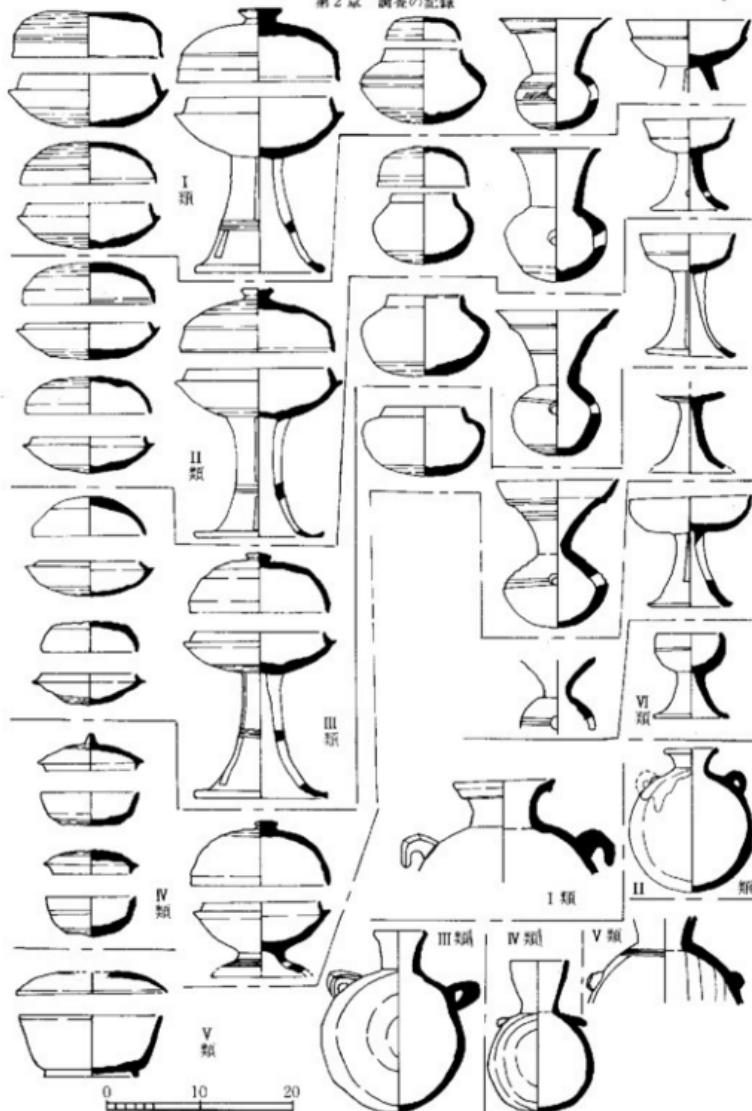


Fig. 3 土器分類図（縮尺1/6）

上りが一段と低くなり、強く内弯する。IV類は身と蓋とが逆転する形式で、内面かえりの先端が口縁端部より下方に出る蓋である。V類はかえりが口縁端部より内側に入る蓋で、身は高台付。

**有蓋高杯**は4類に大別した。I類は受部の立上りが1.6cm前後と高く、全体にシャープな成形である。蓋は大型で天井部と体部との境に凹線を持ち、内面にも強い段を付す。ヘラ削りは2/3程度。II類は、I類より大型となる。立上りはI類と同様であるがシャープさがなくなり、蓋も同様である。蓋の口唇部に烈点文を付す。ヘラ削り2/3程度。III類は立上りがII類より内弯し受部自体大きくなる。蓋も同様に大型になる。天井部と体部との境・内面の段も消え、つまりも小さくなる。ヘラ削りは1/2程度。IV類は短脚の高杯である。脚部は一段と低くなり、これに対して受部は体部から口縁部まで肩を張らずにのびる。蓋もIII類と同様に段は消え、器高が高くなる。ヘラ削りは1/3程度である。

**無蓋高杯**は6類に大別した。I類は体部と口縁部との境に段を付す。稜・口縁部も鋭くおさめる。II類は、I類よりは稜が鈍く、口縁部も丸みをもつ。III類は口縁部と体部とを区別する稜がなくなり、1~2条の沈線にかわる。IV類はIII類同様稜がなくなりカキ目等を付す。口縁部はわずかに外反しながら垂直に立上る。V類は杯蓋を反転して脚部に接合した形態を持つ。VI類は口縁部が丸みを持つ盤形の杯部に脚をつけたもので、杯部外面に1条の沈線がめぐる。

**迺**は5類に大別した。I類は頭部の径が大きく外反しながら口縁部との境で稜を持つ。そこから強く外反して口縁端をおさめる。II類は、I類と同形態であるが口縁部の稜から上部がない異形である。III類は頭部から口縁部の高さがI類より高く、頭部径は小さくしまくる。IV類はIII類よりさらに頭部がしまり口縁径も広がる。V類はIV類より頭部がさらにしまり小型。

**短頸壺**は4つに大別できる。I類は最大径が胴部中位に位置する。頭部で段を持ち、やや内弯しながら口唇部まで達する。口唇部内面に段を施す。II類の最大径はI類と同様に胴部中位にある。I類ほど胴部は張らず、そのまま頭部・口縁部に達する。口縁内面には段を持つがやや丸みを持つ。III類の最大径は中位よりやや上部に位置する。口縁部はわずかに内弯する程度である。IV類の最大径は頭部下位に位置し、肩の張った感が強い。口縁部もIII類より内弯し、口唇部も丸みを持つ。

**提瓶**は5類に大別できる。I類は、頭部からやや外反ぎみに口縁部に達し、ここで縁部は下へ折れ曲がる。両耳は下端に接しない。II類は、頭部から外反しながら口唇部で一段と外反し丸く仕上げる。扁平な体部の両肩に半環状の把手がつく。III類は頭部から外反しながら口唇部まで達するが口唇部で強く内弯して漏斗状をなす口縁部がつく。体部の耳は下方でわずかに接する半環状的な把手がつく。IV類は、頭部からわずかに外反しながら中ほどでやや内弯ぎみとなり口唇部を丸くおさめる。小型で、体部の肩につく把手も退化している。V類は、口縁部が欠損しているが、頭部から外反しながら垂直に近く立ち上るものであろう。把手は乳頭状の粘土を貼りつけたものである。

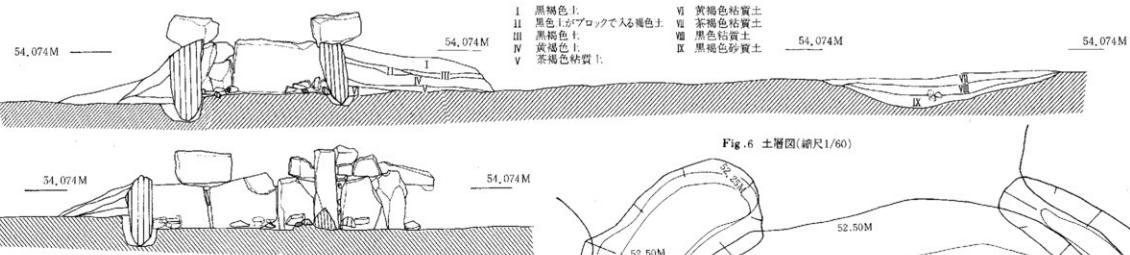


Fig. 6 土層図(縮尺1/60)

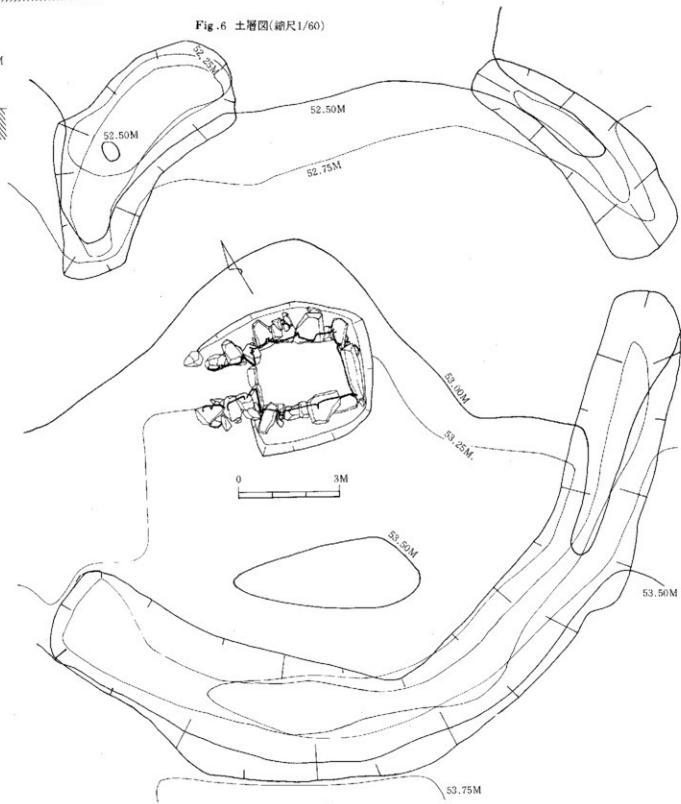


Fig. 6 土層図(縮尺1/60)

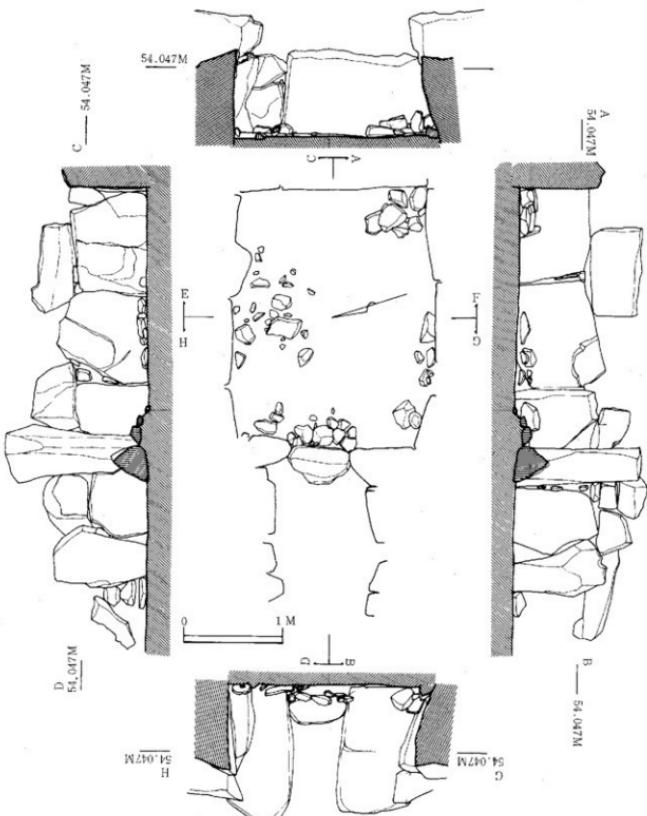


Fig. 7 石室実測図 (縮尺1/40)

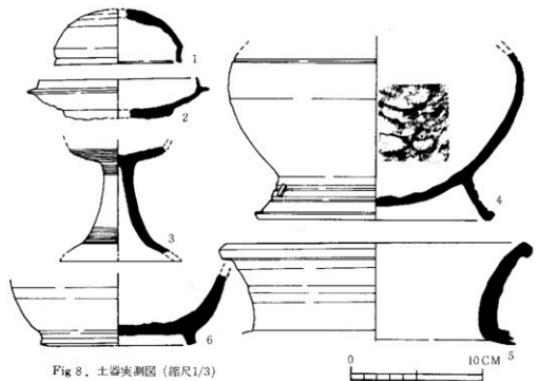


Fig. 8 土器実測図 (縮尺1/3)

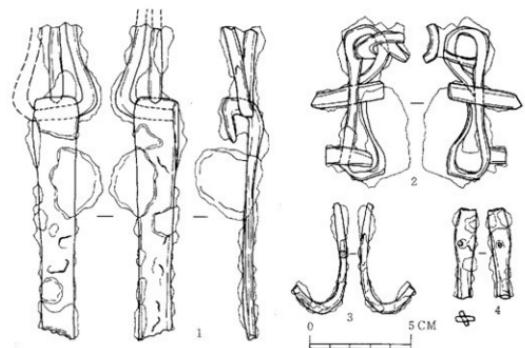


Fig. 9 鉄器実測図 (縮尺1/2)

## 第 1 号 墳

### 1. 墳丘 (Fig. 4・5 : PL. 1)

墳丘はすでに開墾されて築造時の詳細は知る事ができないが、墳丘形成のための盛土は東西及び南北の溝に挟まれた整地面を基底として行なわれたものと推定される。石室掘り方は浅く壁石の裏込めも粗雑であり埋土もそれほどしまりをもたない。古墳北側部分は巾3.0m、深さ0.3~0.45mのU字状の溝を等高線に直交して開削し溝にて区切る。溝の底は西側が低く南北がそれぞれ高くなり東西にブリッヂをもつ。東側部分にも巾2.6m、深さ0.25mのU字状の溝を等高線に直交して開削して区切る。この溝も東西が高く北側が低い、南北にブリッヂをもつ。南側部分は等高線上に平行に開削が行なわれ、東側が低く西はほぼ前庭部近くで浅くなり消滅する。この溝も東西にブリッヂをもつ。

### 2. 石室 (PL. 2)

東西及び南北の溝に挟まれた、やや北寄りの墳丘基底面に等高線にはば平行して構築されている。主軸はN-16°-Wにとる単室の両袖型横穴式石室である。天井部はすでなく、奥壁も腰石のみという状態であった。玄室は奥巾1.90m、前巾1.80m、左壁長2.4m、右壁長2.6mを計る。腰石には巨大な割石を用いているため、左壁の一部が垂むものの全体的には直線に近い壁線をなしている。玄門部には単純な両袖を設ける。袖石にも巨大な割石を用い垂直に立てる。その高さは床基底面より左1.2m、右1.1m、袖巾は左0.4m、右0.6mを計る。玄室床面は攪乱を受けてはいるが部分的に敷石があったことを窺わせる。袖石の高さまでに玄室の壁面は、とり除かれているが、大きな割石はそのままである。現存の壁面での石積み方法はレンガ積みと重箱積みが併用されていて、下端より上端に行くにしたがって石室内面にせり出す様相を示す。壁面間には力石などの使用はみられない。各壁面隙間に転石を填める。羨道部は、腰石には、やはり大きな割石を用い、この腰石の上にやや小ぶりの転石、割石を積みあげている。右袖石との隙間に小石が埋められて固定されている。

### 3. 遺物 (Fig. 8・9)

(1)須恵器 (Fig. 8) 2・3・6は各々Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類に類別された。1は短頸壺の蓋と考えられる。4陶質土器で高台付長頸壺か広口壺であるが胸部上半部を失なった現況では明確にしがたい。台脚には透しが3ヶ所に配されて灰黒色堅緻な焼成で胎土も精良である。調整は全体に叩きを施し、その後外面はヘラ削り、ナデとを行い形を整えていて内面はナデで仕上げ叩きの痕が明瞭である。5は中型壺の口縁部破片で頭部からゆるやかに短く外反し、口縁端部は外下方に鈍く引き出される。内外ともにナデ調整。外表に部分的に自然釉がかかる。

(2)鉄器 (Fig. 9) 1は厚さ2cmの鉄板の一端を折りまげ刺金のついた鋏具と連結させている。鎧金具の一部と考えられる。2~4も馬具の一部である。

## 第2号墳

### 1. 墳丘 (Fig.10, 11 : PL. 3)

すでに程んど封土は失なわれているために、その規模は知ることができなかつた。唯として残る僅かの墳丘に円墳であった事が窺われる。

**地山整形** 東斜面等高線に沿つて南西に開口する。墳丘構築前の地山整形は、南から北東にかけて墳丘を区画するための溝の掘削とその内側の整地が認められる。石室、北から南西部の地山整形は未調査のため明らかでない。溝は羨道部から石室奥壁の方向へ不整形に半周する。溝巾は一定せず 2m ~ 1.5m, 深さは 0.3m ~ 0.25m を計る。周溝は北東部ほど浅くなり消滅する。羨道部付近では徐々に浅くなり平坦部をつくる。北西側の調査が行なわれていないので断定はできないが、羨道部と玄室延長上にブリッヂのつく形態をもつ周溝であろうと推定される。

**玄室** 奥巾 1.9m, 前巾 1.5m, 左壁長 2.5m, 右壁長 2.68m を計る。腰石は小ぶりの転石・割石を用いている。左壁面の石積み技法は原則的にはレンガ積みで一部に重箱積みもある。隙間にはやはり小石を詰めている。いずれの壁面も腰石から上段に行くにしたがい玄室内にせり出す。現存する最高所は左壁面で床基底面より 1.0m を計る。玄門部には単純な両袖を設ける。袖石もやはり小ぶりの割石を用い垂直に立てている。その高さは床基底面より左 0.7m, 右 0.8m で袖巾は左で 0.55m, 右で 0.3m を計る。玄室内の床面は全面敷石であったと考えられるが擾乱のため明確でない。羨道は前巾 0.48m, 奥巾 1.1m で、入口がわずかに開く。羨道床面は玄室床面より一段高く左右壁面も玄室壁面とは構成に相異が認められる。左右両壁は小ぶりの転石・割石を貼石的に据えただけである。玄室と羨道比は 1 : 1 になり、石室の構築プランでは古い時期のものと考えられる。**閉塞施設** 閉塞は羨道から樋石を覆う長さ 1.5m に羨道巾いっぱいに存在する。樋石を根石として比較的同じ大きさの転石・割石を積み上げて閉塞したもので現存高は 0.5m であるが、元来は天井石との間が完全に密封されていたものと考えられる。石積みは雑然とした感じを受けるが、内面では面がそろえられ整然とした石組の状態で組み上げられている。

### 2. 石室 (Fig.13 : PL. 3)

主軸を S - 28° - W にとる单室の竪穴系横口式石室である。天井部はすでに右壁は全て腰石のみであった。石室は浅く狭い掘り方が設けられ、しかも玄室のまわりにのみで直線的で方形になる。石室は東側に向って、ゆるやかに傾斜する等高線上にはば直交して構築されている。掘り方と腰石間には余裕はなく割合に接近し、奥壁部分では深さもなくなっている。

### 3. 遺物

石室内はすでに盗掘を受けていたにもかかわらず多くの遺物の出土を見た。これらは擾乱のため原位置を保つてはいないが、2号墳築造時と追葬時の時期決定の資料となりうる。

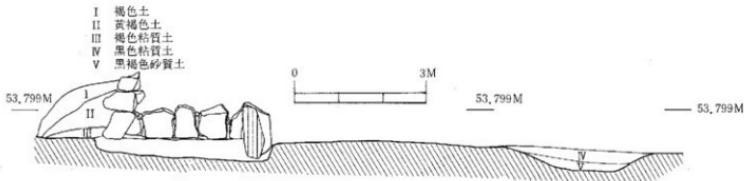


Fig.12 2号填土剖面(縮尺1/60)

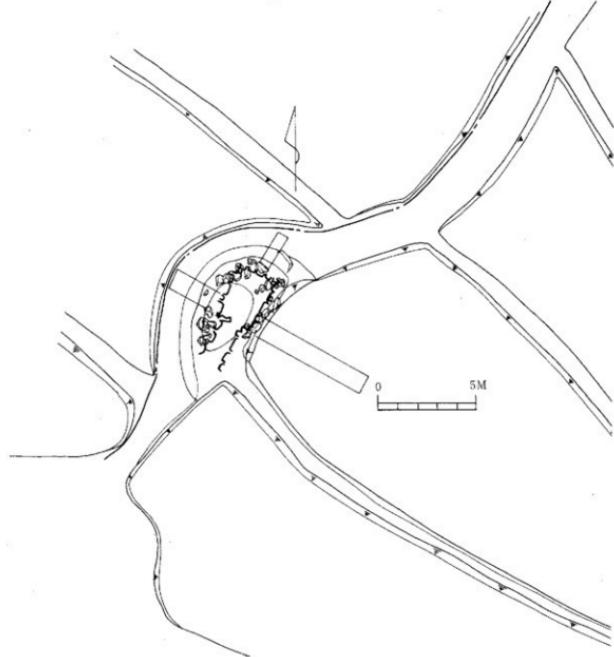


Fig.10 2号填现况图(縮尺1/200)

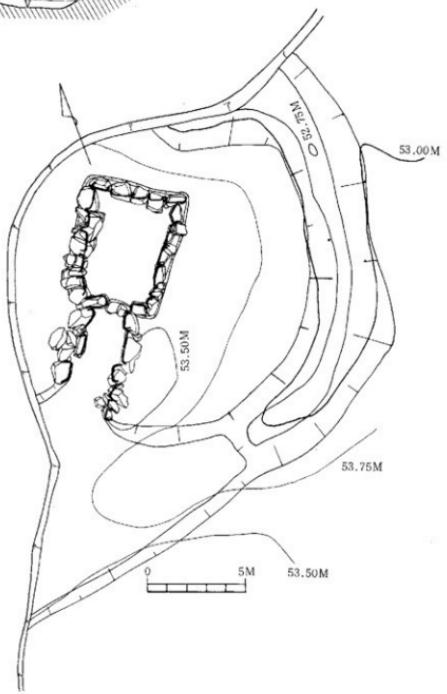


Fig.11 填丘图(縮尺1/100)

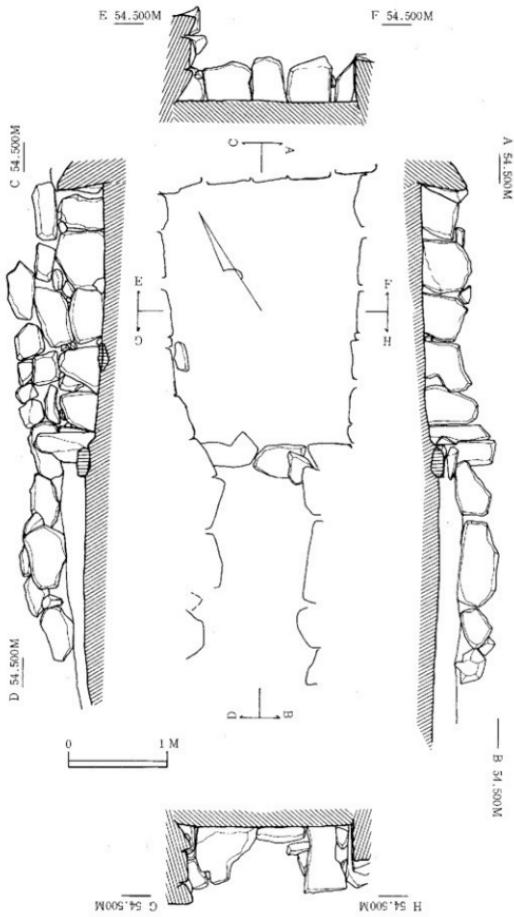


Fig.13 石室实测图 (编1/40)

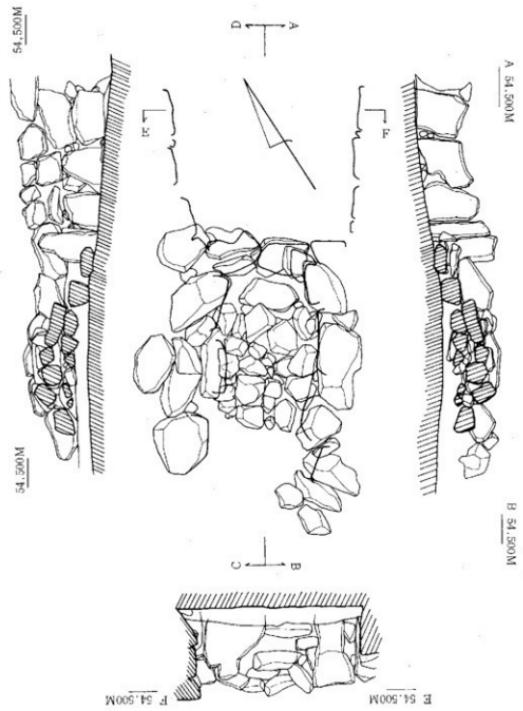


Fig.14 溪道部断块状实测图 (1/40)

### 1. 土器 (Fig.15・16・17)

**壺** (1~22) 1~7はI類に分類、体部と天井部との境にやや鈍い凹線が巡り、ヘラ削りが約2/3程度のもの、一層鋭い凹線が巡り口縁内部には段を付すものにわけられる。8~13はII類で、体部と天井部との凹線がなくなるが、口縁内面には段がつくもの、口縁内面の段がなくなり僅かになごりをとどめるものに分れる。14~18はIII類。小型化し天井部のヘラ削りが難になり、ナデを加えたもの。19~22はIV類で、口縁内面のかえりは下方に鋭いもの、つまみのつくものにわかれる。

**杯身** 23~31は口縁内面に段を付し、受部の直に立ちあがるもの。立ちあがりがやや内傾し、口縁内面の段がなくなるもの、立上りは垂直に近く内窩し外に張り出すものにわかれる。32~35はIII類。立上りは低く著しく内窩するもの、身と蓋とが反転する前のものにわけられる。

**土師器** (36) 小形の手すくね土器で口縁部・底部を欠失する。内面には粘土の貼りつけや指頭による調整が顕著である。

**甌** (37) 口縁部と底部を欠失する。体部中央に二条の凹線をめぐらし、その上方から頸部までにカキ目を加える。口頭端部は細く外反して伸びている。体部内面、口縁部内外面ともにナデ調整が行なわれている。

**脚付長颈甌** (38) は肩部のやや張った球形に近い器体で垂直に立ちあがる口頭部がつき口端部とは一条の浅い凹線で分れる。最大径は中位にあり、肩部には二条の浅い凹線を二ヵ所に入れ、その間にヘラによる斜め方向の割み目を施して胴部と分ける。胴部と脚部とつながる破片はもたない。脚部には三方から三角形と台形の透しを2段配する。上巾の透しは二条の浅い凹線でわかれて、さらに中段透しの下にも浅い凹線をいれ脚裾部との境をなす。また脚端部近くにも一条の浅い凹線を配する。脚部はハの字の形に張り出し安定感をもつが、いびつである。胴部、脚部はナデ調整を施し、胴部の内面は同様にナデ調整。外面には自然釉がかかり、口縁部は欠失している。

**甌** 43~44は周溝より出土した中型の甌の破片である。ともに体部の破片があるが接続しない。43の口頭部は短く外反する。口端部は段をつくるほぼ垂直に立ち、外面・内面ともに丁寧なナデ調整を施している。頭部の外面は一部に自然釉がかかること、平行叩きを施した後、ナデ調整を行いつぶ叩き目を消している。頭部内面は同心円の叩きの後ナデ調整を施している。44の口頭部も短く外反するが、端部は肥厚し段がつく。頭部の外面は平行叩き、内面は同心円叩きが施されている。端部内外面ともにナデによって調整されている。

**横瓶** (45) 口縁部は外反し、口縁部はやや尖る。口縁から肩部までの外面の叩き調整は丁寧に施されている。内面は円孤叩きで仕上げられているが、底部付近に行くほど叩きは難で焼成時の粘土の膨張が底部付近に見られる。体部には自然釉がかかる。

**白磁** (39~42) いずれも白磁の底部である。釉のかかりから玉縁の口縁をもつ器種であろう。

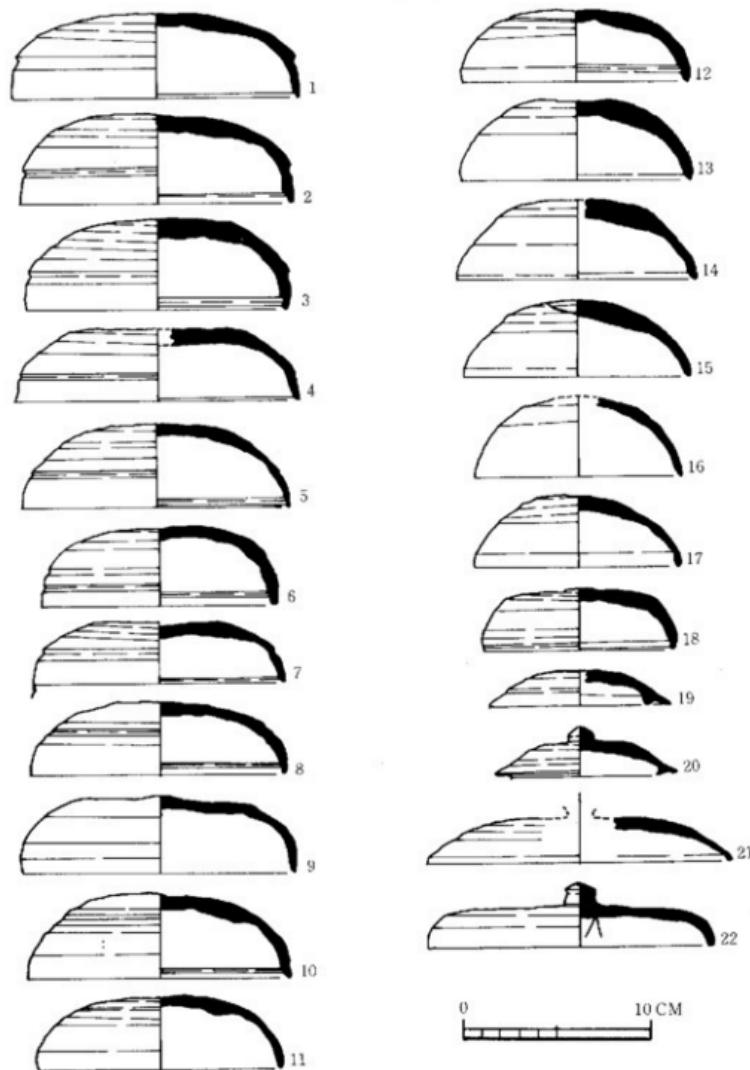


Fig.15 2号出土陶器実測図-1 (縮尺1/3)

第2章 調査の記録

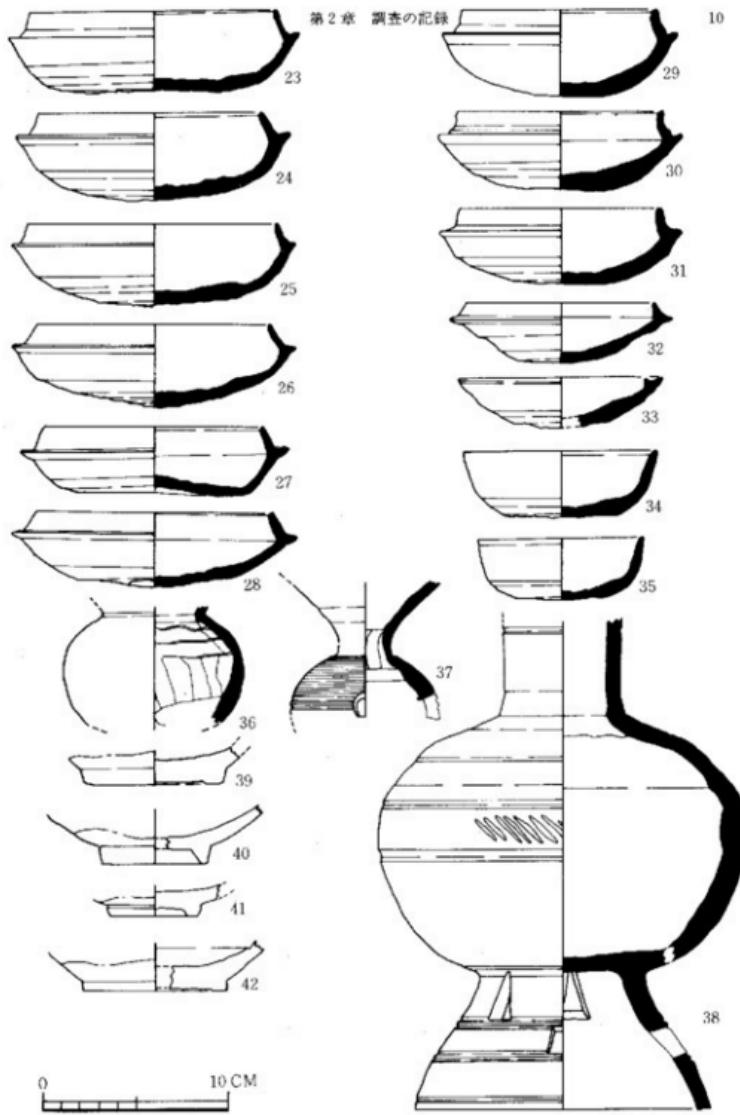


Fig.16 2号墳出土土器実測図-2 (縮尺1/3)

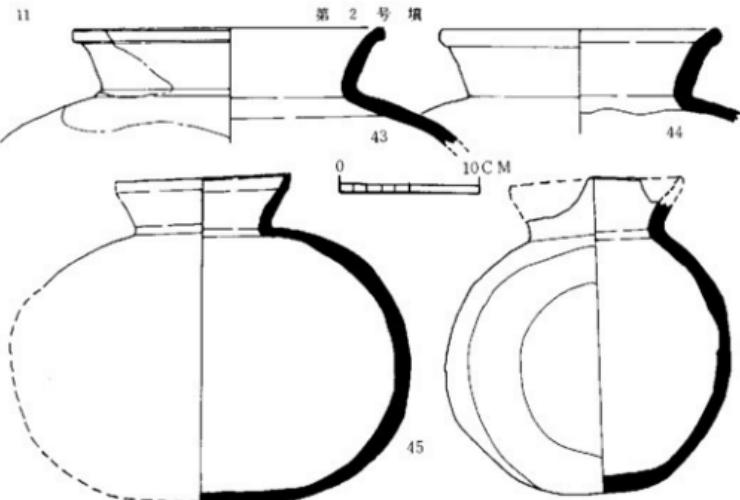


Fig.17 2号墳出土土器実測図-3(縮尺1/4)

(2) 鉄器 (Fig.18)

**鉄先 (1)** 刃部は緩か曲線を呈する、やや大型のU字形鋤先である。耳部は両端ともに完存し、刃部巾15cm、全長12.7cmを計る。刃部は中央から耳部の境まで付けられ耳部外側には認められない。木柄挿入部は前・背二面に分かれ浅めである。

**直刀 (2・7・9・11)** 2は切先・茎は欠損していて全長は不明である。背は平造りで断面二等辺三角形を呈する。7・9・11は一括して検出され1振分と思われるが、切先・茎部分を欠き全長は不明で、背は平造りで断面は二等辺三角形を呈する。

**刀子 (8)** 周溝より出土したやや大型のもので、断面二等辺三角形を呈し、切先部分を欠失する。背は平造りで闊は刃部部分につく。

**鉄鎌 (4～6)** 8本分の出土をみたが、いずれも細片であり図示は3点にとどめた。4・5は茎部分で木質が残存する。6は広根の斧鎌式に属し、身は平造りで頭部、茎は欠失し不明。

**馬具 (12・13)** 共に銜の合せ部分で、両端に環をつくり引手、鏡板と鉢ませ連結させる。他にも同一個体とみられるものが出土しているが現状では復元はできない。

**管玉 (3)** 濃緑色の碧玉製で、長さ2.6cm、身巾1.1cm前後を計る。孔は片側からの穿孔で、小さい孔の方の周囲は磨きが雑である。

第2章 調査の記録

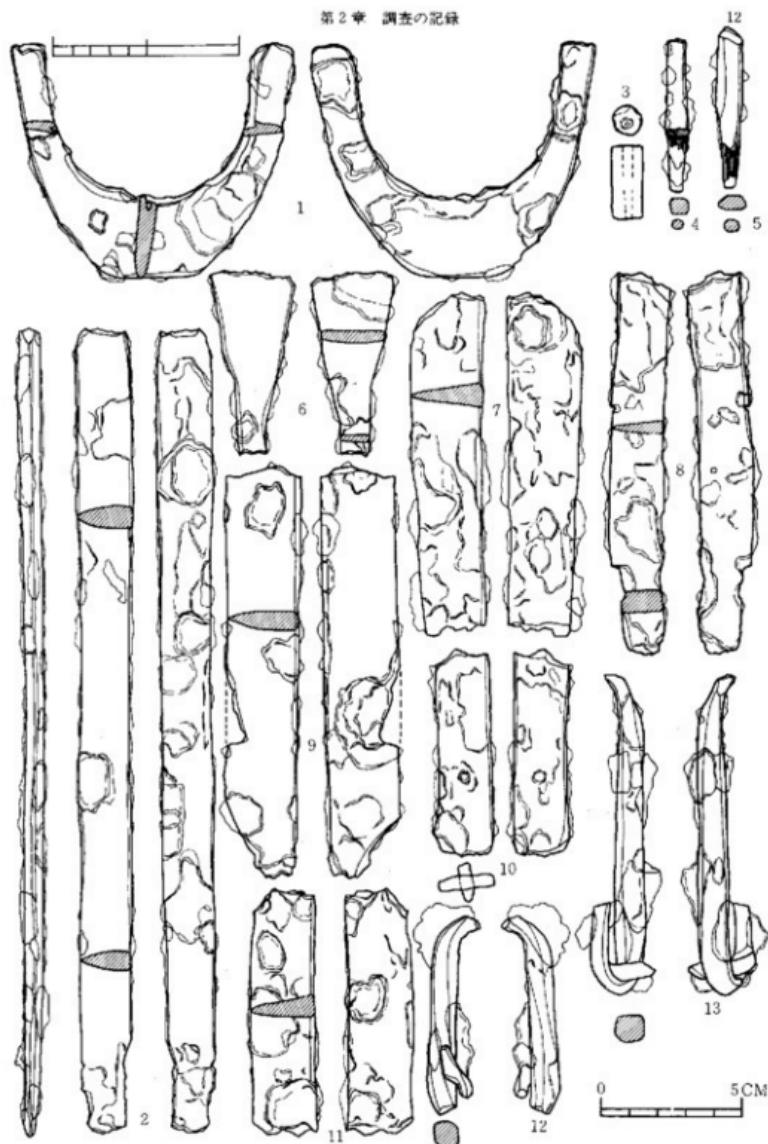


Fig.18 2号墳出土玉・鉄器実測図 (縮尺1/2, 1/3)

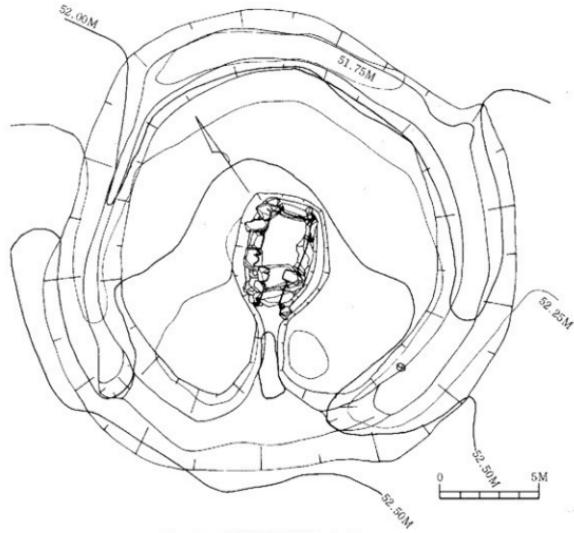
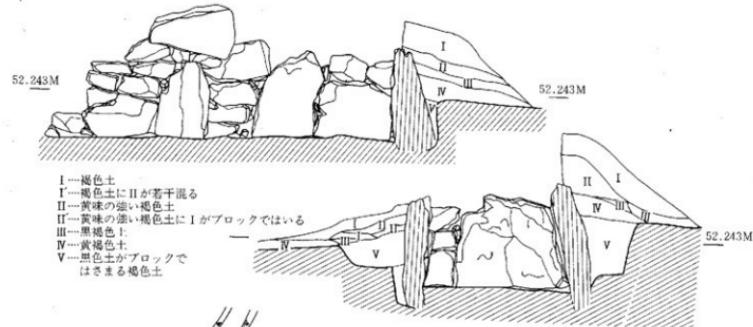
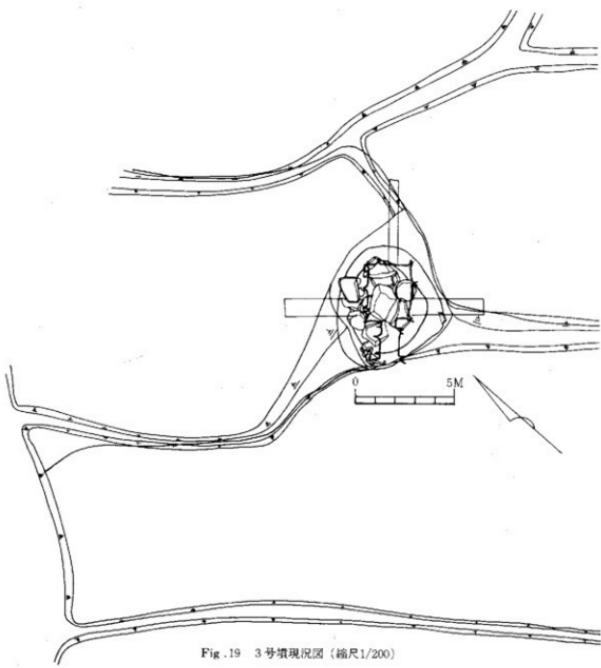
### 第3号墳

#### (1) 墳丘 (Fig.19・20: PL. 4)

3号墳は標高52.5m～52mに位置し、北東方向に延びる等高線上に直交する様に石室は構築されている。したがって古墳構築のための地山整形は石室を周囲する溝の掘削によりなる。墳丘は開墾のために、すでに大半が失なわれており、玄室と推定される石が見えていて、畦部分に利用された墳丘が残るのみであった。溝の内側墳丘基底面は僅かに傾斜をもつものの、ほとんど自然地形を利用したと考えられる。溝は北東部が深く、前庭部付近は浅いU字状をなしている。東西の溝は若干のゆがみをもつものの、ほぼ円形に全周し、羨道部から墓道部へと続く。しかし周溝底面が北東部が深く、羨道から墓道部に延びる溝の底面は他の部分に比較して高くつくられている。そのために石室ならびに羨道、墓道部への水の流入を防ぐ様相を示している。墳丘の残りから盛土を推測すると、さほどの複雑さはみせない。石室の掘り方は、左右では腰石に巨石を使用しているためか、二段に深く掘って、腰石の安定をさらに増す様になされている。深い掘り方の層上は細くはないが、小石・粘土等を填てて比較的硬くしまっている。奥壁部は一段の掘り方だが深く、やはり粘土・小石等で充填し腰石の安定を図っている。盛土は石室掘り方が、さほ埋った段階から石室を裏込め、固定することを兼ねながら一気に盛土し、墳丘の形を整形したものと考えられる。

#### (2) 石室 (Fig.22: PL. 5・6)

東西の溝に挟まれた、墳丘基底面のはば中央に位置し、主軸をS-41°-Wにとる両袖の單式横穴式石室である。石室は南西方向に開口し、天井部を失なった玄室部と天井部を残したままの羨道部が存在する。玄室内は盜掘による擾乱が著しい。玄門部には閉塞に使用されていた割石や転石が無造作にあった。玄室床面は、基盤とする赤褐色粘土上に埋土をしその上に敷石を敷きつめていたと考えられるが、ごく一部にその名残を見せるだけであった。奥巾2.1m、前巾2.1m、左壁長2.8m、右壁長2.68mを計る。残存する最高所は玄門付近の四段であるが、石積みは目路とのおった重箱積みを用いて下端より上端に行くにしたがって石室内面にせり出す様相を呈している。腰石は奥壁・側壁に巨大な転石を用いて巨石墳の様相を示している。羨道部は比較的良好な状態で残っていた。玄室の石材に対しやや小さめの石を使用している。袖石には大きな石を一石ずつ垂直に配し、天井との間隙に小ぶりの転石、割石を埋めて天井を固定している。羨道部から墓道部にかけては、閉塞が存在する。閉塞は樋石を根石として元来は天井部まで積まれていたと考えられるが、擾乱のため現存高は0.5mである。その閉塞施設のために羨道部床石は、きれいに残っていた。羨道部は玄門部がわずかに聞く様相を呈する。側壁の遺存状況から、もう少し墓道部へ続く側壁が存在したものと考えられるが現状では明らかでない。羨道部は擾乱をうけた転石が積まれていることから、あるいは副室の要素を兼ねていたかも知



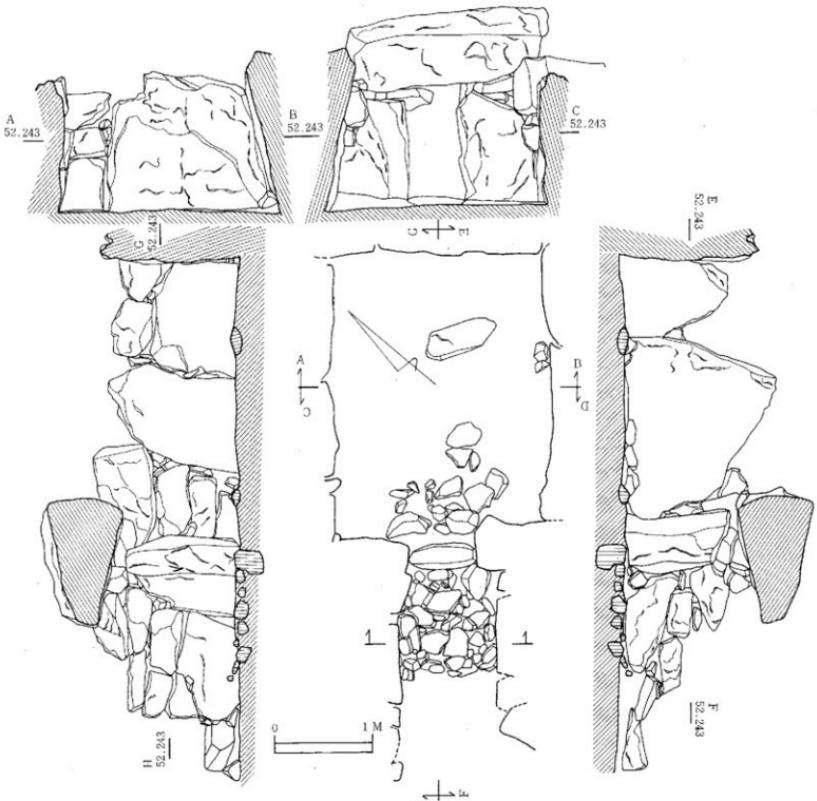


Fig. 22 石室実測図 (縮尺1/100)

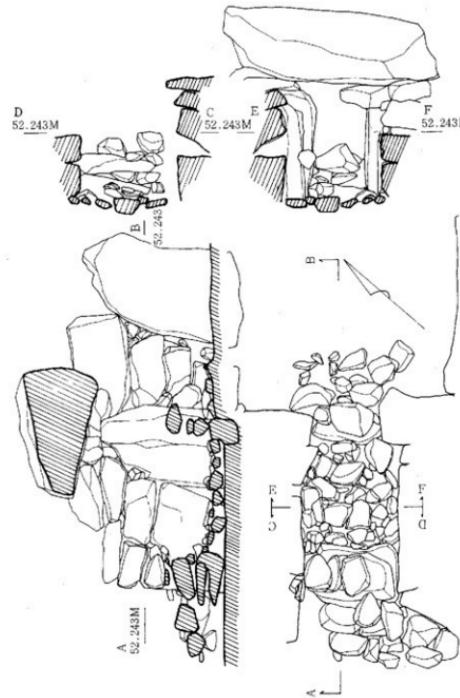


Fig. 23 通道部実測図 (縮尺1/40)

れない。閉塞は狭道端部では第2樋石と考えられる石を根石として積まれていて雑然とした感じをうけるが、内面は面がそろえられ整然とした石組の状態で仕上げられていたと考えられる。狭道部の天井石も残っていたが、間隙の石がとれていたために落ちる危険性があり除去した。狭道部は小ぶりの転石を四段に配し下段より上段に行くにしたがい狭道内面にはりだしている。

### 3. 遺物 (Fig.24・25・26)

玄室内はすでに盗掘を受けていて原位置をたもつたものの出土はみられなかったが、擾乱土や周溝内より出土した。

#### (1) 土器 (Fig.24・25)

**蓋杯** (1～4) 1～3はII類で、体部と天井部の凹線がなくなるが、口縁内面には段がつくもの、体部の張りがなくなり口縁部も内傾したものに分けられる。4は立上がりが低く、著しく内弯するものである。杯身 (5～10) II類にはいる。体部の張りがなくなり、口縁部の立上がりも内傾する。ヘラ削りは1/2～1/3になるものに該当する。

**短頸壺** (11) 閉塞部より出土した、底部付近を欠失する破片である。口端部は短く垂直に立ちあがる。頸部に一条の凹線をめぐらし口縁部との境をなす。体部中位にも一条の凹線をいれ胴部とわける。内外面ともにナデ調整が丁寧に施されている。

**甌** (12・13) 12は体部上位に二条の凹線をめぐらし、その間をヘラによる斜め方向の刻み目を配する。口頸端部は細く外反して伸びる。体部下位は不定方向のヘラ削りを施し口頸端部から口縁にかけてナデ調整で、内面はシボリ痕が顕著である。13の口頸端部は12よりやや太めで外反して伸び一条の浅い凹線により口縁部との境をなす。口縁部付近には細い波状文がある。体部上位には一条の凹線をめぐらし、その下方にはカキ目を配している。凹線下の刻み目はカキ目の後に加えている。体部下位はヘラ削り、中位から口頸部はナデ調整を施している。

**甌** (14～17・21) 14は口端・体部を欠失する。口頸部は二条の凹線をめぐらし、その間に細い波状文を配し、胴部と分れる。胴部の外面は平行叩きに自然釉がかかる。内面は同心円・円弧叩きの併用。口頸部はナデ調整。15～16・21はいずれも中型の甌である。15の口頸部は強く外反し、口縁端部は外下方に鋭く引き出され端面下に凹線をめぐらす。体部外面は平行叩き、内面は叩きの後ナデ調整。16の口縁は短く、やや外反する。口縁部は丸く肥厚して外に突出する。縁部は内外面ともにナデ調整を施す。肩部外面は平行叩きの後カキ目を加える。内面は同心円叩きにて調整。17の口縁部は短く外反する。端部はさらに鋭く外反し、内面に段がつく。内外面の調整は16と同様である。21口縁部を欠失する。口頸部は肩部より、ゆるやかに外反する。最大径は上位にあり、外面の調整は平行叩きの上にカキ目を加える。体部中位から底部の内面は平行叩きの上にさらに同心円叩きにて調整。

**土師器** (18～20) 18の口縁部は頸部のくびれからやや外反し端部は、丸くおさめる。概の外面は不定方向のヘラ削り、内面はナデによる調整。19はほとんど屈曲しない尖り気味の端部を

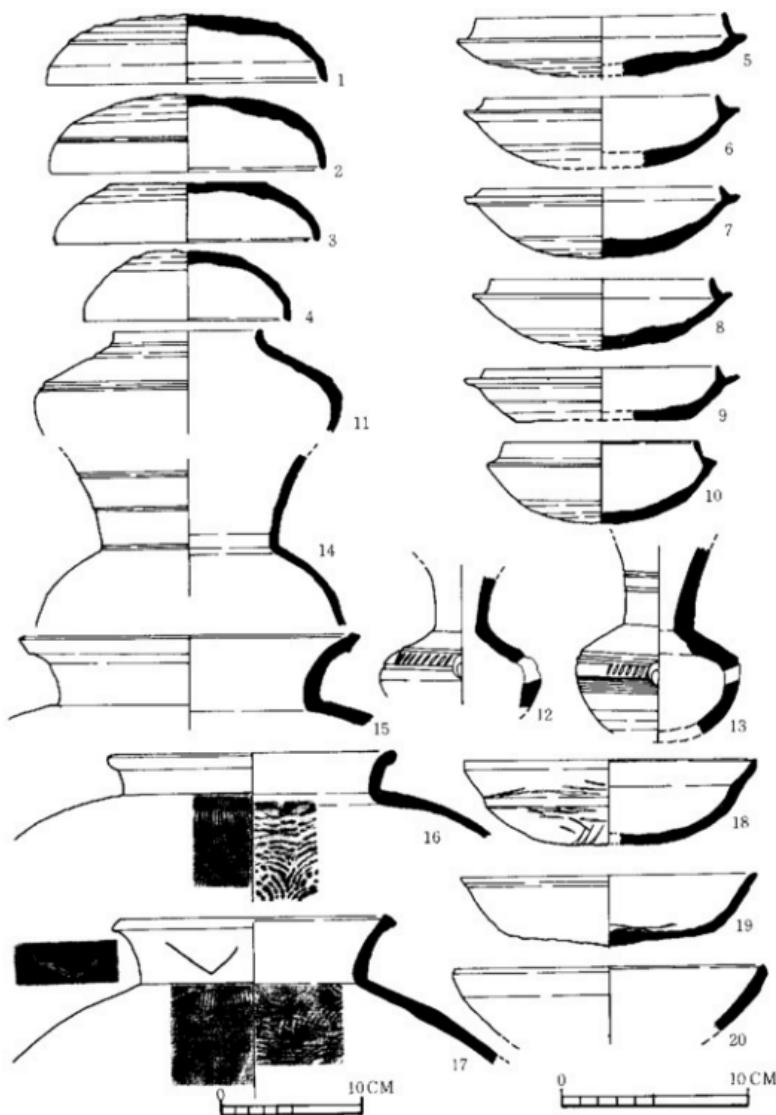


Fig.24 3号墳出土土器実測図-1 (縮尺1/3, 1/4)

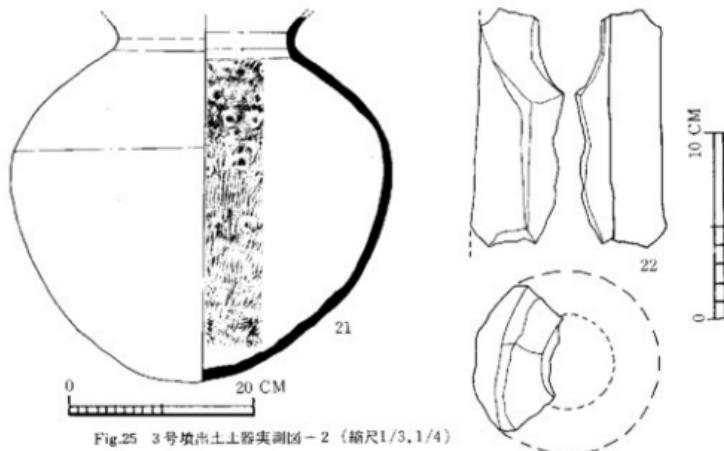


Fig.25 3号墳出土土器実測図-2 (縮尺1/3, 1/4)

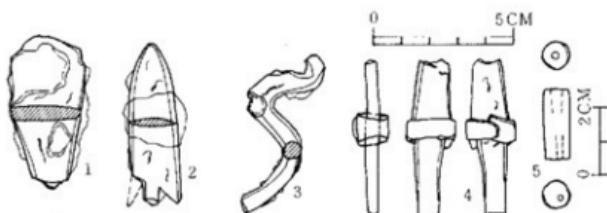


Fig.26 3号墳出土玉・鉄器実測図 (縮尺1/2)

外上方につまみ出し内外面ナデ調整を施している。20は底部を欠失する。口縁部はやや内側に傾き、外反し端部は尖る。内外面ともヘラ磨きで調整している。

**鰐羽口 (22)** 墓丘より出土したもので、胎土にはスガが混り、形態は円筒状をなすものと考えられる。外面はヘラによる粗雑な調整を施している。

**鐵鎌 (1・2)** 1は広根の斧箭式に属し、身は平丸造りで頭部・茎は欠失し不明。2は腸抉をもつ両丸造りで、柳葉形をなす。茎部は失われ不明。

**馬具 (3)** 径0.6cmの鉄棒を折りまげてつくったもので、左右対称の型になるものと考えられるが現在部からは全容を復元するのは不可能である。

**刀子 (4)** 小片のため全長等は不明。関部に鉄製の錐がついている。

**管玉 (5)** 疙道部床面より検出。濃緑色をした碧玉製品で孔は一方よりあけられる。ていねいな磨きがなされ長2.1cm、径0.8cmを計る。

## 第4号墳

### 1. 墳丘 (Fig.27・28: PL. 7)

墳丘は、水田の畦として利用されており、墳丘内には周辺の小石が積上げられた状態であった。また水田耕作のため周辺部の墳丘が削平されていた。墳丘はほぼ平坦面を基本的に基底とし、その基底面が周溝上段につづく部分から盛土を行なったと考えられる。土層上面図から墳丘形成過程をみると、約3段階に分けることができる。第1段階は、掘り方ならびに削平时に出たと思われる赤褐色粘質土を利用した盛土、第2段階は削平面、第3段階を平坦面にする褐色土の盛土、第3段階は石室の石材を積み重ねると併行してその裏込めを行なうが、石材が小さいため、層全体に複雑さは認められない。周溝は、形態的に特異であり、羨道部・奥壁をむすぶ線上にはなく両側面に深さ30cm、幅3~5.3mの半円状に形成されている。この周溝内からも多量の土器が検出でき、特に羨道の左右に集中していた。

### 2. 石室 (Fig.30: PL. 8・9)

石室の主軸はS-86°-Wにとり、両側に開口する单室で羨道部はハの字に開く竪穴系横口式石室のタイプである。天井部はすぐではなく、両側壁・奥壁とも腰石から2~3段までという状態であった。石積の方法は小ぶりの石材を利用したレンガ積技法を持ちいている。

玄室は、奥幅2m、前幅1.8m、左壁長3.4m、右壁長3.3mを計る。腰石には小ぶりの石材を利用しているため凸凹はなく、ほぼ長軸と短軸の比が約1.76:1の割合で形成されている。石室左壁前の部分にFig.30で見られるごとく一括した土器群があつめられており、これに対して奥壁部右側には多数の破片の検出が認められた。

羨道部は、ハの字に開く形態をしたもので両袖に1枚づつの石材が基底面にはなく浮いた状態で検出された。石材はほとんど早良花崗岩と考えられる。

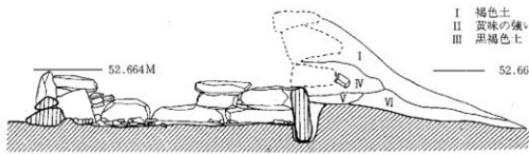
### 3. 遺物

玄室内の一括資料ならびに周溝内より多量の土器・鉄器が検出された。Fig.31の遺物出土状態の番号と土器番号は同一である。

#### (1) 須恵器 (Fig.32~39)

杯にはI~IVまでの蓋とI~II・IVの身がある。I類の蓋(1~8, 31~33・35~37・39) II類の蓋(9~14), III類の蓋は15~19, IV類20~45に分類でき、身はI類21~28・32~34・36~38・40でII類は29~30, IV類は46, に分類した。瓶は、I~IV類までの資料がある。52がI類、54がII類、III類が53、IV類が55である。有蓋高杯はセットである。58~63までがI類で64、65がIV類に分類されよう。無蓋高杯は、66がI類、68がIII類、67がV類に区分できる。短頸壺は43~44がII類に41・42がIV類に分類でき、提瓶47はII類に、49はIV類に分類できる。

直口壺(49)は頭部からやや外反しながら口縁部につづくが、口唇部でわずかに内傾して丸



I 紅色土  
II 黄朱の強い褐色土  
III 黑褐色土  
IV 黄褐色土  
V 黑色土がブロックで  
VI はさまる褐色土  
VII 灰褐色土  
VIII 棕褐色粘土質  
IX 黑褐色粘土質  
X 黑褐色砂質土

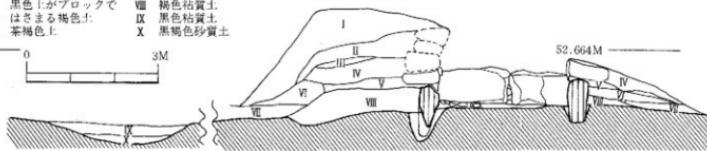


Fig. 29 1:層図(縮尺1/60)

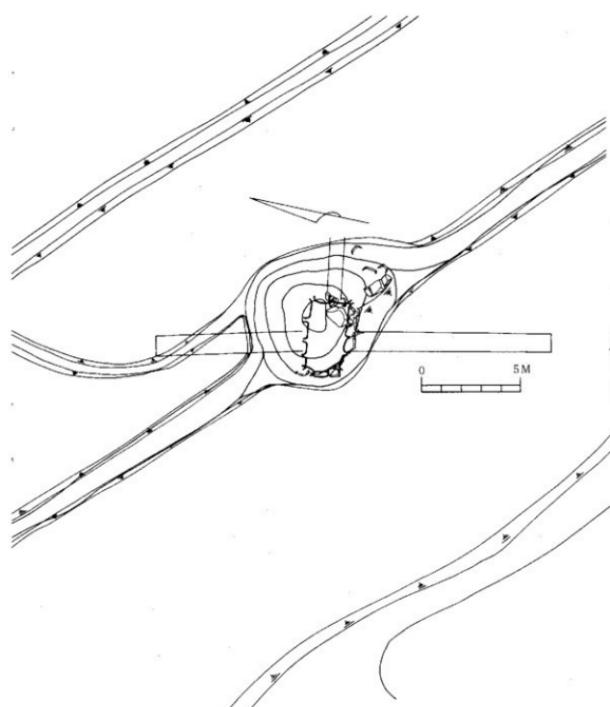


Fig. 27 4号墳現況図(縮尺1/200)

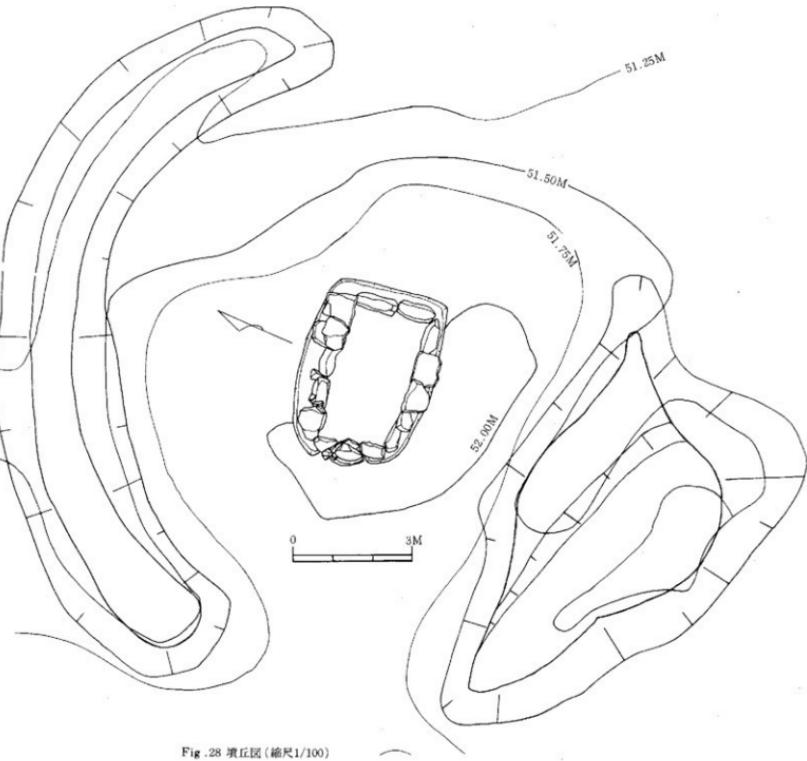


Fig. 28 墓丘図(縮尺1/100)

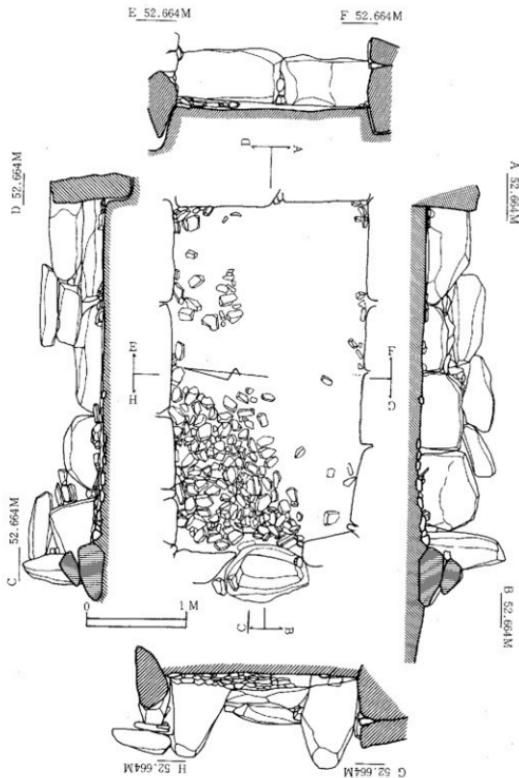


Fig.30 石室実測図(縮尺1/40)

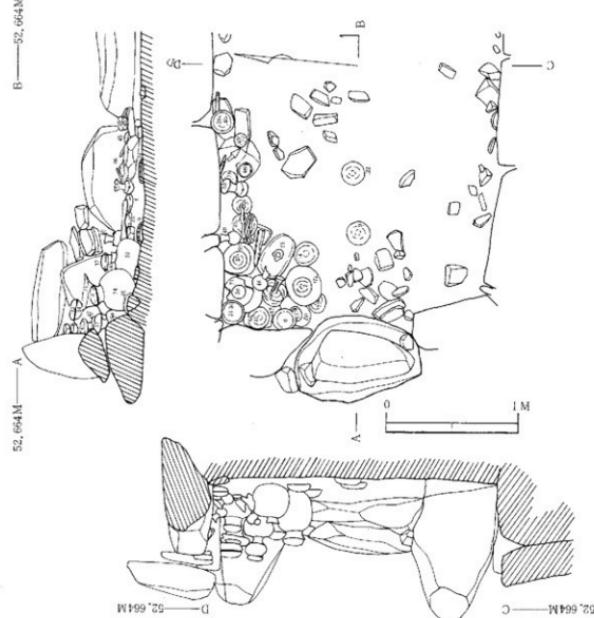


Fig.31 遺物出土状態実測図(縮尺1/30)

くおさめる。口縁部上端に一条の沈線を巡らす。胴部中央に最大径を持ち、胴部はナデにより成形している。底部は平底で、手持のヘラ削りを行ないこの面に丁のヘラ記号を施す。

**短頸壺 (50)** の口頭部は短く外反し、端部を丸みをもっておさめる。最大径を胴部中位に持ち、ゆるやかに外反しながら口頭部へとつづく。口頭部及び内面はナデによる。胴部から底部にかけてカキ目を施すがその後部分的にヘラナデを加えている。底部は平底で、一部にカキ目を施す。川のヘラ記号を施す。格子目文のタタキのある壺 (51) は、接合不可能であったが明らかに格子目文のタタキで、平行叩きではない。3点は同一個体である。

**脚付有蓋壺 (56・57)** の脚部は2条の沈線により竹節状の段 (4段) に区切られて上3段には長方形の透孔、下段には正角形の透孔を四方に配す。全体にカキ目を施したのち2条の櫛描波状文を加える。壺部の口縁部はやや内傾し、端部内面に沈線が入る。頭部はやや外反しながら口縁部との境では短く強く外反する。体部の肩はあまり張らず胴部中央に2条の沈線が入る。これを境にして上はカキ目、下は平行叩き目文である。頭部には櫛描波状文、体部上面には櫛描列点文を配する。蓋は体部と天井部の境に段を持ち、天井部はカキ目を施したのち櫛描列点文を配す。口縁内面に沈線が入り、端部は鋭い。

**横瓶 (69)** は口縁部を欠く。口縁部は頭部からやや外反しながら立ち上り先端部で内弯する。胴部外面は平行叩き目文で、内面は同心円文の叩き。口縁部はナデによる成形である。

**広口壺 (70・71)** は、朝顔花形に開く口縁部と球形の胴部から成る。71の頭部は2本の沈線で3段に区切り各段に櫛描波状文を付す。胴部外面は平行叩き目文、内面は同心円文である。70は、71より小型である。頭部から外反しながら口縁部に達し、口唇部はさらに外反して丸くおさめる。胴部外面は平行叩き目文、内面は同心円である。

**壺 (72～74)** の内72・73は口縁部のみで大型の壺である。72の内面には指で押した痕跡が認められる。胴部から頭部にかけては張らず、最大径は胴部中央に位置するものであろう。73は頭部からほぼ直角に近く張り出すことから最大径は胴部中央に位置するであろう。74の肩はあまり張らず最大径は胴部上半にある。口縁部と頭部との境はゆるやかな段をなし、口縁部は短く外反する。頭部・口縁部はナデによる調整、体部上半から中位は叩き目の後カキ目、下位は平行タタキ目を施す。内面は同心円文とナデによる調整、頭部にヘラ記号有。

#### 土師器 (Fig. 38・39, 75～91)

**碗 (75～80)** は3類に区別できる。75・76・78は半球形をなし、3点とも放射線状の暗文を施す。77は口縁部が内傾し、口縁はやや丸みを持っておさめる。79・80は、手すくね土器である。高杯は脚部の形態で2類に区別できる。82は杯部内面に暗文を施し、脚部は下端で段を持つ。81・83～86は同一器形の杯と脚部。壺 (87～91) は2類に区分できる。87・88・91は口縁部が外反しながら丸くおさめ、90はなお強く外反する。89は高台付杯で底部の境に高台がつき、口端部は丸みを持つ。

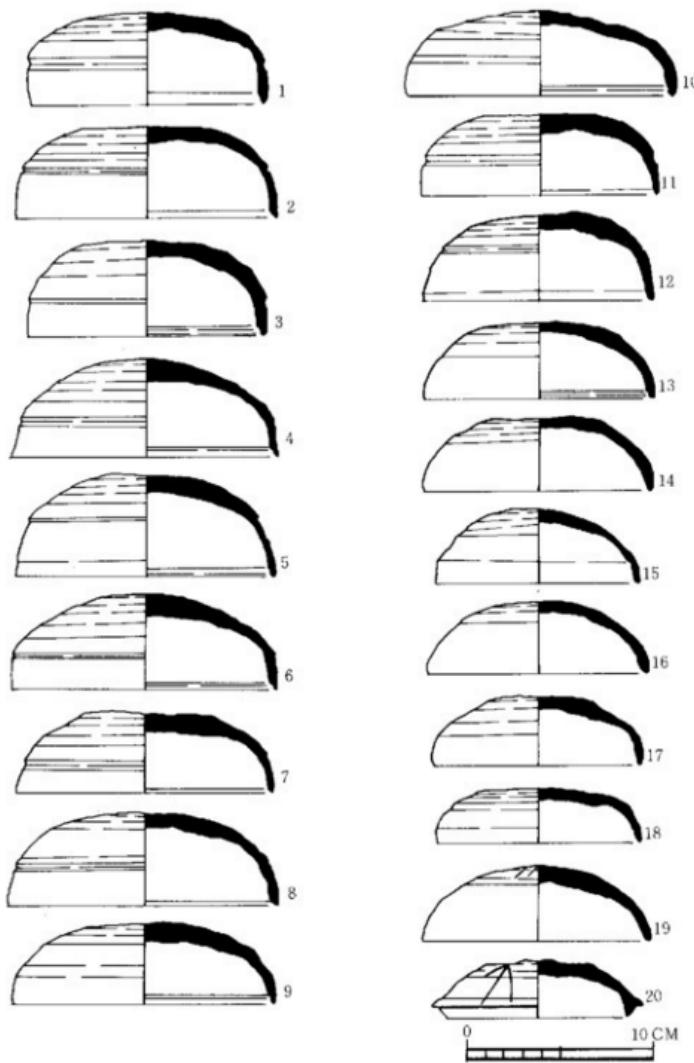


Fig.32 土器実測図-1 (縮尺1/3)

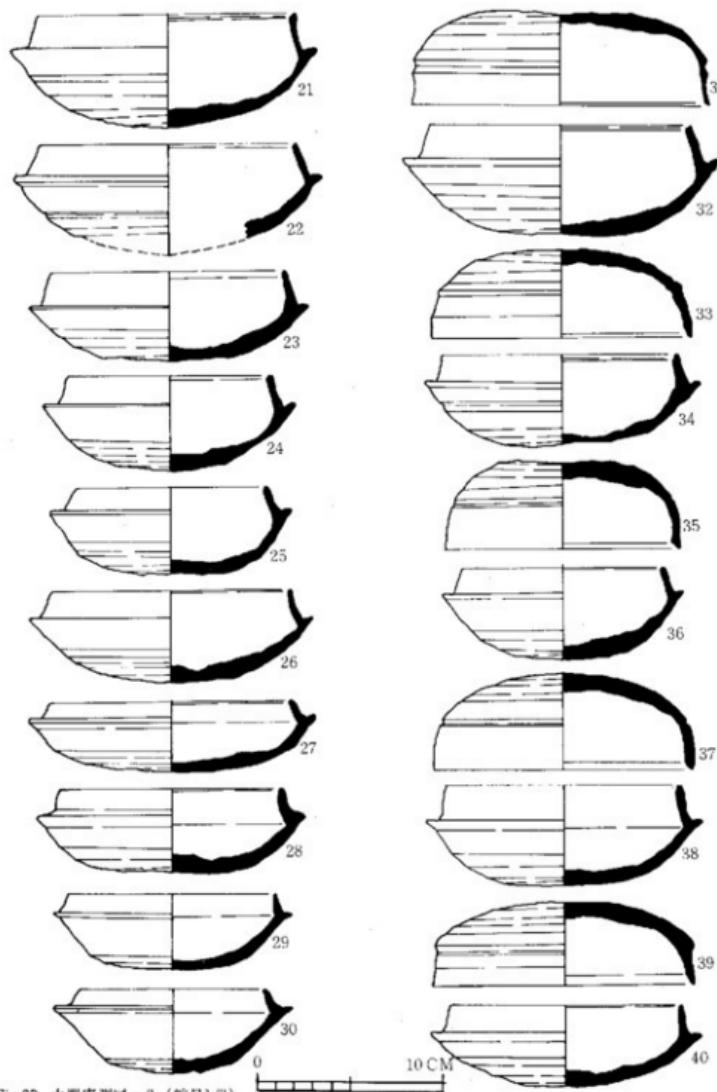


Fig.33 土器実測図-2 (縮尺1/3)

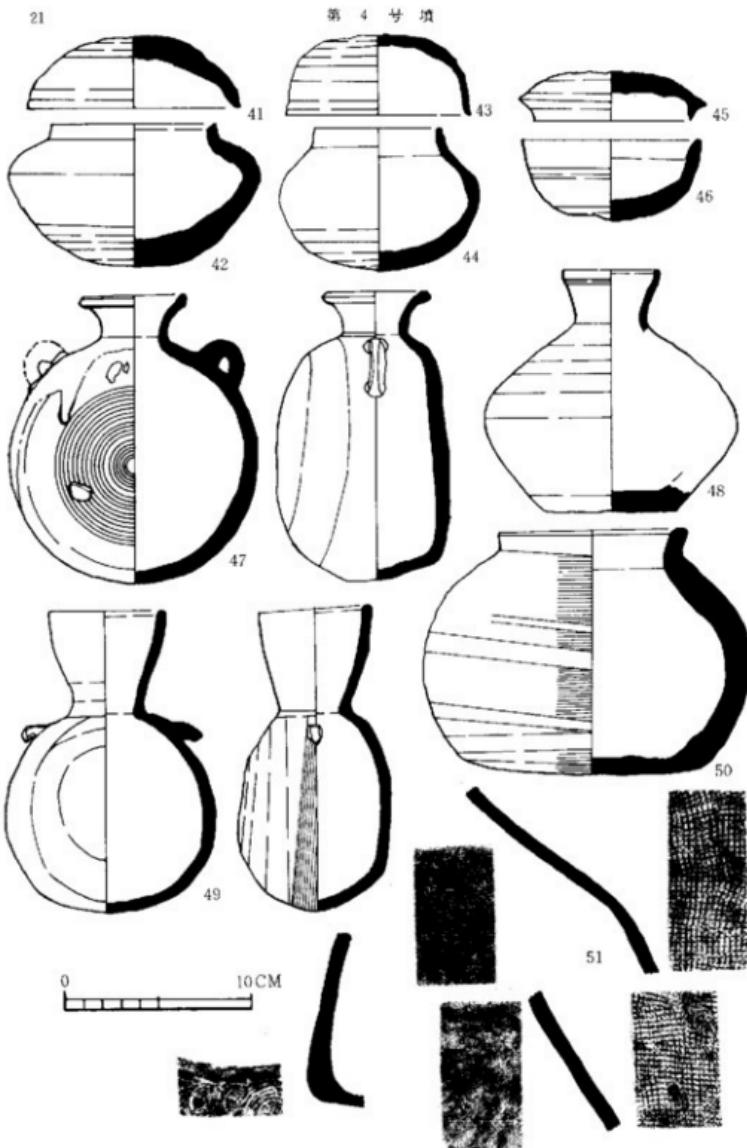


Fig.34 土器実測図－3 (縮尺1/3)

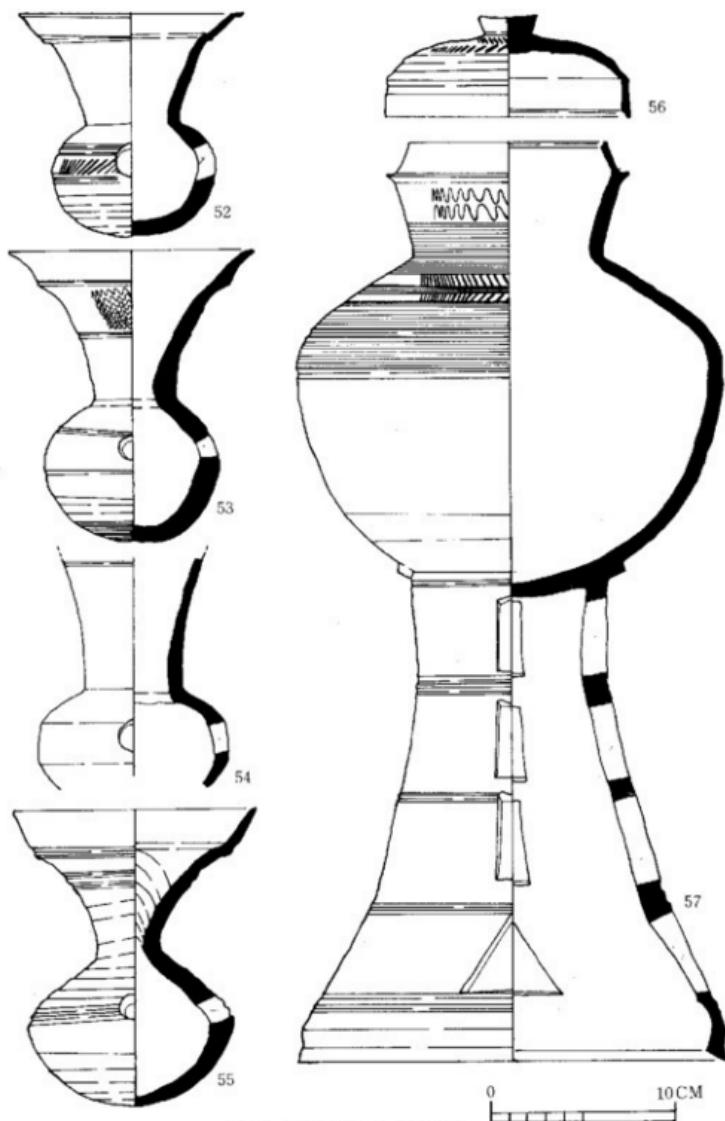


Fig.35 土器実測図-4 (縮尺1/3)

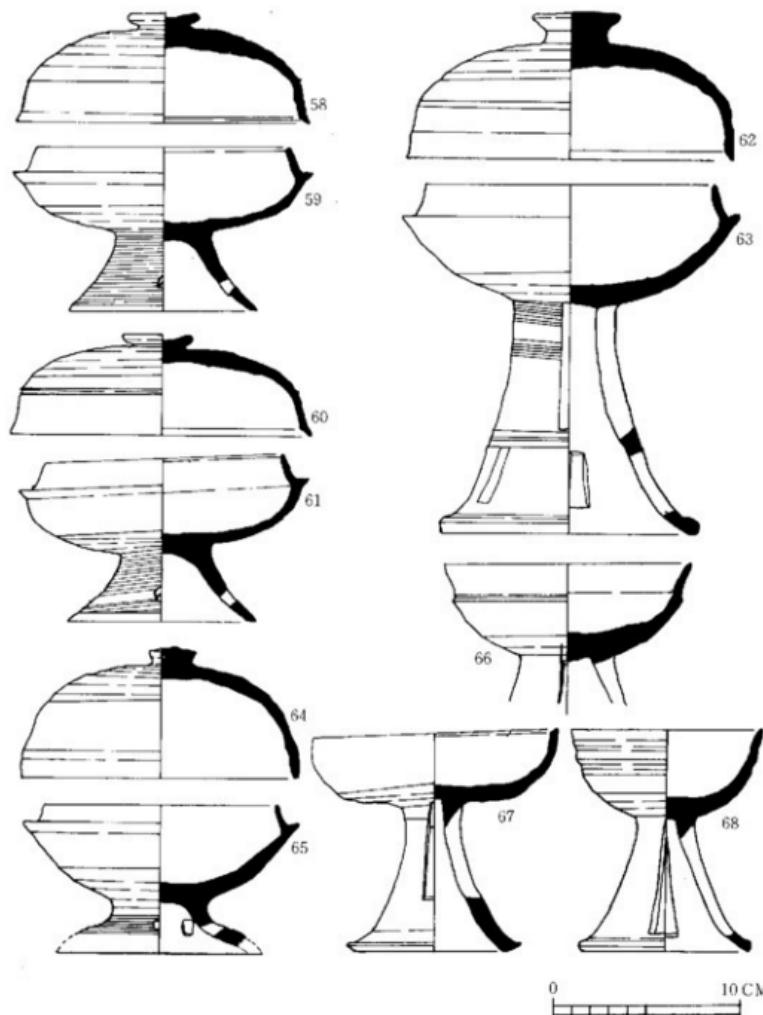


Fig.36 土器実測図-5 (縮尺1/3)

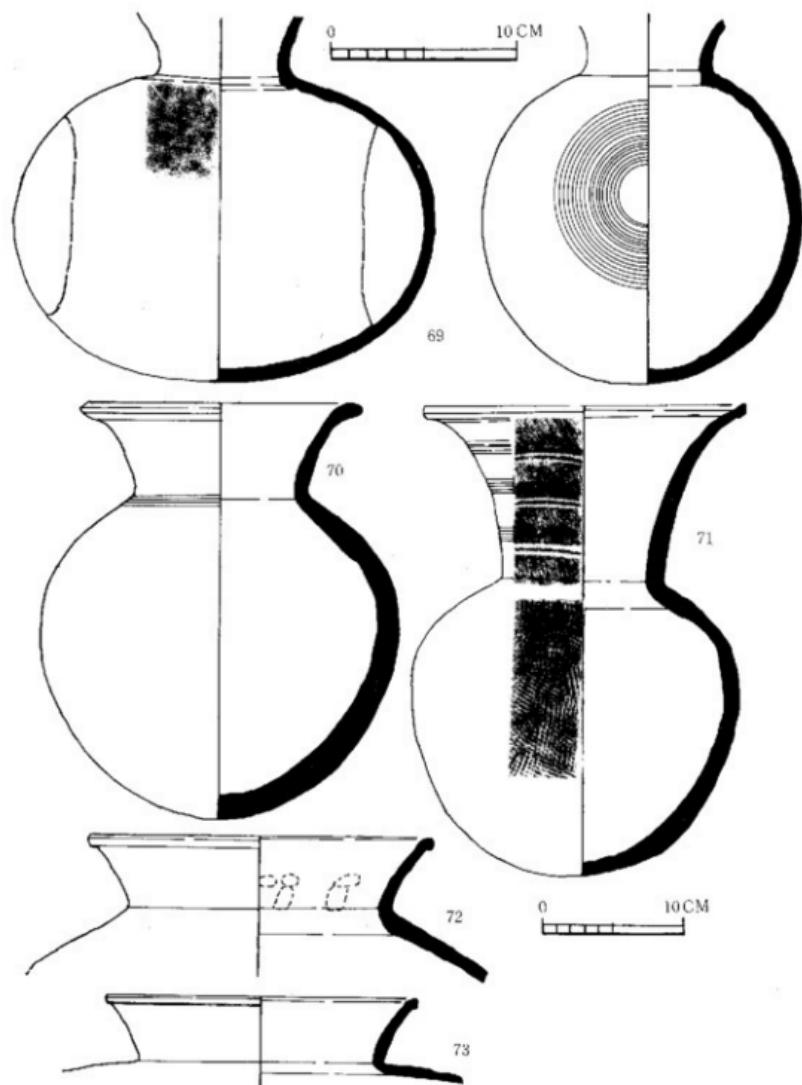


Fig.37 土器実測図-6 (縮尺1/3, 1/4)

第4号墳

25

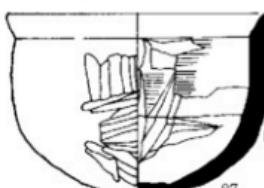
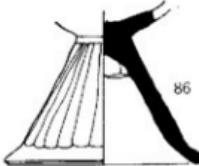
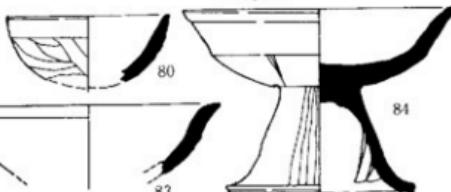
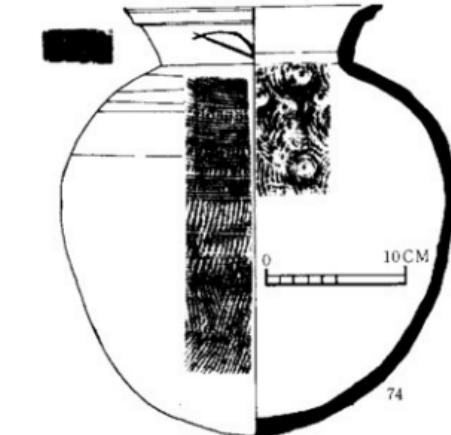
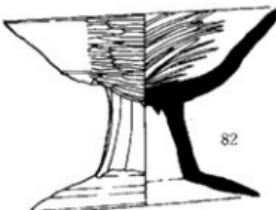
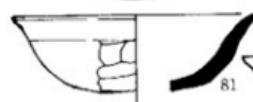
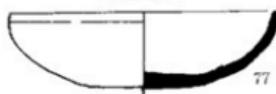


Fig.38 土器光測図-7 (縮尺1/3, 1/4)

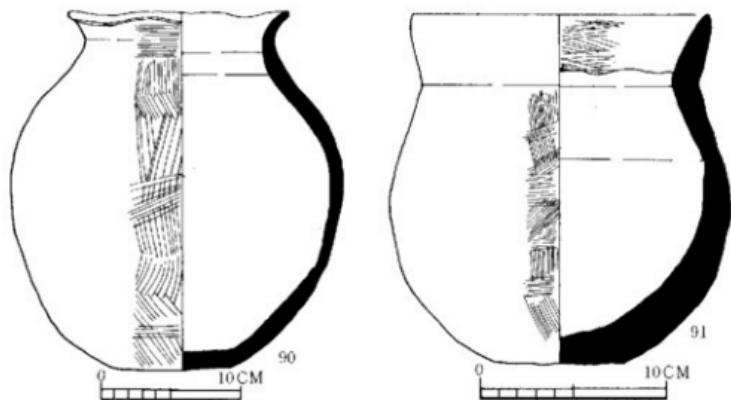


Fig.39 土器実測図-8 (縮尺1/3, 1/4)

## (2) 鉄器・装身具 (Fig.40-41)

**馬具** (Fig. 39-1 ~ 4・7・8・12・13, Fig. 40-8・9) 1は断面長方形を呈する銕板で側面には1.4cmの立耳がつく。2~4は衝である。7は兵庫鎖で、12・13は飾金具。これらは一括して出土。一つのセットをなす物と考えられる。8・9は周溝より出土した兵庫鎖で、やや小型の二重環を連結したものである。

**武具** (Fig. 39-15, Fig. 40-7, 10~12) 15は広根式で身は両丸造りを呈し、茎部分は断面方形、柳葉形をなし関をもち刃部へと続く。7は石突と考えられ先端部を欠く、袋部は断面やや横円形を呈し木質を残している。端部の形状は不明。10~12は直刀である。10は刃巾4.8cm、重ね0.6cm、11は刃巾4.0cm、重ね0.8cm、12は刃巾2.5cm、重ね0.8cmを計り、いずれも背は平造りで断面は二等辺三角形をなす。いずれも断片で全長は不明。

**農工具** Fig.39-9~11・14は刀子で、いずれも背は平造りで断面は二等辺三角形を呈する。Fig.40-2は手鎌で横に細長い鉄板を左右から折り返して袋部を作り、下縁に刃をつけたものである。図示しなかったが手鎌のミニチュアと考えられる破片も出土している。Fig.40-1~6は鉄斧で、1は中型の実用品であろう。袋部は木質は認められず横円形を呈す。4は小型の有肩のもので袋部は左右を折り返し中央部で合せたもの。6は小型で刃部は弧状をなし袋部の折り返しは手鎌に似る。3・5は鋳造鉄斧と考えられるものである。

**装身具** (Fig.39-5・6) 5は金環で径2.3cm、銅芯に金泊を貼ったもので部分的に剥落していくて突き合せは接近する。6はガラス製の丸玉で藍色を呈し、両端部は平出で胴部がやや球形に張り出し、穿孔は一方よりなされている。

## 第4号填

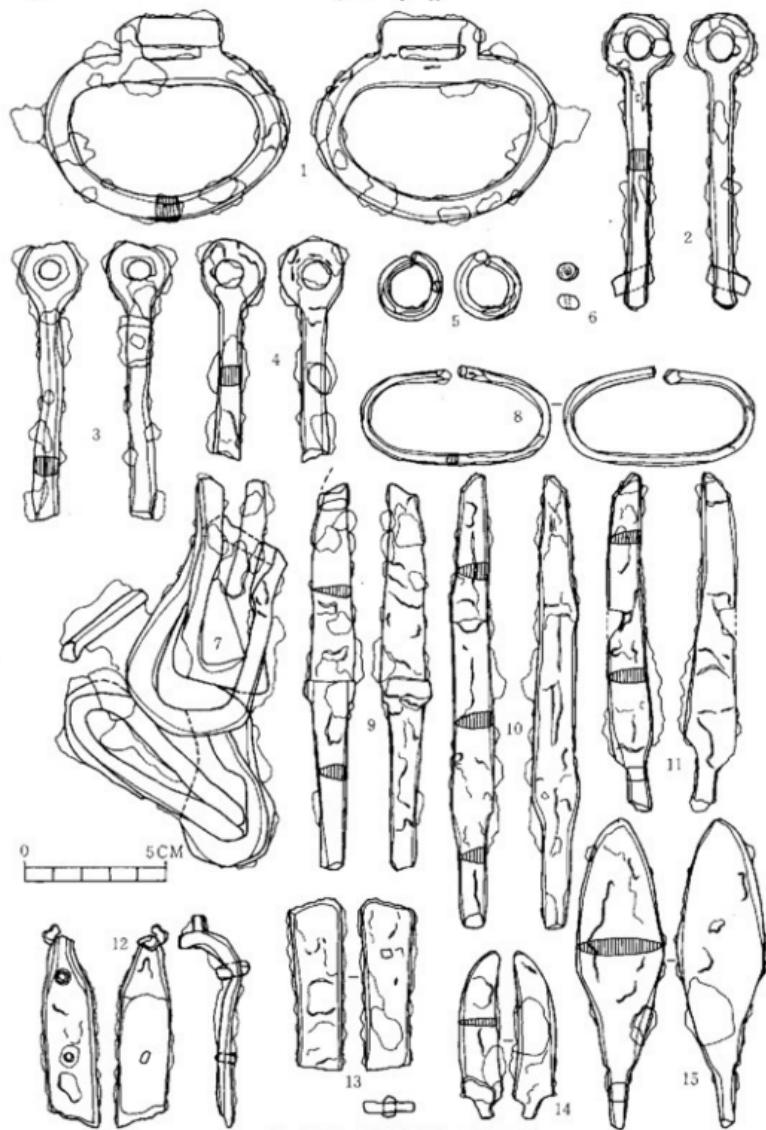


Fig.40 玉・鐵器実測図 - I (縮尺1/2)



Fig.41 鉄器実測図-2 (縮尺1/3)

## 第 5 号 墳

### 1. 墳丘 (Fig.42~43 : PL.10)

5号墳も4号墳と同様に水田の畦として利用されており、また水田耕作のため大部分が削平され現況では側壁の一部が露出していた。地山は、西側が高く北・東側は地山を削平している。東側側壁の石材一部が抜かれておりここまでが水田として利用されていたために大部分が削平されていると考えられ、本来は西・南側の様に地山を切りこんで石室を形成したと判断できる。盛土に関しては推定するしかないが、西側断面から見ると周溝より約1m程度の部分から盛土が始まったと考えられる。現存する土層から墳丘形成過程を観察すると2段階に分けられる。第1段階は、西側の掘り方部分から出たと思われる赤褐色粘質土を腰石の後方に再度かためた状態。第2段階は褐色土による石室の石材を積重ねると併行してその裏込め等を行なった盛土と考えられる。

5号墳の周溝は他の周溝とは異なり、石室右壁部の部分には周溝は認められない。また狭道部からつづく部分にはわずかながら凹みが認められ、ここから左右の周溝へ下る形態を持つ。この周溝から多量の上器群が検出された。このほかに周溝の外、墓道の右側に径1mのピットが2つ並んでいる。この中からはカメとともに多量の鉄滓、炭化物がつまつた状態で検出されている。

### 2. 石室 (Fig.45 : PL.11)

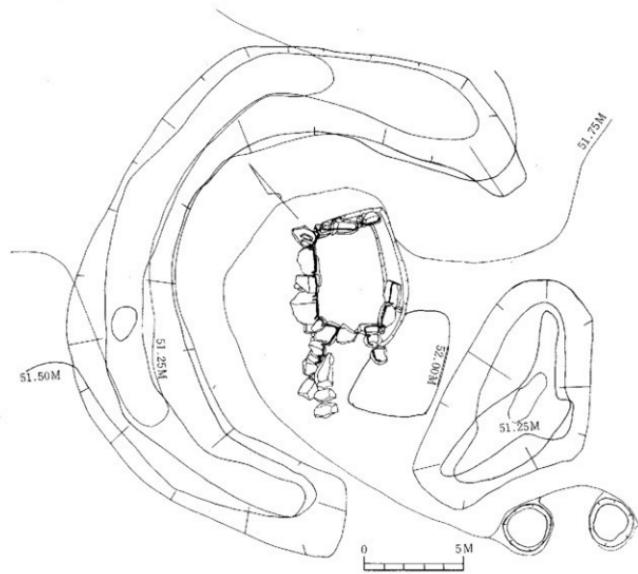
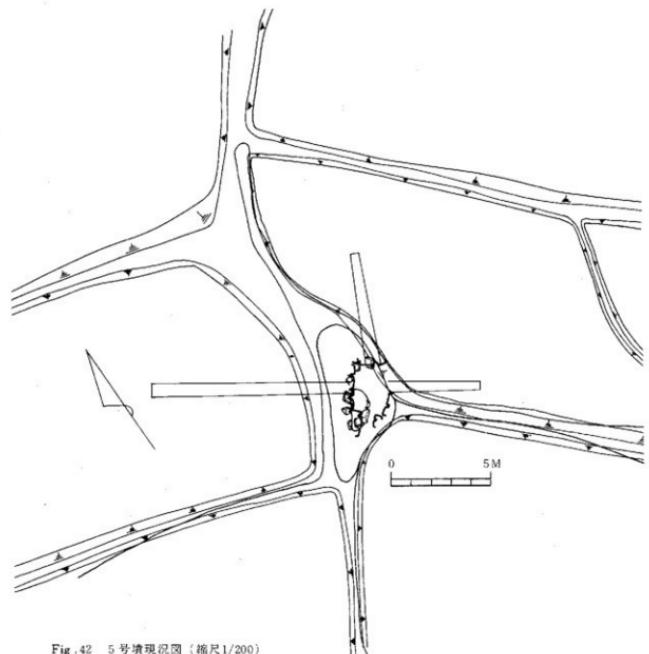
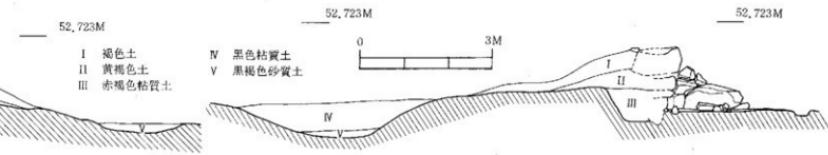
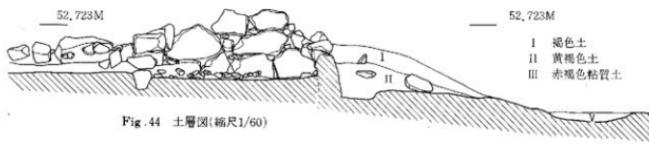
本古墳の石室の主軸は、S-38°-Wにとり、南西に開口する單室で狭道部はわずかに聞く竪穴系横口式石室の構造である。しかしこの狭道部も2号・4号・7号と同様に石材が基底面より上部に位置し浮いた状態である。玄室は奥幅1.8m、前幅1.5m、左壁長2.4m、右壁長2.5mを計り、多少丸みを持つ玄室である。狭道部は左壁長2.4m、右壁長0.9m、巾は0.5mを計る。玄室の右壁の一部が抜きとられた状態である。これに高して左壁は3段目まで現存しており、その形態技法はレンガ積技法で、小ぶりの石材（花崗岩が主）を使用している。

### 3. 遺物 (Fig.46~49 : PL.24・25)

5号墳からは周溝内から多量の遺物が出土した。特に北側の周溝と東側の周溝内より子持器台、高杯等の出土が多く、また鉄器もほとんどが周溝内より出土している。

#### (1) 須恵器 (Fig.45~49)

杯にはI類の蓋とI・IV類の身がある。I類の蓋(1~4)の内、1・2は口径15cm内外と小型の3・4がある。身のI類(5~6)の内6の口縁部は内湾するものではなく外反している。IV類(10)は小型で口縁内面に鈍い段を持つ。11・12・13は有蓋高杯の蓋である。3点とも有蓋高杯のII類の蓋で体部と天井部との境の稜は鈍い。12・13の口唇部に烈点文を施す。14・15はFig.49~44の脚付六連杯の蓋である。先端部は銳利である。天井部にカキ目を加える。15も14と



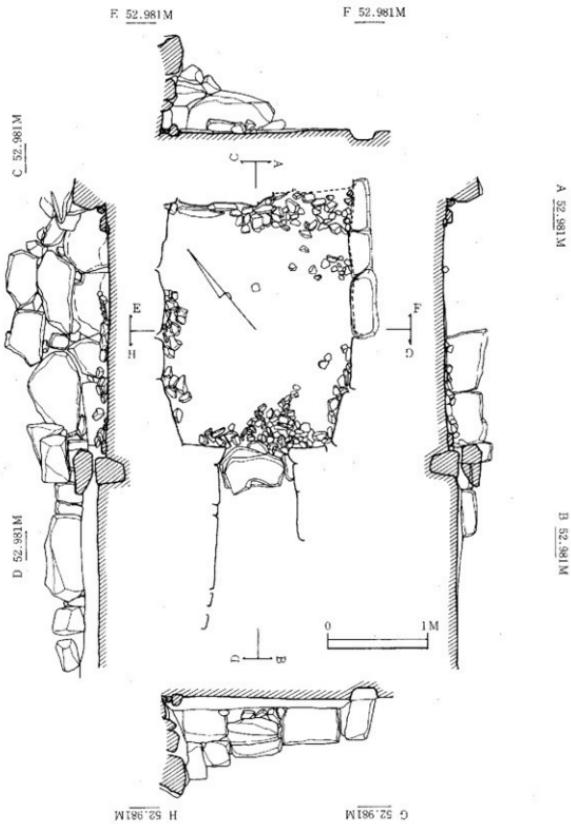


Fig. 45 石室实测图 (缩尺1/40)

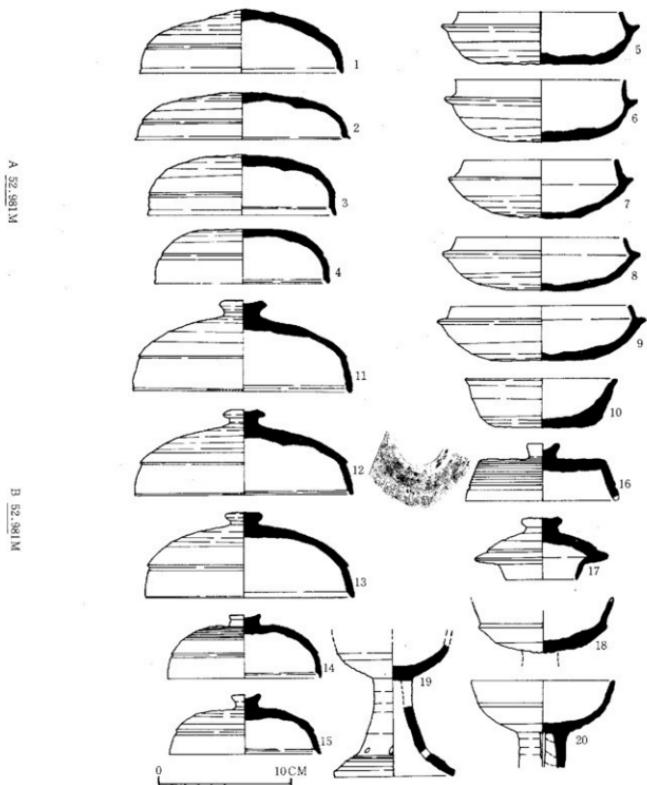


Fig. 46 5号坑出土土器实测图-1 (缩尺1/3)

器形は同様でヘラ削りは約2/3程度。16は、つまみ部分の内面が中に入るもので天井部が平坦面を持つため体部との境に明確なる段を有し、口縁部に一条の凹線を施す。天井部にはカキ目と櫛描波状文を付す。内面は指ナデによる整形を行う。この蓋は、色調的にも形態的にも從来認められる須恵器とは異なる成形技法を持つ。17は長頸壺の蓋であろう。内面のかえりが高く、ヘラ削りも2/3程度である。無蓋高杯（18～20）は、分類から18がI類、19がII類、20がIII類となる。有蓋高杯（21～27）も分類から21・23～27までII類に区分でき、22はIII類に区分できる。26・27の高杯は、杯部の割合からみると脚部が大きく、むしろ26はIII類に区分できるものかもしれない。29・30は短頸壺で28は蓋である。28・29はセットではない。分類によれば29がIII類、30がI類に区分できる。

甌（31・32）は分類によれば31がII類、32がV類に区分できる。このII類の形態は特異で口縁部が開かずにこの部分で終了するが、本来は段を持ち口縁部が広がる形態となると思われる。

提瓶（33・34）は分類によれば33がIII類、34がV類に区分できる。42は甌の口縁部である。接合すると考えられる同一個体の破片が多量に出土しているが接合はできなかった。2条の凹線により3段に区別し、上二段は櫛描波状文、下段はカキ目を施す。

43の器台は、器高が30.2cm、杯部の口径25.8cm、脚部高22.5cm、脚幅径は17.2cmである。脚部は2条の沈線により竹節状の段（6段）に区切られ、上方2段には長方形の透孔を下方に三角形の透孔を3方に配す。全体にカキ目を施したのち2段の櫛描波状文の装飾を加える。杯部は脚部との接合面で段を持ち、外反しながら口縁部にいたる。体部中位に2条の凹線を持つ。II唇部はさらに外反して平坦面を持つ。

44は、脚付六連杯である。Fig.48～44の左図は上面からの復元図である。器台は五角形でこの上面に5個の蓋付杯、1個の有蓋高杯を付着させたものであろう。器台の脚幅径は23.2cm、器高17cmである。脚部下端に2条の凹線を配しその上部に長方形の透孔を4方に配す。脚部下端から内湾しながら中間部でしまり、屈曲して強く外反して杯をのせる口縁部に達する。杯をのせる部分の脚部上端には粘土張付けを行っている。蓋はFig.45～14・15が考えられる。

#### 土師器（Fig.48～35～40）

35・36は甌である。35は口縁部のみであるが器形的に36と同様であろう。36の口縁部は胴部からやや内湾しながら頭部で立ち上り、口縁部に向って外反しながら口唇部に達し丸くおさめる。外面はハケ目調整、口縁部内面はナデ・ヘラ削り調整を行なう。

37～39は高台付の椀である。高台の付け方で区別するならば、底部内に高台の付く37・38がある。しかし37は38より底部の内側に入ると思われる。体部と底部の境に高台を付ける39は高台の高さも37・38より高く、体部も37がやや外反しながら立上って行くのに対して、39は外反する角度が大きい。40は内面に放射状暗文のある盤である。口径21cm、器高3.8cmを計る。

## 第5号墳

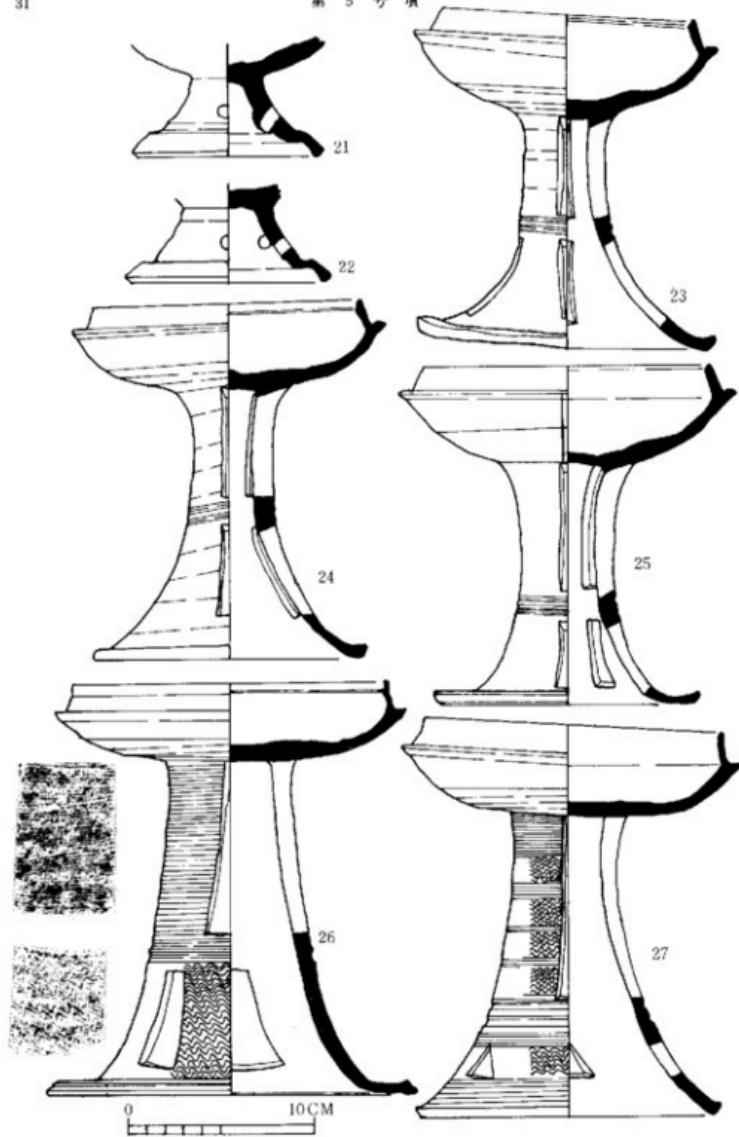


Fig.47 土器実測図-2 (縮尺1/3)

第2章 調査の記録

32

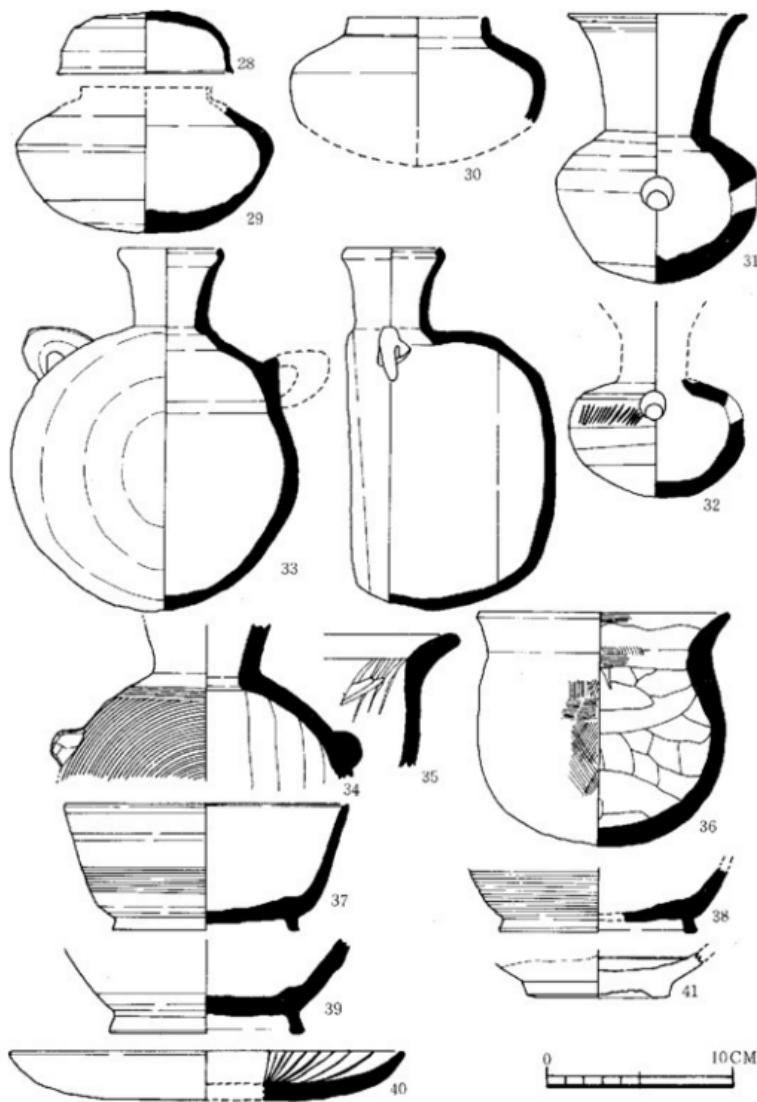


Fig.48 土器実測図-3 (縮尺1/3)

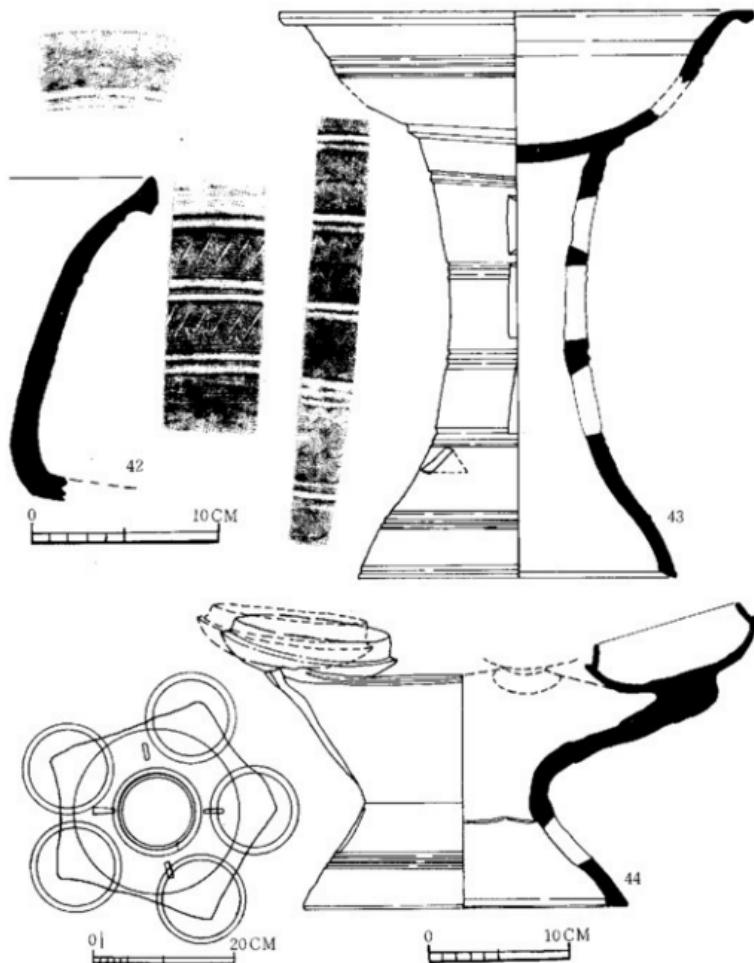


Fig.49 土器実測図-4 (縮尺1/3・1/4・1/8)

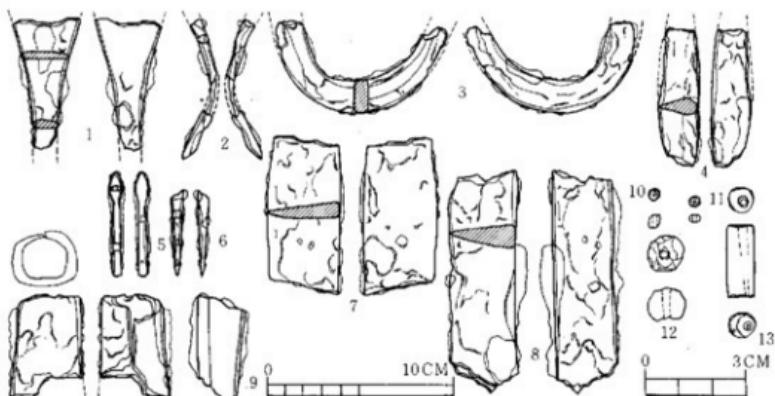


Fig.50 玉・鉄器実測図 (縮尺1/1, 1/2)

41は、白磁の底部である。底部の低さ、釉のかかり具合から玉縁の口縁部を持つ器種であろう。8号等にも出土している。

## (2) 鉄器・装身具 (Fig.50)

**鉄鎌 (1・5・6)** 1は広根の斧箭式に属するもので、身は断面平造りで基は、いく分か丸みをおびた方形を呈する。5は尖根式に属し、身は柳葉状のもので両丸造りであり、闊をつくり茎へと続く。6は茎端部のみで、形態は明確でない。

**釘 (2)** 断面は方形を呈す。上端部はくの字に彎曲して、下端部は銹化が著しいが、鋭かったと思われる。図示しなかったが、釘の下端部のみ出土もあった。

**馬具 (3)** 輪燈の残片と考えられる。 $1 \times 0.3\text{cm}$ の扁平な形状をもつ。

**刀子 (4)** 刀巾 $1.0\text{cm}$ 、重ね $0.5\text{cm}$ を計り、両側に鏽をつけている。

**直刀 (7・8)** 2振り分の出土をみた。7は刀巾 $2.2\text{cm}$ 、重ね $0.5\text{cm}$ 、8は刀巾 $2\text{cm}$ 、重ね $0.7\text{cm}$ を計り、ともに平造りで、断面は二等辺三角形を呈する。

**鉄斧 (9)** 小形のもので刃部を失する。袋部は厚さ $0.3\text{cm}$ の鉄板を曲げて、両端を中央部で合せている。袋部には木質は認められず斧頭のみを副葬したものであろうと考えられる。

**小玉 (10・11)** 10は胴部の張り出しあは少く孔端部も丸く仕上げられている。11は胴部が張り出し両端は平坦である。ともにガラス製で、孔は一方より穿られたものである。

**丸玉 (12)** めのう型で橙色をなす。径が $1.2\text{cm}$ 、高さ $0.9\text{cm}$ を計り、仕上げは粗雑で、面にはかなりの凹凸がみられる。孔は一方より穿られたものである。

**管玉 (13)** 濃緑色を呈する碧玉製で、長径 $2.1\text{cm}$ 、短径 $0.8\text{cm}$ を計る。側面は丁寧な研磨で仕上げられているが、孔両端は粗けぎりのままである。穿孔は片側から行う。

## 第 6 号 墳

### 1. 墳丘 (Fig.51: PL.12)

8号墳の西南、標高51m～50,500mに位置し調査前に直径4.8m、高さ1.9mの高まりを見せていた。当初、墳丘の遺存状態が良いと考えられたが、調査途上、築造時の墳丘部は僅かしかなく残りは開墾時の削減による擾乱土であることが明らかになった。墳丘は東西の溝に挟まれた赤褐色粘土の整地面を基底として形成されたと考えられる。墳丘基底面にあたる部分は、東西に僅かの傾斜をもち中央部がやや高くテラス状に張り出し整地されている。したがって墳丘は南側からは高く北側からは低く観察できるものであったろう。東側周溝は等高線にはば平行に開削して巾1.9m～2.7m、深さ0.25m～0.4mのU字状をなす。西側周溝は等高線に直交して巾2.7m～3.0m、深さ0.25m～0.4mのやはりU字状をなす。この東西の溝は前庭部で消滅し、前庭部左側の周溝部分にFig.56-16の獣が1個体分検出された。墳丘の遺存状態から盛土を推測すると、さほどの複雑さはなく、まさかほどのしまりももたない。石室の掘り方も浅く、石室掘り方がほぼ埋った段階から石室を裏込め、固定することを兼ねた盛土が行なわれている。

### 2. 石室 (Fig.53: PL.13)

石室は東西の溝に挟まれたやや東よりに構築されて、主軸を S-36°-W にとる。天井部、北側壁、西側壁及び南側壁の一部の石はすでになく、また左壁は腰石のみという状態であった。地主の話では、昔この古墳を発掘（盗掘かもしれない）したという。本来右壁の腰石が並んでいた所と前庭部の側壁部の一部が擾乱をうけ、赤褐色粘土の下層のシルト層にまで達していた。また、腰石と考えられる割石や転石が積みあげてあった。左壁部には、小ぶりの扁平な転石を立てて腰石としている。さらに腰石と腰石の間には小石を充填した部分もある。現存では左壁長3.3m・前巾0.4mである。南小口部分には細長い転石を置き、左壁部との巾の足りない間は小石を塗っている。また左壁部で現存するのは二段目までであるが、南小口部分は二石の腰石を配していたと考えられる。上段が若干右室内にせり出す。石室は掘り方の中から構築されている。また床面は石室掘り方底面より上に12cmほどの埋土をし、その上に小さな転石を敷きつめていたと考えられる。敷石と考えられる転石は南小口寄り僅かにその名残りを残すのみである。破壊された奥壁、右側壁部がどのような形狀をとったか明らかにしないが、地山整形・掘り方・残っている南壁の腰石からすれば羨道部を連接する横穴式石室とはみなしがたく、依然として古いタイプの墓葬である竪穴式石室が用いられた古墳であると考えられる。

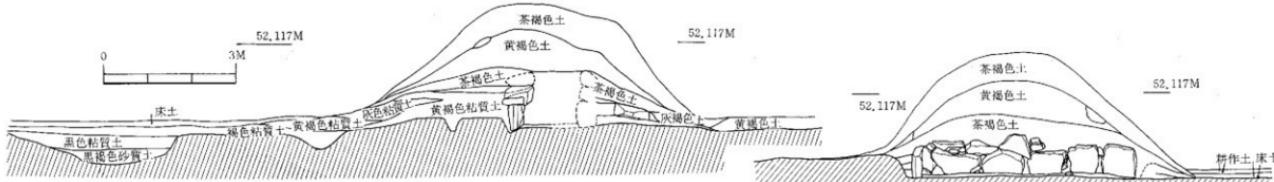


Fig. 54 上層図(縮尺1/60)

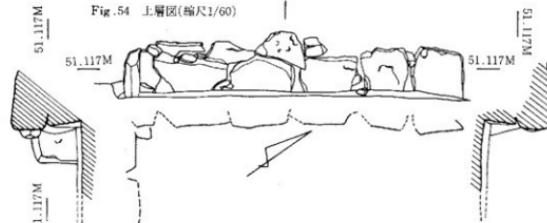


Fig. 53 石室図 (縮尺1/40)

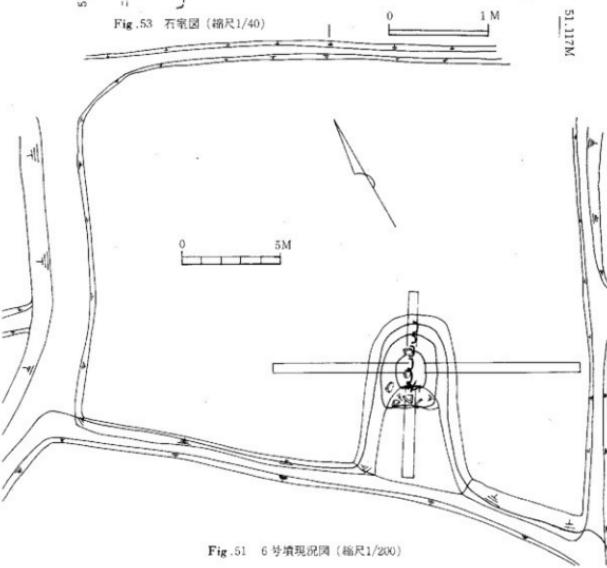


Fig. 51 6号墳現況図（縮尺1/200）

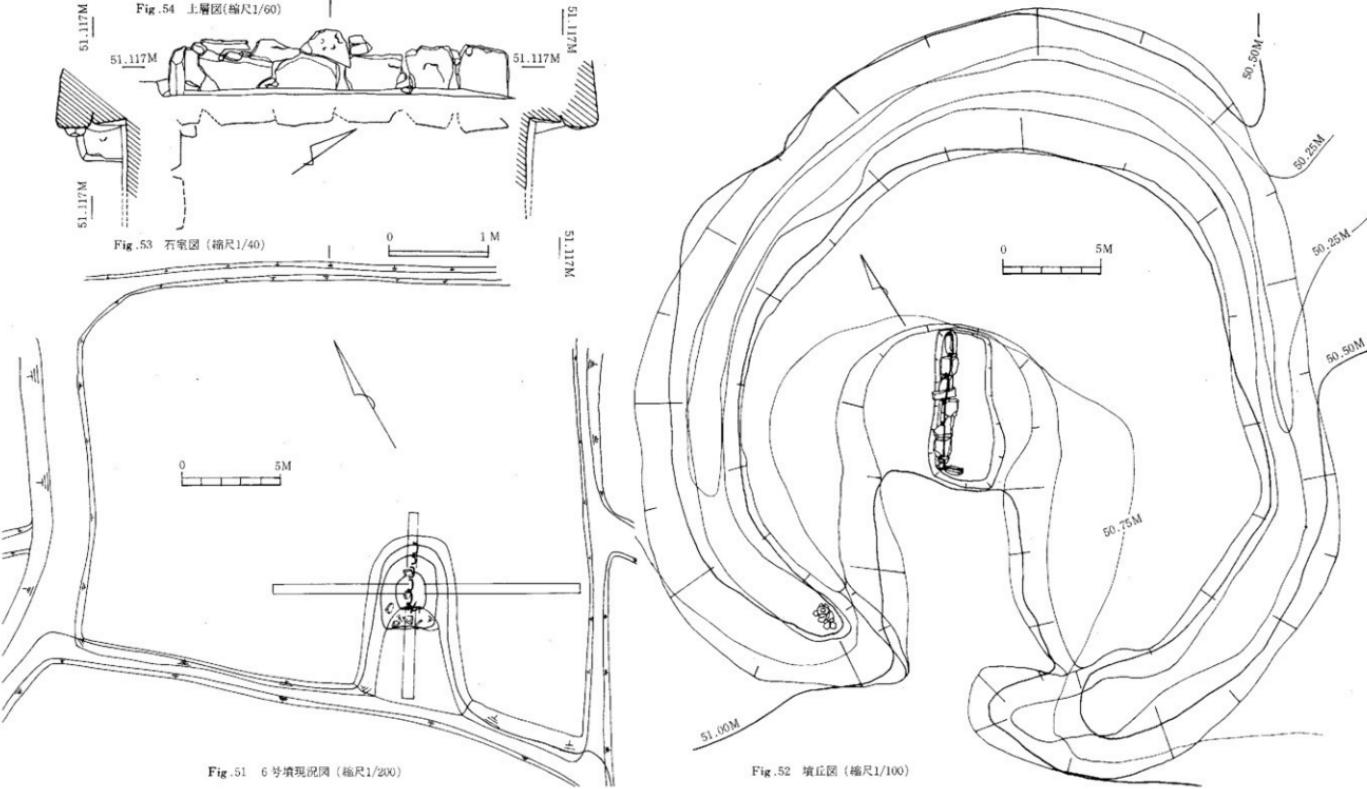


Fig.52 塗丘図（縮尺1/100）

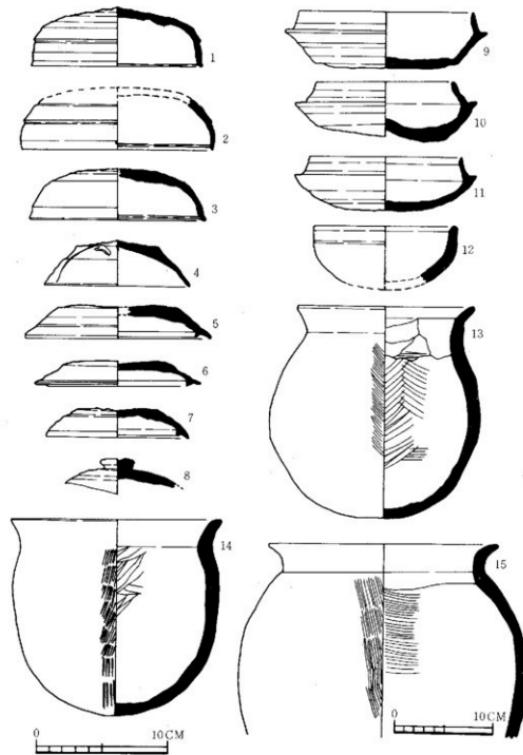


Fig. 55 6号墳土器実測図 (縮尺1/3-1/4)

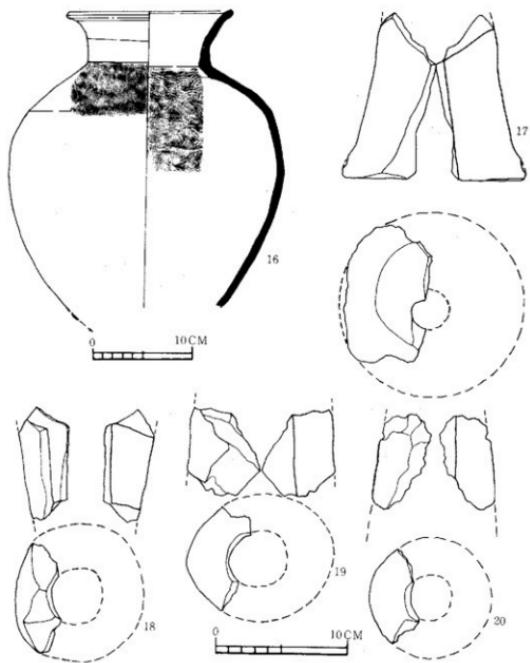


Fig. 56 土器実測図 2 (縮尺1/3-1/4)

### 3. 遺物

#### (1) 土器 (Fig. 55~56)

**杯蓋** (1~8) 1・2は体部と天井部との境に凹線をめぐらし、口縁内面に段をもつものでI類に分類される。3口縁端部は丸みをもってくるが、内面には段がつくものでII類に該当する。4小型化し天井部にはナデ調整が加わり、平坦に近くなったものでIII類に分類される。5~7口縁内面のかえりは、口端より下方に長く鋭く突出するものでIV類に分類。8は平坦なつまみを付し、天井部はヘラ削りがありV類に分類。**杯身** (9~12) 9~11はヘラ削りが2/3程度あり立上りは高く、やや内傾するものと立上りがまだ高いが内傾したものでI類に分類。12は小型で、体部は底部からゆるく内傾気味に外反するものでIV類に分類される。

**土師器** (13~15) 13は口縁部は短く外反し、底部は丸くなる。体部外面は刷毛目調整し、内面はヘラ削りにより仕上げている。口縁部は内外面ともにナデ調整。14は全体的に器壁の厚いもので、口縁は短く外反する。口縁部は内外面ともにナデ調整。体部内面はヘラ削り、底部は指による調整をし、外面は刷毛目で仕上げている。15は底部を欠失する。口縁部は短く、やや強く外反する。口縁部は内外面ともにナデ調整。体部外面は粗い木目のものでナデ調整、内面も木目の粗いもので調整し仕上げている。

**甕** (16) 西側前庭部近くの周溝底より一括して出土した中型甕である。口頭部からやや直線的に外開し、端部はさらに外反する。体部外面は平行叩き、内面は同心円叩きにて調整を施している。底部は穿孔されている。

**穂羽口** (17~20) すべて埴丘より出土したものである。17は基部に近いもので、胎土は多くの砂粒を含み良質とは言い難い。18は先端に近い破片であろうか、高熱のため胎土が変色している。19は多量の砂を含む質の悪いもので、外面はヘラによる面とりが窺われる。20は先端部で胎土にスサを含み、鉄滓の附着が認められる。すべて円筒状をなすものと考えられる。

#### (2) 鉄器・装身具 (Fig. 57)

鉄器類は、刀子・小直刀・鉄鎌が、周溝より出土したが細片で図示しなかった。管玉は耕作土からの出土である。

**刀子** 切先部近くの破片で、背は平造り・刃巾は1.4を計る。断面は二等辺三角形を呈する。

**小直刀** 2振り分出土。1振りは刃幅3.1cm、重ね0.6cmを計る。他方は刃巾2.5cm、重ね0.4cmで、共に背は平造り、断面は二等辺三角形を呈する。

**鉄鎌** 尖根式に属するもので、鎌身部のみ残存し、身は片丸造りである。他は茎部分の破片で、全容を知ることができない。

**管玉** 碧玉製で、濃緑色を呈する。長径2.7cm、短径1.0cmを計り仕上げは丁寧である。穿孔は片側から行なっている。

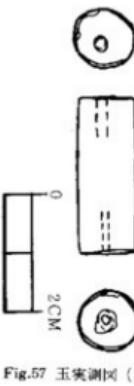


Fig.57 玉実測図 (1/1)

## 第 7 号 墳

### 1. 墳丘 (Fig.58~59: PL.14)

7号墳の現況は、ほとんど水田面と同一レベルで1本の古いハゼの木が立っており、一部に石がかたまってある状態であった。墳丘はわずかに石室側壁にその一部が認められるにすぎなかつた。

墳丘の基底面は他の古墳と同様に赤褐色粘土である。7号墳も平坦面を基本的に基底とし、石室もこの基底面をわずかに掘り下げて形成している。墳丘の規模等は不明であるが盛土の範囲としては周溝から1m程度はなれでいると考えられよう。現存する盛土から考えて墳丘形成過程をみると、掘り方によって出た赤褐色粘土を腰石部分に再度入れこむ過程を第1段階、次に石室の石材を積み重ねると併行して行なう段階を第2段階とすることができよう。第3段階は、大井石の上部に形成される盛土であろう。この盛土も他の古墳と同様に石室の石材が小ぶりのため盛土自体は複雑ではなく単純である。

周溝はセンター部ではなく左右にいの字形に形成されている。吉武塚原古墳群で最も主流をしめる周溝の形態である。この7号墳も他の古墳と同様に周溝から多量の土器等が検出されている。5号墳では、大型の甕等はあまり出土していないが7号墳からは他の土器と混じって大型の甕小型の甕等が右側周溝中央部から6個体出土しており、墓道左の周溝には他の土器群が検出された。

### 2. 石室 (Fig.61: PL.15・16)

本古墳の石室の主軸は、S-27°-Wにとり、ほぼ南西に開口する单室で羨道部がハの字に開く竪穴系横口式石室の構造と考えてよいであろう。この構造は本古墳群では4号と7号とに認められる。現存する側壁は腰石を含めて3段までであり石材も小ぶりな花崗岩を使用しており、石積の方法からみるならばいわゆるレンガ積技法と称せられるものであろう。玄室は、奥巾2m、前巾1.8m、左壁長3.1m、右壁長3.2mを計る。その比は1:1.65の比である。

羨道部は、石材が基底面に達せず浮いた状態で検出された。これは2・4・5・8号墳と同様の形態を持つ羨道部で8号を除いた2・4・5号墳は、羨道の短い形態で、特に4号墳との類似点を多く指示できる。

本古墳は、床石の状態で明らかに追葬が行なわれたことを物語っている。小石を敷きつめたあと扁平な花崗岩の敷石を敷いており、玉類の出土も上下の床石部から多量に出土している。築造時の床石を追葬の時期に一部取り除いた形跡があり、粘土をはった上に小石を敷きつめ扁平な石材をおくが、この石材は築造時の床石とも考えられる。

石室の掘り方は、一応羨道部まではあるが、実際には羨道部はうめられている。石室内部には排水施設と考えられるものはない。

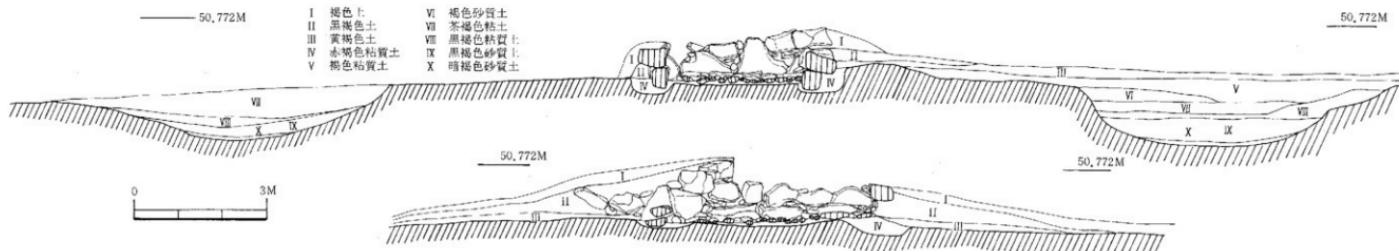


Fig. 60 土層図(縮尺1/60)

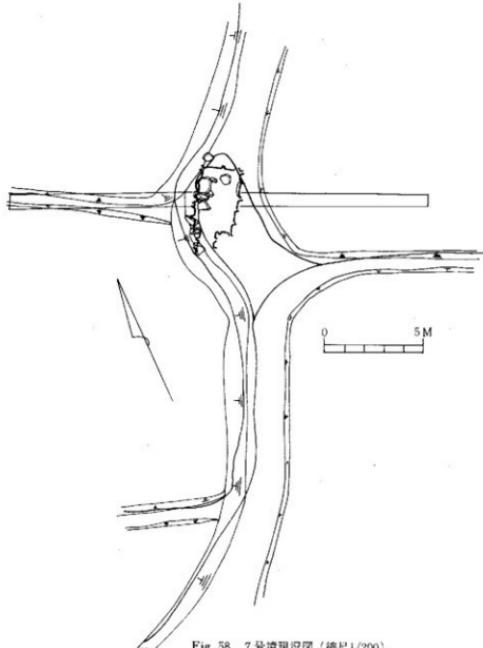


Fig. 58 7号墳現況図(縮尺1/200)

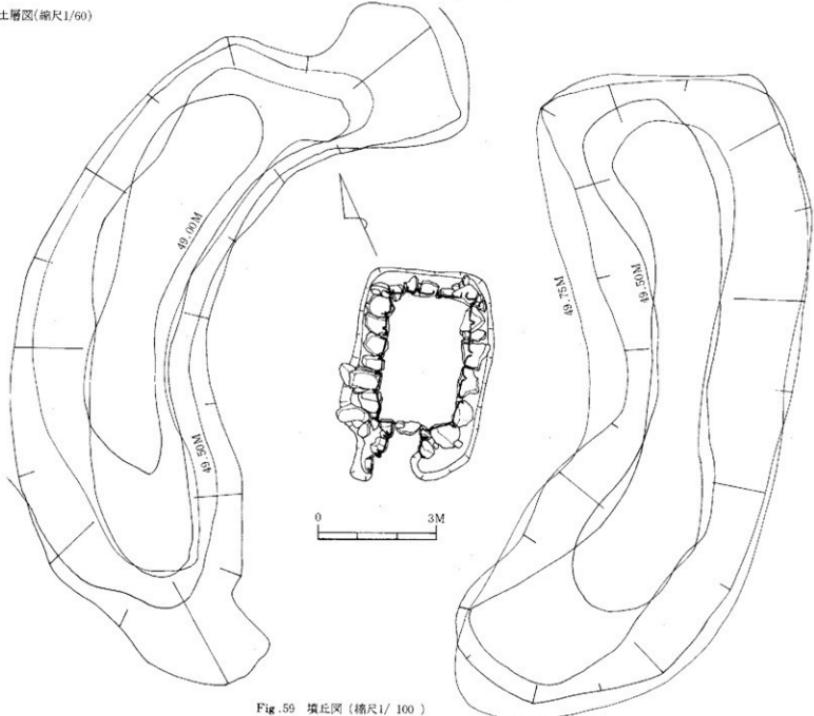


Fig. 59 塗北図(縮尺1/100)

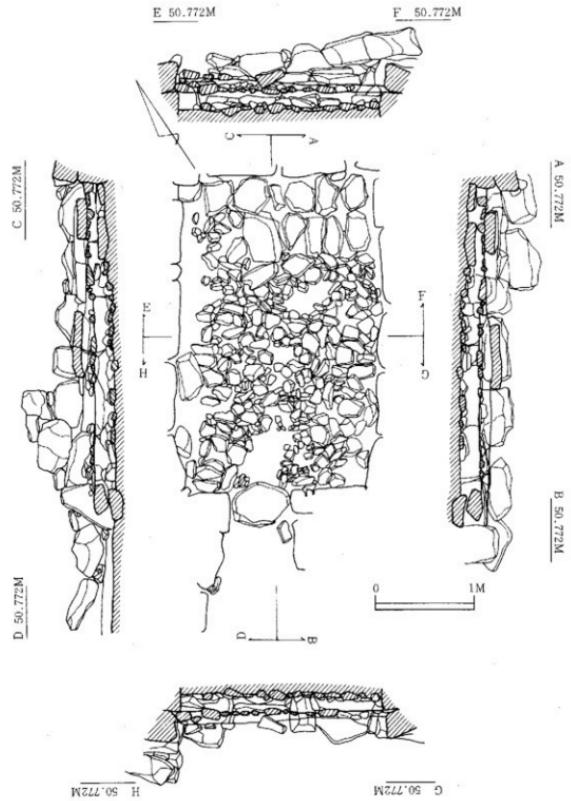


Fig. 61 石器图 (缩尺1/40)

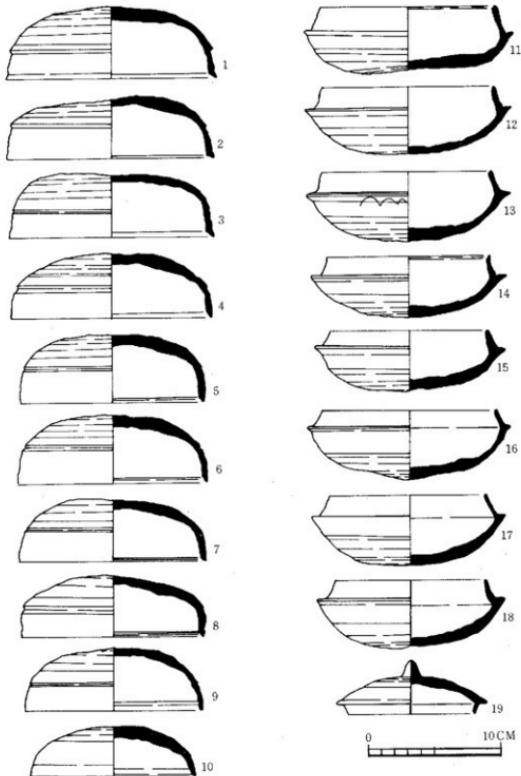


Fig. 62 7号墓出土石器复原图-1 (缩尺1/3)

### 3. 遺物 (Fig.62~67)

7号墳からは、石室内、周溝内より土器・鉄器・玉類が出土している。鉄器・玉類はほとんどが石室からであるが、Fig.65-1の銀環は左側の周溝内より土器と共に出土している。

#### (1) 須恵器 (Fig.62~65)

杯にはI・II・IVの蓋とI類の身がある。I類の蓋(1~9)とII類(10), IV類(19)の蓋がある。杯身はI類(11~18)しか出土していない。蓋はI類の中でも2~3種に区別できる。体部と天井部の境をなす後、段によって、またヘラ削りによっても区別できる。また身も同様に区別できるが一応大きな区分の範囲でI類としている。20・21は無蓋高杯である。20はII類で、杯の部分が2条の凹線を施す。脚部は先端部から下端まで長い方形の透孔を3方向に施す。21はIV類に区別できる。22は短頸壺のIV類に分類できる。肩の張る形態である。

26~28の甌には、II類(27) III類(26) IV類(28)の3種がある。II類の27は頭部がしまらず、やや外反しながら口縁部に達する形態である。26のIII類は27より頭部がしまる形態であるが、26・27には装飾らしいものは認められない。28は26よりさらに頭部がしまる形態を示す。

櫛瓶の29はI類に分類できる。23の平瓶は小型である。口縁部がくびれから外反しそのまま立上り口縁端部に一条の沈線を持ち、端は丸くおさめる。体部の後面は膨らまず、前面の張りは大きい。底部は平底で底面から体部中位までカキ目を施す。24の広口壺も器高が14.5cmの小型である。最大径は胴部上位にあり、口頭部は外反し、端部附近は稜を持ち、端部を丸くおさめる。底部は丸底である。口縁部から胴部中位までナデの成形、中位から底部まで平行叩き目文である。25は長頸壺の口縁部である。口頭部はやや外反しながら口端部で内窓し、丸くおさめる。口頭部中位に一条の沈線を施す。32の横瓶は大型である。口縁部は欠損している。体部は両側面とも膨り出し丸みを持ちながら底部へ達する。両側面は接合する形態をとり、内面にその形跡を残している。外面は平行叩き目文、内面は同心円文である。非常に薄く仕上げている。

33から38は甌である。大きさから3つに区別すると、小型の甌が35・36、中型が33・34、大型が37・38である。35は口頭部の外反が強く、口端部附近で稜を持ち、丸く口唇部をおさめる。最大径は胴部中位にある。36は口縁部が欠損している。胴部は35より丸みがなく最大径は胴部上位にある。両方とも外面は平行叩きの後にカキ目で一部を消す。内面は同心円文。

33は最大径が胴部中位に位置し、口頭部は、垂直に立上り口端部附近で強く外反する。34はやや外反して口頭部は、一条の沈線よりさらに強く外反して丸くおさめる。37は大型で口頭部は一部垂直に立ち一条の沈線部分から外反し口唇部に稜を持ち、鋭くおさめる。口頭部外面は3段に沈線、稜によって区切られ上二段に逆転した波状文を配す。38は肩の張った胴部中位に最大径がある。口頭部は外反しながら端は鋭くおさめる。外面に3条の沈線がありヘラ削りの波状文を配す。33・34・37・38の外面は平行タタキ目、内面は同心円文。

**土師器 (Fig.63~30・31)**30は高杯の脚部である。外面には縦にヘラ削りを施す。脚幅径10.2

39

## 第 7 号 墓

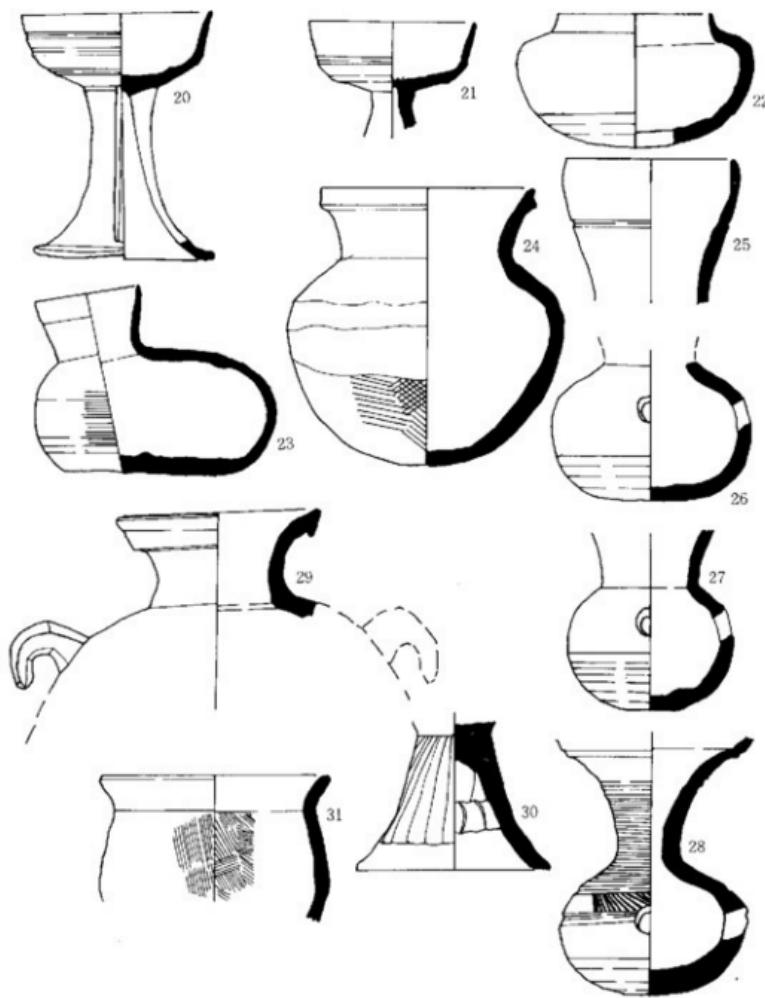


Fig.63 土器実測図-2 (縮尺1/3)



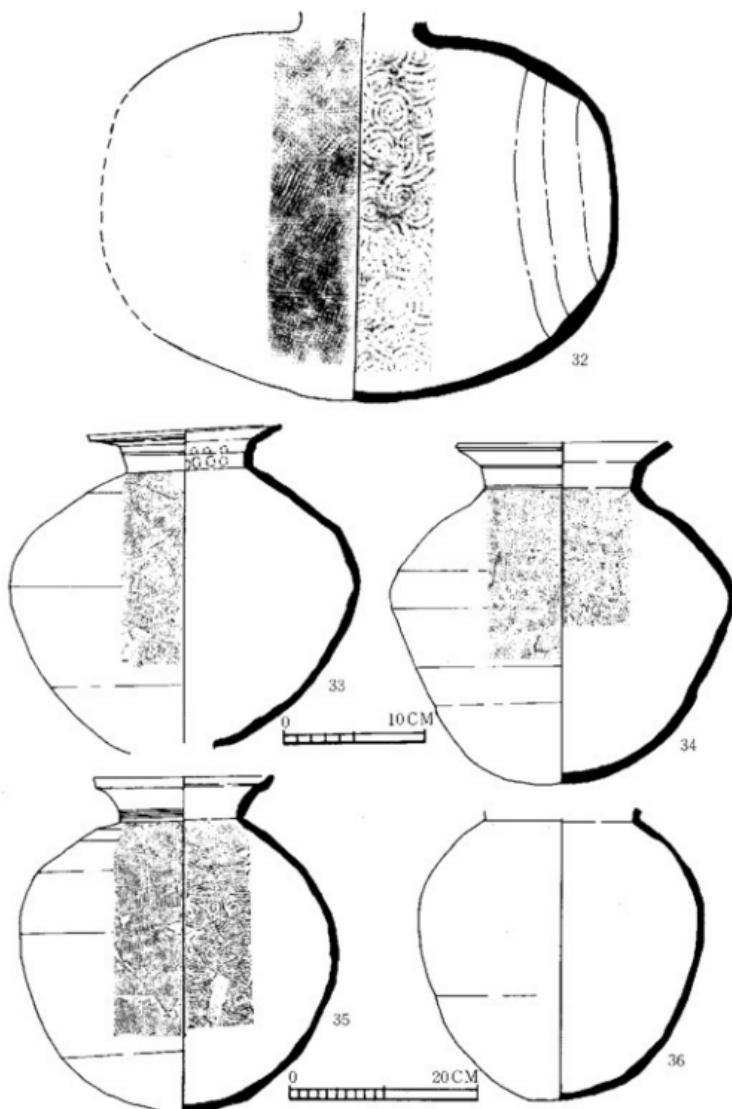


Fig.64 土器実測図-3 (縮尺1/4, 1/6)

cmである。31のカメは体部から内  
壳してきた器形は頸部から外反し  
て口縫部に達し、丸くおさめる。  
外面はナデと刷毛目、内面は頸部  
までナデ、体部は刷毛目調整であ  
る。

(2) 鉄器・玉 (Fig.66・67)

**鉄鎌** (1～13, 15・16) 鉄鎌は  
30本以上を越えるものが出土した  
が、いずれも錆化。細分がひどく  
図示できるものは15本である。出土状態は床面敷石の隙間より検出、  
破片となって全形を知るものはな  
いが、鎌身の形態から広根式と尖  
根式に分れる。1～13は鎌身は若  
干の差異をみせるが、刃先に似た  
形態で尖根式に属し、笠被部から  
張り出した小さな闊をもつ。6は  
茎端を失うだけで比較的全体を知  
ることができる。15・16は広根式  
に属し、笠被部から張り出した闊  
をもつ。

**石突** (14) 木部を挿入する袋部  
をもち端部は比較的丸みをもち、  
突部は両側に鎬をつけて断面を菱  
形に仕上げている。木質が残存す  
る。

**鉄斧** (15) 錆化が著しく、刃部  
を欠失する。木柄挿入の袋部のみ  
残存し、大きさ、形態などは明ら  
かではない。

**馬具** (16・17・18) 鋸具が3点  
出土した。16は刺金を丁字形にし

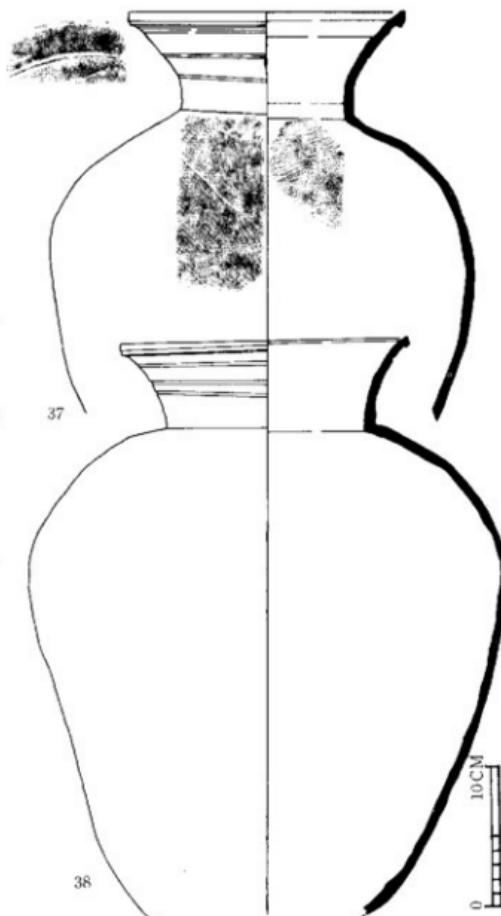


Fig.65 土器実測図-4 (縮尺1/8)

第2章 調査の記録

42

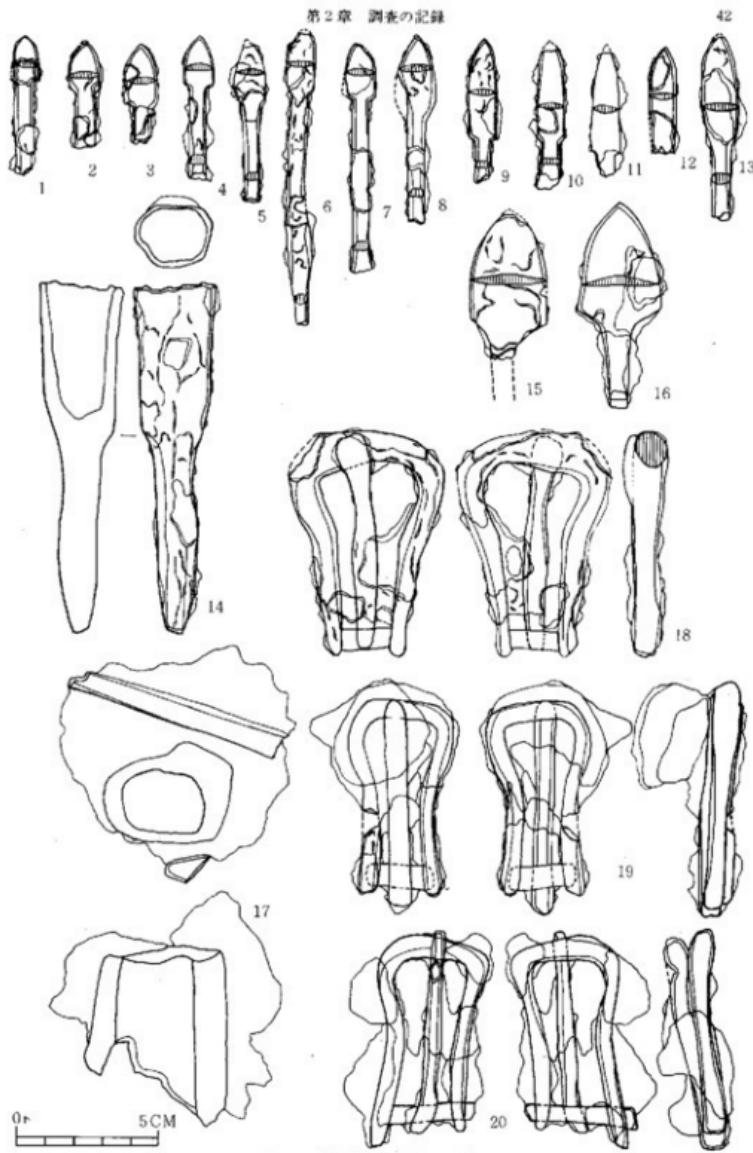


Fig.66 鉄器実測図 (縮尺1/2)

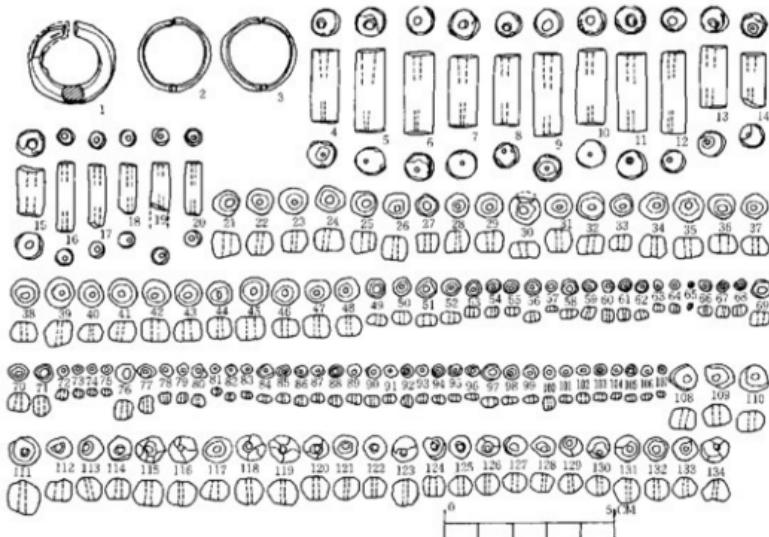


Fig. 67 本寒副风(缩尺3/5)

て基部の間にはめこんだもので、17・18は刺金は基部の横棒に巻いたもので、3点とも兜形を呈する。17・18は透化が著しいが、16は比較的残りがよい。いずれも鞍金具と考えられる。

(3) 装身具類 (Fig67)

**耳環** (1~3) 1は周溝からのもので銅芯銀張で断面は円形をなす。突き合せ部は、やや広めである。2・3は1対になる細めのもの。銅芯金張で円形に仕上げられ、突き合せ部は狭い。遺存状況が悪く図示しなかったが、金張がほとんど剥落した同様の銅芯が出ている。

管玉(4~20) 1~11までは碧玉、12はひすい、13~17は硬質粘板岩製である。孔は両面からと片面穿孔にわけられる。碧玉製のものは、研磨も丁寧である。12は材質が悪く、全体的に研磨がゆきとどかず面にはかなりの凹凸がみられる。13~17、細身で一般的には碧玉製のものより古い型と考えられるが、現況の出土状態では明確にしがたい。

丸玉・小玉(21~107)すべてガラス製である。丸玉類は両端が平たく、胸部が球形に張り出し全体的に断面は方形を呈し扁平である。小玉類は、両端が平たいものと一方に丸みをもつものに分けられ、胸部が球形に張り出すものと直線的なものがある。これらの穿孔は大体において片面からである。

**土製練玉** (108~134) 形は一定ではないが、ほとんど胸部が球形に張り出している。両端部は、かなりの凹凸がみられる。

## 第 8 号 墳

### 1. 墳丘 (Fig.69~70: PL.17)

8号墳の現況は、水田の畦の部分に石材が10数個点在していた程度で墳丘は削平されていると考えられた。また右側辺部は約1.5mの地高差のある農道となっていることで石室自体も大部分破壊されているものと考えられた。実際に右側辺部の周溝等は破壊されていたが、石室左側辺部は現存しており、石室の側壁自体も腰石より4段目までと予想された以上に残りが良く、墳丘自体も約1/3程度残存していた。

墳丘は、他の古墳と同様に赤褐色粘質土を基底面としている。平坦面を基本的に基底としてこの基底面を掘り下げて石室を形成している。墳丘の規模・形状は不明であるが、他の古墳と同様に周溝附近まで墳丘があったものと考えられる。現存する盛土から考えて墳丘形成過程を考えてみると、ほぼ第3段階に区別することができる。この第3段階は他の古墳の墳丘形成と同様で第2段階でも石室の石材が他の古墳より多少大型化するが基本的には同様であろう。

周溝は右側辺の周溝部分は削平されているが基本的に2・4・5・7号墳と同様に「い」の字に形成されたと考えられる。Fig.68の周溝内に2ヶ所多量に土器を検出するところがある。墓道附近の周溝からは、蓋杯・高杯等の小型の土器群が、中央部には、大型の甕 (Fig.76, 54・55) が検出されている。

### 2. 石室 (Fig.72: PL.18・19)

8号墳の石室主軸は、S-15°-Wにとりほぼ南側に開口する羨道部の長い横穴式石室である。玄室は、奥幅20m、前幅1.8m、左壁長2.9m、右壁長3.10mを計り、羨道部は、奥巾0.72m、前巾0.75m、左壁長4.0m、右壁長3.0m、全長約6.9mを計る。玄室内部の石積方法を見るとまだレンガ積技法が認められるがしだいに石室の石材が大型化しつつある点が注目される。ただ1号・3号墳よりはまだ古い形式をとどめており、側壁部に関しては、依然レンガ積の技法が認められる点、過程的な段階かもしれない。

羨道部の閉塞は破壊を受けておらず、このことから羨道部床面には敷石を敷いていないことが判明した。また、玄室に近い羨道部分に閉塞がないことから副室的要素も考えられる。また羨道部は基底面におかれた状態か、もしくは浮いた状態を示すことから7号墳でふれたごとく形態的、石室構造上、注目されるものであろう。特に8号墳は羨道部が3~4mもあるのにかかわらず同様な技法が持ち入られたことは注目されることである。

### 3. 遺物 (Fig.73~77)

上記に記したごとく遺物としては周溝内から多量の土器が出土している。特にここで注目せねばならないのは、2点の陶質土器であろう。両方とも新羅系土器であるが、多量の蓋・杯・高杯とともに検出されている点追跡時にかき出されたものと考えられる。

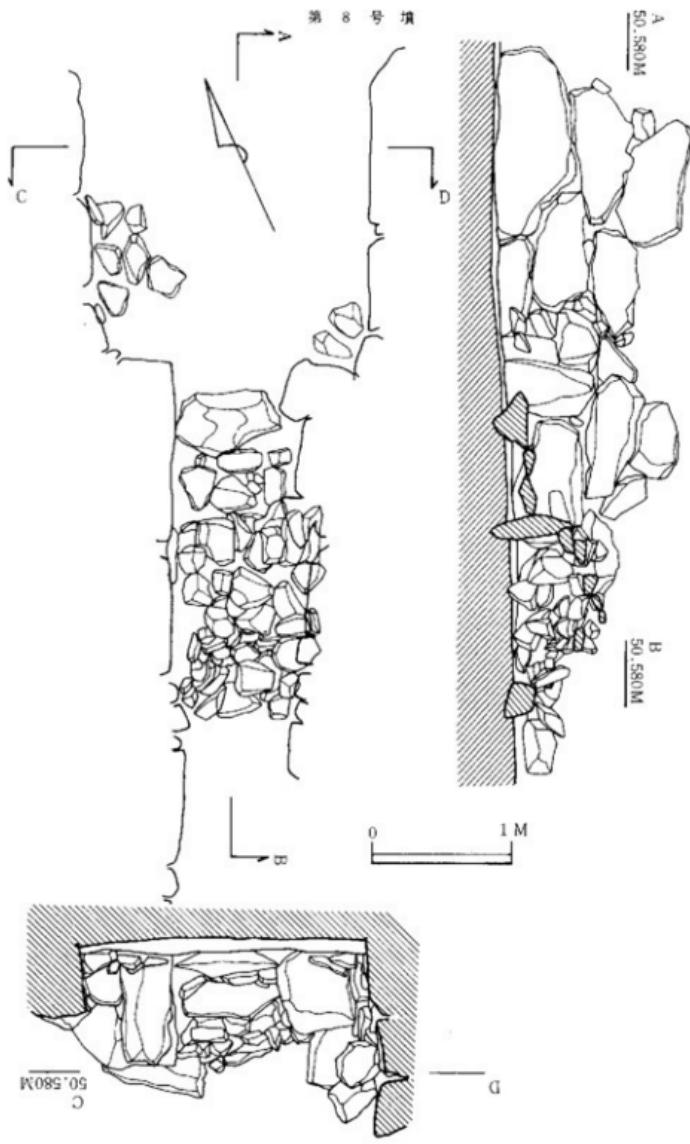
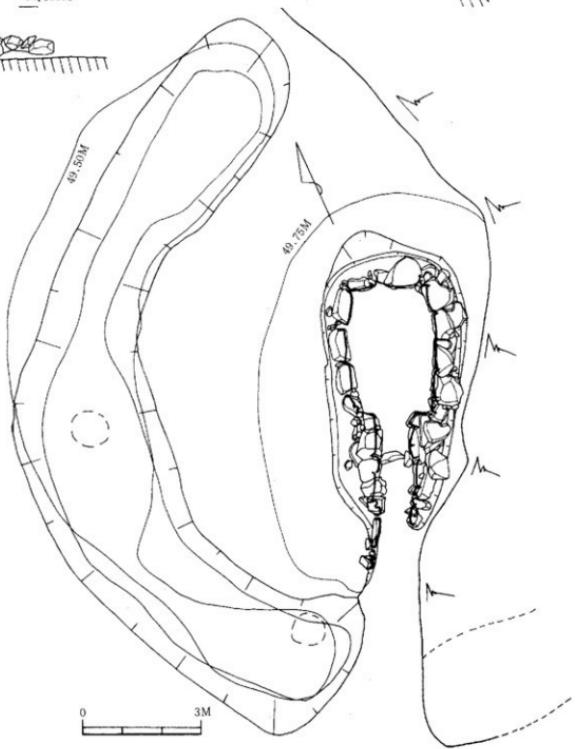
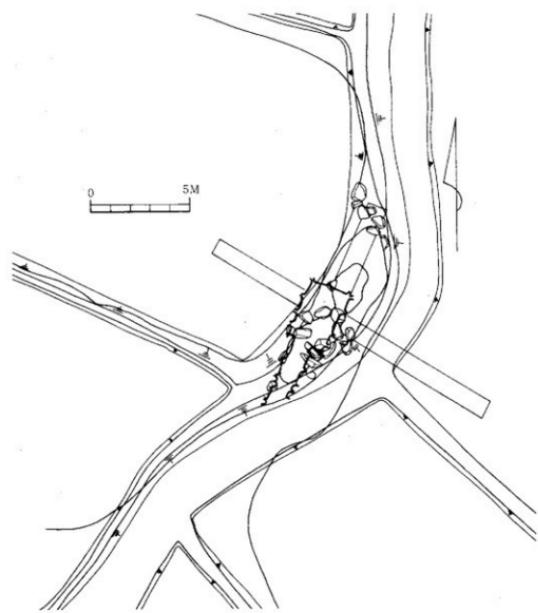
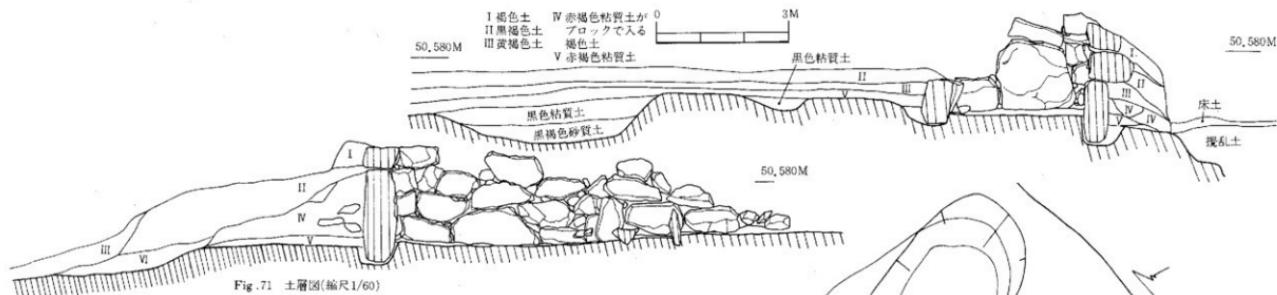


Fig.68 8号墓道部閉塞状態図（縮尺1/40）



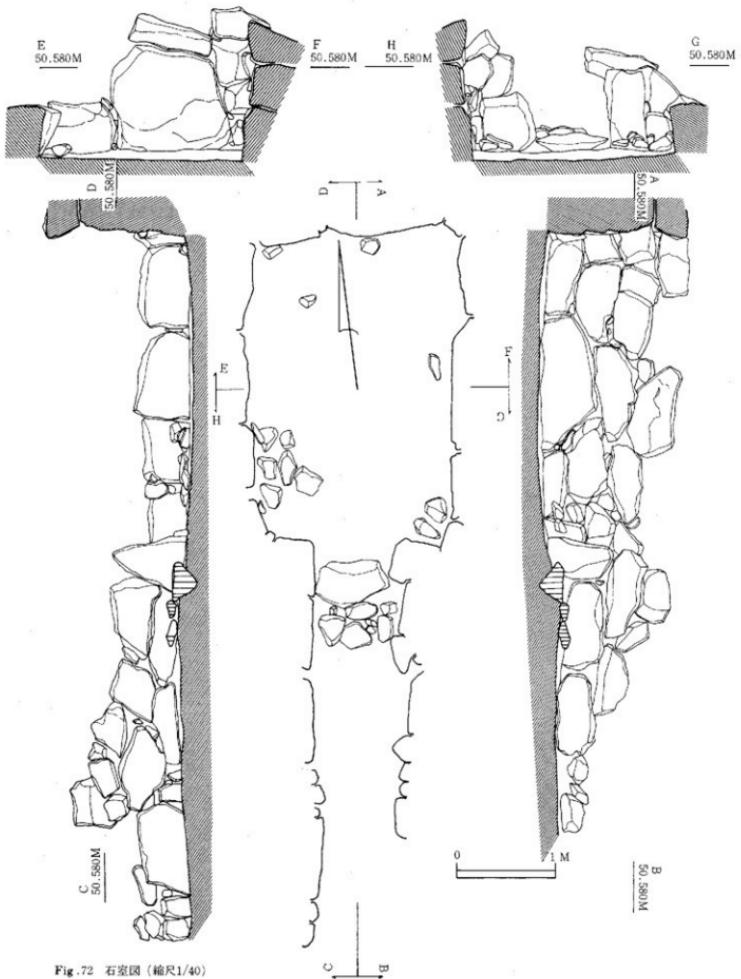


Fig. 72 石室图 (缩尺1/40)

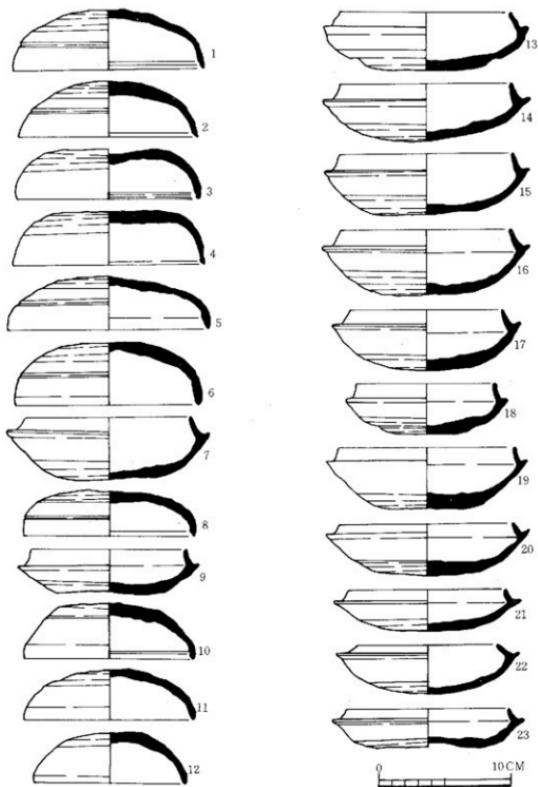


Fig. 73 8号填出土器尖削器-1 (缩尺1/3)

## (1)須恵器 (Fig. 73~76)

杯にはI類からIII類に分類できる。蓋は1・2のI類、3~6、10のII類、11・12のIII類となる。I類でも新しい方に区分できる形態である。8・9はセットで扁平である。II類は口径の大小、器高の大小がある。6・7はセットである。6は口唇部が丸みを持つ。内面に稜を持つことからII類に分類した。III類は口径も小さくなり天井部と体部との境、口縁内面の段、凹線が消える。杯身は13~19のI類、20~21のII類、22~23のIII類となる。I類には18の様な小型の杯身もある。これは生やけの須恵器で4号墳の39~40 (Fig.33)と同じで口縁部が内弯しながら端部で外反、直立するタイプである。II類は立上りがI類より低くなりやや内傾する形態である。III類はII類よりも立上りが一層低く、また内傾し扁平な感じが強くなる。

有蓋高杯は24~30が蓋、32~40が高杯である。蓋はI~IV類に分類でき、高杯もI~III類に分類できる。蓋は24のI類、25・26のII類、27・28のIII類、29・30のIV類に区分できる。24は天井部と体部との境に稜を持ち、口端内面に段を配す。II類の25・26は、天井部と体部との境に浅い沈線に、口端内面にも沈線と変化する。III類の27・28では天井部と体部との境が消え、内面にかろうじて沈線がのこる。口径もII類より小型となり、つまみも鈍くなる。IV類になるとさらに内面の沈線が消え端部も丸みを持つ。高杯は32のI類、33のII類、34~40までのIII類に区分できる。I類の32は杯部の立上り、底部と体部との張り具合、ヘラ削りが2/3程度の特徴を持つ。II類の33は杯部がI類より大きくなり立上りも多少小さくなる。III類は杯部がI・II類より大きくなり、逆に立上りは小さくなる。42・51は無蓋高杯で、42はII類、51はIV類に分類した。45~47、49・50は短頸壺で、49がI類、45がII類、50がIII類、46・47がIV類に分類した。48は49とセットではなく短頸壺の蓋である。43は長頸壺の蓋であるが44の脚付長頸壺とセットではない。44の脚付長頸壺は脚部が欠損している。壺部は体部中央下に一条の沈線、上部に2条の沈線を配し、内傾しながら頸部に達する。頸部からやや外反して口端部付近で急に内弯して端は丸くおさめる。52は長頸壺の蓋と考えられる。宝珠形のつまみを持ち、天井部と体部との境に鋭い稜を持ち、端部も鋭い。天井部には半円圓文並列帶をめぐらしている。表面には自然釉が剥落した形態である。31は把手付無蓋高杯である。把手は退化し装飾の意味しか持たない。体部中央に一条の沈線、上部に3条の沈線を配する。この2点は陶質土器（特に新羅系と呼ばれている）である。53から56は大型壺である。53は頸部から外反しながら口端部で段を端部を丸くおさめる。54は胴部上位で肩が張り下位に多少張りながら底部とつづく。口縁部は2条の沈線を施し、その中間に構造波状文を加える。55は頸部から外反しながら口端部で段を端部を丸くおさめる。56も55と同様に口縁が外反し、中位に2条、上位に3条の沈線を入れその間に文を配す。53~56の外面は平行叩き、内面は同心円文叩きである。

土師器 (Fig.76~57-58) 41は杯部中位から7~8条の沈線を配す。脚部は欠損する。57・58は体部から外反しながら口端部に達し丸くおさめる。中位に沈線が一条配す。内面ともヘラ削り。

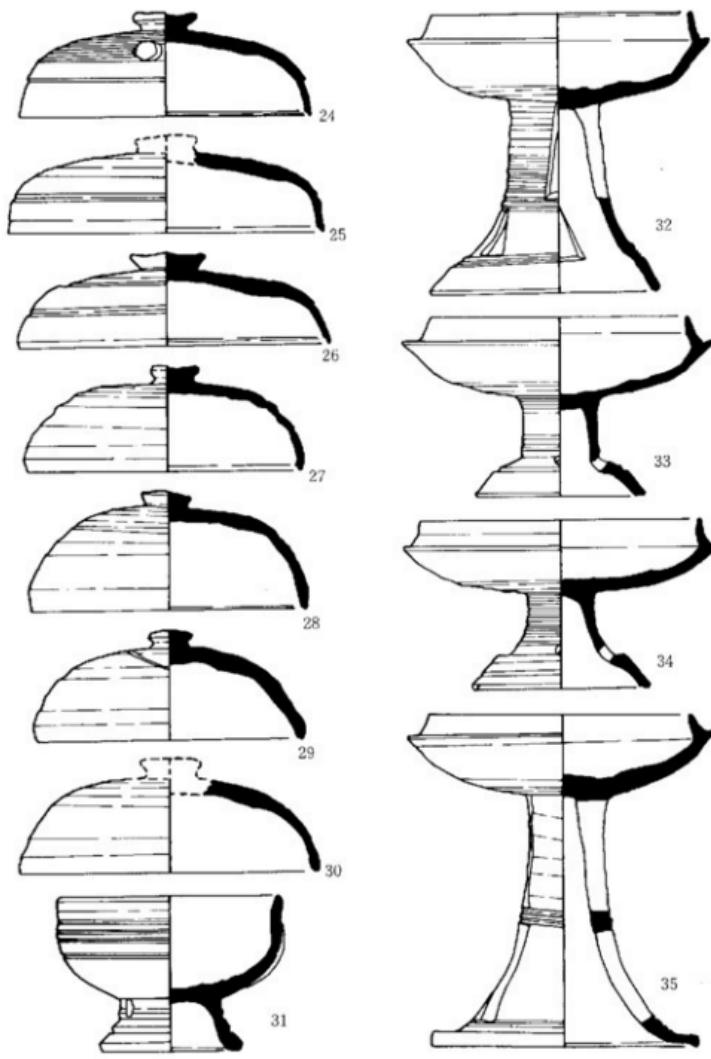


Fig.74 土器実測図-2 (縮尺1/3)

0

10 CM

第2章 調査の記録

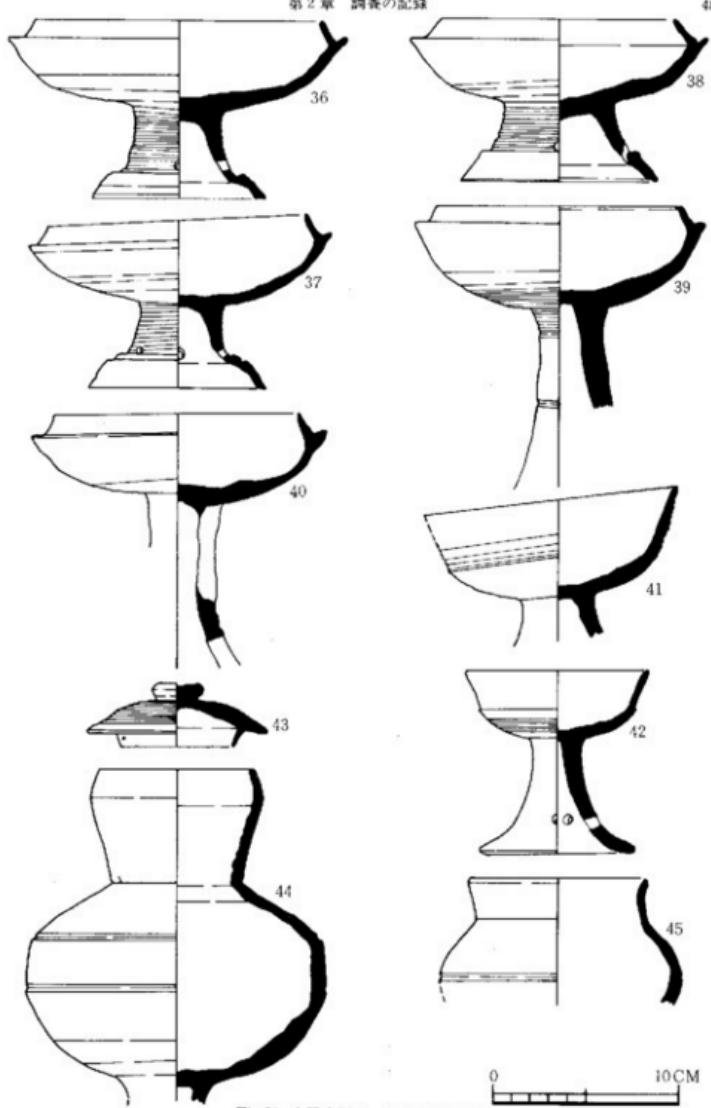


Fig.75 土器実測図-3 (縮尺1/3)

第 8 号 填

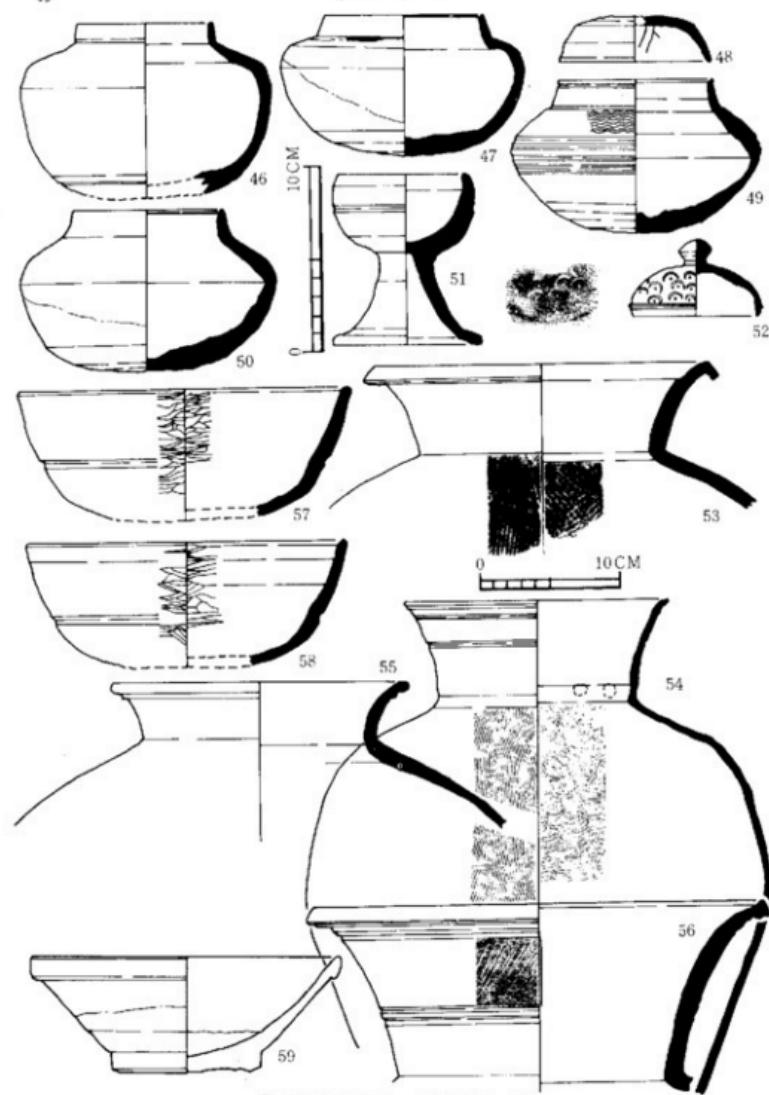


Fig.76 土器実測図-4 (縮尺1/3, 1/4)

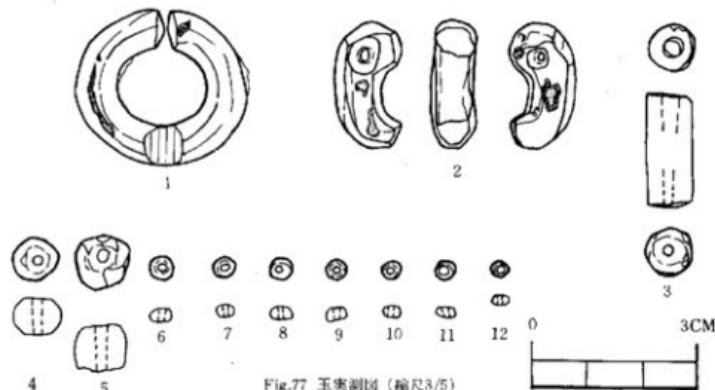


Fig.77 玉実測図 (縮尺3/5)

## (2) 装身具 (Fig.77)

(4) は羨道部、閉塞下の埋土より検出。他はすべて玄室擾乱土よりの出土で、プライマリーな状態ではない。

耳環 (1) 身が太い銀環である。銅芯に銀泊を置いたもので、部分的に剥落、腐蝕がみられる。突き合せは近く、断面は橢円形を呈する。対になるものは検出できなかつた。

勾玉 (2) 橙色を呈するめのう製で、長径2.2cm、短径1.1cm、厚さ0.7cm。頭部の穿孔は一方よりなされ、他の一方より強くむかえ孔を行っている。研磨調整は丁寧ではなく、部分的に棱があり、角ばった様相を呈する。

管玉 (3) 碧玉製のもので濃緑色を呈し、長径2.0cm、短径0.8cmを計る。孔は一方より穿孔され、仕上げは粗雑で面取りの状況を明確に残している。

丸玉 (4・5) 4は濃藍色を呈するガラス製で、両端の磨きは粗雑だが平坦面をなし胴部は球形に張り出している。風化のためか光沢はない。5はめのう製で橙色を呈する。研磨は粗雑でかなりの凹凸がみられる。ともに穿孔は一方からである。

小玉 (6~12) すべてガラス製である。7は淡藍色で、他は黄緑色を呈する。ほとんどが、両端部は平坦で扁平な球形をなし、両端の角は丸く仕上げられている。穿孔はすべて一方向。8号墳出土玉計測表

No.	種類	直径	短径	高さ	孔径	色調	材質	備考
1	耳環	2.3	7.5			青緑色	めのう	
2	小玉	2	3		1~2	青緑色	ガラス	
3		2	4		1.2~3			
4		2	4		1.5~4			
5		2	3.5		1~1.5			
6		2	4		3~2.5			
7		2.7	6		1~2.5			
8		2.3	4		1.5~2.5			
9	丸玉	8.5	10		2~2.5		めのう	
10	管玉	8.5	8.5	20	2.6~3.8	緑緑色	碧玉	
11	丸玉	6.8	7.8		1.7~2.5	淡藍色	ガラス	

### 第3章 結語にかえて

吉武塚原古墳群は、金武古墳群吉武I群の名称を分布調査時に名付けた。この金武古墳群の支群には乙石支群と吉武支群の2つがあり、その中の1支群である吉武支群には16の小支群がある。吉武塚原古墳群は8基から成る古墳群であり、標高49m～53mの中に位置する。ゆるやかな傾斜を持つ平坦面に古墳群が形成されているのは、吉武地区で樋渡古墳と吉武支群J群Q群の3ヶ所である。このような平坦地に古墳群を形成する時期の基礎材料を提出できる様に思う。この古墳群で解明しなければならない問題は数多い。特に吉武支群の1群を破壊される必要上調査記録を作成したが、これで吉武支群の解明する1ページになりえることを目的として記録を中心に記載した。今年度報告される中で吉武・乙石地区では3つの古墳群を調査・報告する。乙石・長石古墳と乙石夫婦塚1・2号墳と本古墳群で、長石古墳群は山の斜面に位置する6基の古墳群、夫婦塚1・2号は、東に傾斜を持つ台地上に近接した巨石墳である。詳細は、各報告書に記載してあるので参照されたい。つまり吉武支群の中で時期の異なる3つの古墳群を調査したこととなり、今後吉武支群の参考になれば幸いである。

吉武塚原古墳群の問題点ならびに古墳群のあり方について簡単に記し、結語にかえたい。

まずヘラ記号(Fig.78)は紙面の都合上、ここに集成したが、このヘラ記号及び土器の分類について、第2に鉄器・装身具について、第3に石室構成等の問題について、第4に製作年代についての問題点を提示したい。

#### 土器について

**ヘラ記号** Fig.78に図示したヘラ記号は約11種に分類できる。線の入れ方、形からもう少し細分できる。特に多いのは「×」「一」「\_」の3種で、他は1～3点どまりである。個体数は500点以上の須恵器が出土しているが、ヘラ記号を有するものは約50点である。その中で杯蓋の割合が多く、匙、長頸壺、平瓶である。出土土器量が類似している広石古墳群のヘラ記号の割合は4割もの高率を示すが、本古墳ではごく少量の1割弱である。従って本古墳群でのヘラ記号については資料を提示するのみで、広石のように区分・形態を研究するに至らなかった。

次に杯蓋・杯身・有蓋高杯の内面に認められる同心円文叩きはFig.79の2・3の様に内面に同心円文が数多くの杯に認められる。この同心円文叩きについて陶邑Ⅰで、ロクロ調整後に中心部に残る粘土の高まりを調整するためのものと考えている。また陶邑古窯址群Ⅱで、田辺昭三氏は、いわゆるII期の段階で杯・蓋に同心円文叩きが出現すること等から量産化の進展によるものと考えられている。本古墳からも同様の同心円文叩きが出現するが、この時期を幾内編年との接点として認められる可能性が高い。またFig.79の1も同様に杯蓋部の大井に認められた平

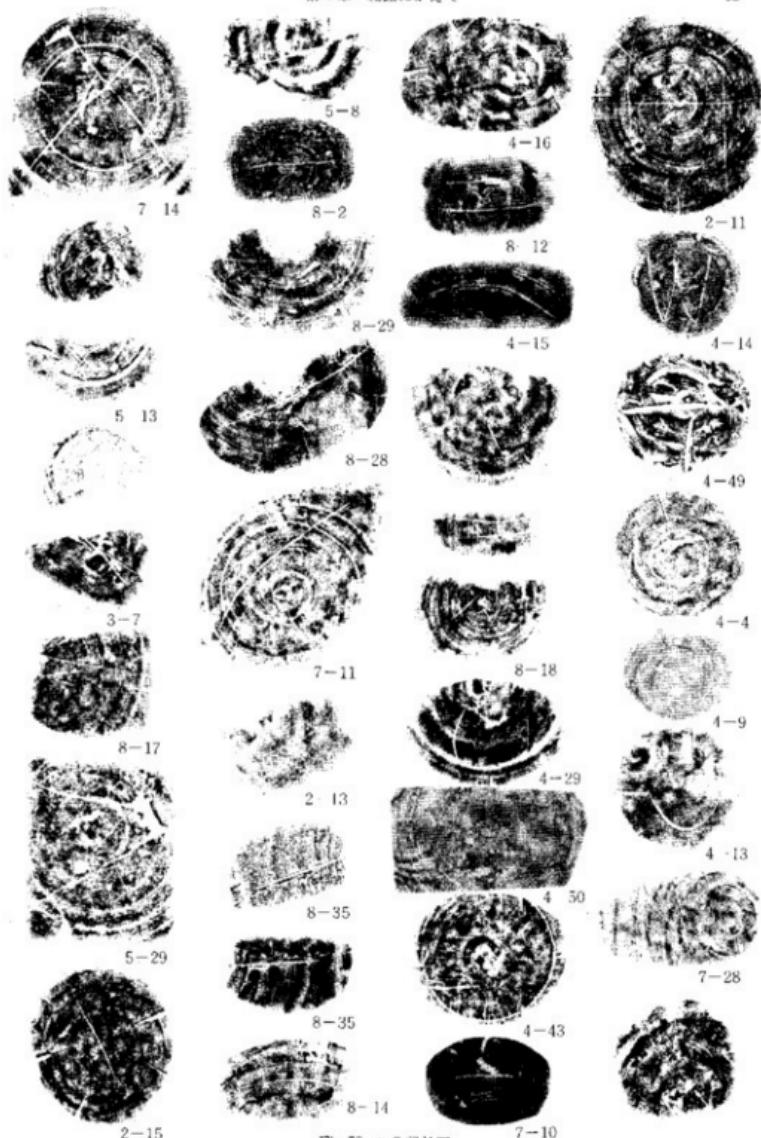


Fig.78 ヘラ記分図

行叩きの痕跡である。

陶質土器と考えられるものに1号墳から脚付広口壺、8号から蓋・把手付無蓋高杯が検出されている。これら3点の土器は、焼成・胎土色調・形態とともに普遍的に見られる日本の須恵器とは異なりを示す。いわゆる新羅系陶質土器と呼ばれているもので、1号墳出土の土器は韓国慶州・忠孝里古墳群第9号墳出土、西岳里古墳出土の広口壺との類似点が多いが胴部中位より上に欠損しているため、広口壺か長頸壺になるかは不明である。8号の蓋は、上部半円圖文を施す点とその形態から長頸壺の蓋で、福岡県・大善寺町伝御塚古墳の出土土器の杯蓋と類似点が多い。把手付無蓋高杯は、慶州・西岳里古墳出土の土器とほぼ同形態を示し、透孔の数が異なる程度である。以上3点は、韓国出土の土器と多くの類似点を指摘できる。次にこれらの共伴遺物が問題となろう。1号墳出土の土器は同溝内出土で共伴遺物としては同周溝内出土の土器と考えられる。8号の2点も同溝内出土で、古くてI類、新しくてIII類の時期と共伴する。

土器の分類基準はP.3, Fig.3で記したが、この中のI類を細分し、小田富士雄氏の須恵器編年時期のどの位置に入るかを検討してみたい。まずI類とした土器群には小田氏の編年からすれば、4つに細分できる。Iの類はFig.34の31・32で代表されるタイプで小田氏の編年でIIの後半からIIIaの時期に、Ib類はFig.34の33・34で代表されるタイプでIc類より小型となる。これもIIの終末からIIIaの時期に比定される。Ic類は39・40で代表されるタイプで多少特種で扁平で立上りもほぼ垂直に立つ形態である。時期は明確ではないがIa類はIb類の時期に比定できると思われる。Id類は大型化がはじまりIIIb期に比定できる。II類はIVa期、III類がIVb期、IV類がV期、V類がVI期に比定できよう。

次に有蓋高杯を杯の編年時期に合せてみるとI類がII～IIIa期、II類がIIIa期、III類がIIIb期、IV類がIVa期に比定できよう。無蓋高杯も同様に比定したが多少疑問が残る点もある。I類がIIIa期、II類もIIIa期、III類はIIIb期、IV類がIVa期、V類がIVb期、VI類がV期。總はI類がII～IIIa期、II類がIIIa期、III類がIIIb期、IV類がIVa期、V類がIVb～V期に比定できる。提瓶は不明確な点が多いがI類をIIIa期、II類をIIIb期、III類をIVa期に、IV類をIVb期、V類をV期に比定した。

鉄器については、玄室内部が攪乱されているにもかかわらず多くの出土をみた。これらのうち2・4号墳は特に注目される。2号墳のU字形鋤先は福岡市内出土の10例目であり、さらに4号墳のバラエティな形態の鉄斧、手鎌の一括出土も市内では類例をきかない。鉄斧は鋸造品が3（本調査での出土は2であるが分布調査の際、4号墳丘上で1表採されている。）4号墳に



Fig.79 土器内面叩き

おいては鉄斧・刀子等の農工具類の出土数に対して直刀等の武器類の僅少は、やはり被葬者の性格の一端を物語るのであろうか。馬具類は替の一部、兵庫鎖があり、セットとしては鞍・鎧が欠けているが、前述したごとく玄室内の攪乱もあり、その意義は大きい。1・2・5・7号墳出土の鉢具・飾金具等の出土はこれらの古墳において、馬具の埋納を想定される。当地区には22支群の古墳群があり、それら支群単位による鉄器等の比較検討は今後の課題であろう。

7号墳出土の装身具類について、攪乱は他の玄室に比較して少いものと思われる。耳環は4個の出土をみたが2個で1対と考えても2対分にしかならないが、これらで被葬者数の規定はさけたい。出土状態をみると、奥壁に近いところに細身金環が検出され玄門近くの攪乱土より太身型が出土している。ゆえに太身型→細身型といった時期的特色を考えられなくもない。碧玉の出土状態は最上段の床面より検出されたのは碧玉製のもので下段にしたがい碧玉製は少く粘板岩の細身型が多くなり、これらから碧玉製→細身型という時期的特色を想定する。当古墳群における玉類出土は2~7号墳にあり玉類は普遍的な副葬品であったことを窺わせる。

石室構成、羨道部形態、周構の形態について問題点を上げてみる。まず周溝は各古墳に作られ、その形態は5つに区分できる。2・4・7・8号に見られる石室の上部と羨道部にブリッジをもつ形態、5号に見られる右側辺部にブリッジを持つ形態、3号のように全周に持つ形態、5・6号のように羨道部にブリッジを持つ形態、1号のように3ヶ所にブリッジを持つ形態がある。この周溝のあり方等は今後の検討としたい。

石室構成について見ると4・7号墳の羨道部がハの字に開く竪穴系横口式石室と考えられ、石積みも小ぶりの転石をレンガ積にするタイプで形の整った長方形のプランを呈する石室である。6号墳は大部分破壊を受けているが、おそらく竪穴式石室と思われる。腰石の部分しかないが、おそらく扁平な花崗岩を利用して作られたと思われる。2号墳はこれも小ぶりの転石を利用しレンガ積みにするタイプで、石室内は羨道部より一段下る。奥壁の部が広がる長方形のプランを呈するタイプで、玄室の左壁が一部張り出した形をとる。5号墳は右壁が破壊されているが、左壁には小ぶりの扁平な石材を利用したレンガ積み技法を用いており、2号と同様に羨道部より低く石室を作る長方形のプランを持つタイプである。8号墳の石室は、奥壁の石材が多少大きくなるが他の石はまだ小ぶりである。石積みはレンガ積みで、ほぼ同様の大きさの石材を利用して長方形に作られたプランを持つ。3号墳は、今まで説明してきた形態とは異なり巨石を使用しはじめる時期であろう。奥壁・両側壁にその形跡をみることができる。この3号墳の石積みは重箱積み技法と呼ばれている技法で、石室も長軸と短軸との比が小さくなり、正方形にやや近づいた長方形のプランを呈する。1号墳も3号墳同様に大きな石材を使用する時期で、石積みも重箱積み技法である。1号・3号を除いて他の古墳は小ぶりな転石を利用したレンガ積みであるが、この1・3号墳は、大きな割石を利用した重箱積み技法を使用しており、石室も1・3号墳以外は長軸と短軸との長さの比が大きい長方形プランを呈するが、この

手の石室は長軸と短軸との比が小さい長方形プランを呈する。

羨道部について特記する形態がある。2号・4号・5号・7号墳と8号墳の羨道部形態が、基底面より浮いた状態と基底面に接した状態で検出されていることである。特に2号・5号墳は、石材の下に土を積み込んだ状態である。掘り方は羨道部まで形成されている。この意味は羨道形成・形態が本來このように作られたのか、もしくは追葬時に羨道だけをつけ加えたものなのかの2つの問題を考えなければならない。また羨道部と玄室の段差を持つタイプの2・5号の類似例が滋賀県竜石山古墳群、大阪府一須賀古墳群、奈良県大和二塚古墳、天理市タキハラ5号墳、奈良県ムネサカ3号墳<sup>13</sup>が確認されている。また中谷雅谷氏は「階段状石積のある横穴式石室について」<sup>14</sup>の中で、これらは、北九州地方の豊穴系横口式石室に系譜を求め、原流を韓国に求められている。この指摘から2・5号墳は豊穴系横口式石室の次の段階にくる石室構成となる。上記に上げた問題点も同様に、この段階で使用される羨道構成の可能性が高い。

#### 築造年代について

石室形態・出土遺物の推定年代から築造の年代を推定してみると、まず4号墳・7号墳の石室形態（豊穴系横口式石室）と出土遺物（杯等）から須恵器編年の中期（6世紀の前半）、次に6・2・5号墳のIIIa期、8号墳がIIIb期で、1・3号のIV期の6世紀末までに築造されたと考えられる。次に出土遺物の中で、須恵器編年を手がかりにどこまでの時期の遺物が出土しているかを考え合せてみると、1号墳は高台付塼のVII期までと考えられる。2号墳は1号と同じVII期までの遺物が出土。3号墳はIVb期の単独、4号はV期までの遺物が認められる。5号墳も4号と同様にV期の遺物が認められる。6号墳はVII期の遺物が含まれている。7号墳は床面が二面検出されているところから明らかに追葬が考えられる。一番新しい遺物はV期である。8号墳はIVb期～V期に比定できる。

註1 亀井明徳「古墳時代の早良平野」 1971

註2 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財分布調査」西部 I 1979

註3 瓢前国続風土記録中会武村

註4 羨道・大野二史線関係埋蔵文化財調査報告書 I 1980

註5 大阪府文化財調査報告書 第28輯 1976

註6 田辺昭三編「陶邑古窯址群 I」 1966

註7 この編年は、小田氏の編年と中村浩氏の編年を参考にして行なった。ただ杯I類の中でIa-kの時期を決定しかねた。つまり大型化する時期はIIIb期からであるがタイプ的にはIIIbの系統を維持していることがあげられる。及び高杯等の編年等は再考する必要性がある。

註8 片江8号墳、倉瀬戸7号墳、大牟田2号墳、高崎2号墳、見花尾1号墳、七隈8号墳、宝満尾古墳、青武戸群3号墳

註9 植沢一男氏より御教示。

註10 水野正好、田代克己他、「東海道新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 1965

註11 大阪府教育委員会「一須賀古墳群の発掘調査」 1972

註12 伊達宗泰他「大和二塚」奈良県報告22 1962

註13 河上邦彦調査「石上・豊田II」 1976

註14 奈良県古墳発掘調査報告 I 1976

註15 「水と土の考古学」 1973

註16 「古文化族叢」「対馬・北九州発見の新羅系陶質土器」小田富士雄 1978

## 土器計測表

(単位cm)

No.	種類	底面cm	形態・手の特徴	胎土	焼成色調	ログ印	出土地點	備考	分類	記号
1-1	棒付直口	45.5 3.3	ヘラは天井部にわざか、内面にナメル	砂粒を含む	赤 青 黄 灰 白	L	1号遺構	二段	A	
2	棒 直 口	37.1 3.3	ヘラ削りがけ以下、内面に指捺があり。	砂粒を含む	白	*	2号遺構 上部	1号	B	
3	無蓋直口	—	棒削り直ぐ棒削りにはカタツムリ、網目ナメル	砂粒	灰 雜色	*			C	
4	灰 直 口	—	素面(内面にナマク)、焼けた作り	砂粒を含む	青 灰 白	*	3号遺構		D	
5	丸 メ	28.7	底の丸み利き、腹壁が丸く、口縁が外反	砂粒多し	黒青 黄白	*	4号		E	
6	高台付碗	—	脚部と底盤との間に高台をつける。	砂粒多し	灰 白	L	1号遺構	高台	F	
7-1	棒付直口	39.4 4.4	天井部と底部の間に指捺で内面に押す	砂粒	青 雜色	L	2号墓室	二段	G	
2	× ×	37.7 4.8	段を持つ。一つ前よりは約2/3の程度	砂粒を含む	白	*	—	3号	H	
3	× ×	38.1 4.8	天井部と底部との段が凹凸形成にわかる。内	砂粒を含む	青 灰 白 A	*	—	4号	I	
4	× ×	39.4 4.8	底付。先端に突出する。へら削りはない。	砂粒	青 灰 白	*	—	5号	J	
5	× ×	38.4 4.8	底付である。	砂粒	青 灰 白	*	—	6号	K	
6	× × 日	38.4 4.8	底盤と天井部との間に浅い窪みが出来ていく。	砂粒の痕跡 底付	青 灰 白	*	—	7号	L	
7	× ×	38.0 3.39	内面に窪みがあるところ。へら削りは約2/3程度	砂粒	青 灰 白	L	2号墓室	二段	M	
8	× ×	37.8 3.4	底付。この靠で大空化した最前段ほどなる。	砂粒	青 灰 白	L	3号墓室		N	
9	× ×	38.7 3.4	大井桶上端がくらむ形態。	砂粒	青 灰 白	L	4号墓室		O	
10	× ×	38.2 4.8	砂粒を含む	白	—	—	—	—	P	
11	× ×	38.1 4.8	内面の底盤が削るが内面にはまだ焼成	砂粒を含む	青 灰 白	*	2号墓室	二段	Q	
12	× ×	38.3 4.8	が残る。へら削りは約2/3程度	砂粒を含む	青 灰 白	*	2号墓室		R	
13	× ×	37.5 4.3	内外面に火被りが消え、小型化してくる。	砂粒	中 青 灰 白	*	1号墓室		S	
14	× 田	32.9 4.2	内外面に火被りが消え、小型化してくる。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	T	
15	× ×	32.2 4.13	へら削りと内面の窪みとなる。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	U	
16	× ×	32.1 4.1	口縁を削ると底がなる。	砂粒を含む	青 灰 白	*	—	—	V	
17	× ×	31.2 3.85	砂粒を含む。小孔が残る。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	W	
18	× × N	30.8 3.37	一層底をもつへら削りない口縁を残す。	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室		X	
19	× × V	30.8 3.37	内面から入りがなくなり。底下が一段と違う。	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室	二段	Y	
20	× × V	30.7 2.5	内側に入れる。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	Z	
21	× × M	30.3	内面から入りがなくなり。底下が一段と違う。	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室	二段	A	
22	× × M	30.2 2.34	む。火打である。内外ともナメル。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	B	
23	横身直口	33.7 4.4	胎体が細長く、全体的に体側で振り、内面に	砂粒を含む	青 灰 白	*	3号墓室	二段	C	
24	× ×	32.2 4.79	胎体は直角へへら削り約1/2の程度	砂粒少	青 灰 白	*	—	—	D	
25	× ×	32.4 4.4	以上より1cm以上であるが大型化していく。	砂粒を含む	青 灰 白	*	—	—	E	
26	× ×	32.0 4.4	この段階で底盤がくしきみがある。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	F	
27	× ×	31.8 3.7	内面は火被り。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	G	
28	× × H	31.8 4	胎体の火被りが強めで土台より多く内包する。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	I	
29	× ×	31.7 4.6	足立りが内面に残る。口縁部を削りよく削る。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	J	
30	× ×	31.2 4.3	削る。小型で一層底をもつ約2/3程度。	砂粒を含む	青 灰 白	*	—	—	K	
31	× ×	30.6 4.3	ナメル。土台の土壁である。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	L	
32	× ×	30.1 3.3	小型で火被りが強めで土台をもつ約2/3程度。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	M	
33	横身直口	31.7	胎体が細長く、直角から斜めで、胎体と底盤	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室		N	
34	× × M	30.4 3.6	部が大きくなり。胎体を削り直ししながら	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室		O	
35	× ×	29.9 3.5	口縁部まで削る。一層底は全く残さない。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	P	
36	× ×	—	小型の丸底の。胎体と土台ははく離。	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室	土師器	Q	
37	横身直口	30.7	供給口と火被りの窓口が口縁部に残る。	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室		R	
38	輪 壁直口	—	口縁部が火被りから削除にかけてある。	砂粒多し	青 灰 白	*	3号墓室	輪壁直口	S	
39	白 瓢	—	底部のみであるが高台ではほぼ直して区別	砂粒	白 天 灰	*	2号墓室		T	
40	×	—	できる限りは瓶形にはかららずその上部で	砂粒	青 白	*	—	—	U	
41	×	—	終わる。	砂粒	青 白	*	—	—	V	
42	×	—	—	砂粒	青 白	*	—	—	W	
43	丸 メ	22.4	中型のカヌメの玉縁が玉縁状をなす。口縁	砂粒多し	青 灰 白	*	2号墓室	玉縁	X	
44	丸	20.7	部は削りかねて、周囲平行、内面に凹凸がある。	砂粒	青 灰 白	*	—	—	Y	
45	盤 瓢	17.4 23.1	内方穴開きは同じで、口縁は外方にならん	砂粒	青 灰 白	*	—	—	Z	
2-1	横身直口	31.1 3.7	内・外に内面がわざかに残り大型である。	砂粒	青 灰 白	*	2号墓室		A	
2	× ×	34.8 4.18	。へら削りは約2/3以下	砂粒を含む	青 灰 白	*	—	—	B	
3	× ×	34.1 3.2	大型と小型の二種類ある。へら削りは木	砂粒多じ	青 灰 白	*	—	—	C	
4	× ×	31.9 3.75	削りの静けさを残す沿子ア	砂粒	青 灰 白	*	—	—	D	
5	横身直口	30.4	—	砂粒が1cm以内で内面が無い	青 灰 白	*	—	—	E	

No	種類	法量	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	寸法	出土地点	備考	分類
6	輪 垂 目	12.0	表面も大きくて削りはほり下 内面はナメ、口部の中にもきずがある。	2-3mmの大きさで 2-3mm	心・あるいは 不	青 黄 色	3号灰瓦 14.5 x 9.5	3号灰瓦	2.2.0 1.6 x 0.7	E
7	* *	12.0 3.75		ノ	不	青 黄 色	3号灰瓦 14.5 x 9.5	3号灰瓦	2.0.1 1.6 x 0.7	E
8	* *	12.0 3.5	は	表面が凹、口部の中にもきずがある。	あま・さ	青 黄 色	3号灰瓦 14.5 x 9.5	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
9	* *	12.0	は	表面が凹	ノ	青 黄 色	2号灰瓦 14.0 x 9.0	2号灰瓦	2.0.5 1.6 x 0.6	E
10	* 1脚	10.0 4.5	表面は1-2mmの凹で内面は削り目 全体が削り目である。	削れ目	自	青 黄 色	1号灰瓦 14.0 x 9.0	1号灰瓦	2.1.2 1.4 x 0.7	E
11	短 球 圆 盘	10.0 3.75	表面は1-2mmの凹で内面は削り目	削れ目	青	青 黄 色	3号灰瓦 14.0 x 9.0	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
12	短 V 盘	10.0 3.75	表面が少しより削り跡に付いて広い小穴 底面が削り跡である。	削れ目を含む	や・あま・さ	青 黄 色	3号灰瓦 14.0 x 9.0	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
13	* 1脚	10.0 3.5	底面が削り跡である。	削れ目を含む	自	青 黄 色	3号灰瓦 14.0 x 9.0	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
14	短 U 直	10.0 3.5	底面が削り跡である。	削れ目を含む	自	青 黄 色	3号灰瓦 14.0 x 9.0	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
15	窓	24.0	特の溝と縦と横のなだらかな溝のもの。	2mmの溝がある事	や・あま・さ	青 黄 色	3号灰瓦 14.0 x 9.0	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
16	*	20.0	丸い、25mmの窓の窓枠に1mmの窓枠がある。	窓枠	青	青 黄 色	-	-	-	E
17	*	12.0	窓枠の窓枠は平行で内面は削り跡である。	窓枠	少	青	-	-	-	E
18	窓	15.7 4.5	U型の大きな窓枠で内面が削り跡である。	よじり	不	青 黄 色	3号灰瓦 14.0 x 9.0	3号灰瓦	2.0.0 1.6 x 0.7	E
19	*	15.5 3.75	一見窓枠があるが内面は削り跡である。	よじりを含む	白	白 海 色	3号切削 1.0	-	-	E
20	*	15.5 3.5	内面は窓枠でもうつる、大型窓である。	よじりを含む	白	白 海 色	-	-	-	E
21	窓	18.0 4.0	大型大窓の窓枠で窓枠同心円文で窓枠に甲子	削れ目	あま・さ	青 黄 色	人間灰 4.5x1.5	人間灰	2.0.0 1.6 x 0.7	E
22	ふく口器	12.0	口器の内側は削り跡である。	削れ目を含む	少	青 黄 色	3号切削 1.0	-	-	E
4-1	斜 直 U 直	12.0 4.5	U字型・直角の窓枠で窓枠を削る。 内面の窓枠と窓枠をもつて、へり削りは2/3程度、窓枠も高い、内面のナメ。	削れ目を含む	自	青 黄 色	4号灰瓦 14.0 x 9.0	4号灰瓦	2.1.0 1.6 x 0.7	E
2	* *	10.0 4.0		削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
3	* *	12.0 5.2		削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
4-4	斜 直 U 斜	12.0 4.5	U字型で直角の窓枠と窓枠同心円文で窓枠に甲子	削れ目	あま・さ	青 黄 色	4号灰瓦 14.0 x 9.0	4号灰瓦	2.1.0 1.6 x 0.7	E
5	*	12.0 3.5	窓枠は削り跡である。	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
6	*	12.0 3.5	窓枠は削り跡である。	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
7	*	12.0 4.0	窓枠は削り跡である。	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
8	*	12.0 3.5	窓枠は削り跡である。	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
9	*	12.0 4.5	内面の窓枠がある。	削れ目を含む	自	青 黄 色	4号灰瓦 14.0 x 9.0	4号灰瓦	2.1.0 1.6 x 0.7	E
10	*	12.0 4.5	内面の窓枠がある。	自	青 黄 色	-	-	-	-	E
11	*	12.0 4.5	窓枠がある。	自	青 黄 色	-	-	-	-	E
12	*	12.0 4.0	内面はナメ	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
13	*	12.0 4.0	少	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
14	斜 直	12.0 4.0	少	削れ目を含む	青	青 黄 色	-	-	-	E
15	*	12.0	斜りも大半が削り跡のものとなり、端である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
16	*	12.0 3.5	内面はナメ	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
17	*	12.0 3.5	内面が削り跡が盛んである。部分的に削 り落としをされているからかと見えどその内面は	削れ目を含む	青	青 黄 色	-	-	-	E
18	*	12.0 2.0	内面が削り跡が盛んである。	削れ目を含む	青	青 黄 色	-	-	-	E
19	*	12.0 4.0	内面はナメ	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
20	* N	9.0 3.1	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
21	輪身 直	9.0 3.5	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
22	*	10.0 3.0	斜りも大半が削り跡のものとなり、端である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
23	*	12.0 4.5	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
24	*	12.0 3.5	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
25	*	12.0 4.0	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
26	*	12.0 5.0	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
27	*	12.0 3.5	少	削れ目を含む	自	青 黄 色	-	-	-	E
28	*	12.0 4.0	内面が削り跡である。	削れ目	青	青 黄 色	-	-	-	E
29	*	12.0 4.0	内面が削り跡である。	削れ目	青	青 黄 色	-	-	-	E
30	*	10.0 3.5	少	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
31	斜 直	12.0 4.0	少	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
32	* 今	12.0 5.5	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
33	斜 直	12.0 4.7	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
34	斜 直	12.0 4.0	セ・トヨロの窓枠が斜めで入り空気入れがある。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
35	斜 直	12.0 4.0	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
36	斜 直	12.0 4.0	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
37	斜 直	11.0 5.5	30-40cmの少しだけ手仕事感、後半ほどし ている。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
38	斜 直	12.0 5.0	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
39	斜 直	12.0 4.5	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
40	斜 直	12.0 4.0	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E
41	斜 直	12.0 3.5	内面が削り跡である。	削れ目を含む	白	白 海 色	-	-	-	E



No.	種類	法量	形態・手法の特徴	胎土	施成	色調	出土地点	備考	分類	Fig.
5/ 0	軽身土器	11.7± 0.6 12.0± 0.11	1枚も大きくなる。ヘドリ目は1/2程度 地盤に大きな輪郭を残す。	タケノコの輪郭 地盤	わまい 地盤	白 灰白色	—	空洞等なし 刀子等	1a	1
10	* 両耳	14.2 ± 2.7	地盤に大きな輪郭を残す。	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	—
11	高 口	10.0 ± 2.8	大腹窓。窓部は横長である。内面には 模様がある。	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	—
12	* ノ	16.8 ± 0.5	窓部が横長である。	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	2-21
13	* ノ	15.0 ± 0.5	窓部が横長である。	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	2-35
14	脚	11.8 ± 4.0	窓部が横長である。底部との接合部で 窓部が凹へる。	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	—
15	六 手柄器	11.4 ± 1.3	窓部が横長。底部と窓部で窓部の内側 と底部の内側で窓部の内側と底部の内側 と底部の内側で窓部の内側と底部の内側	手捏手すきで現る	手 捏	白 灰白色	—	—	—	—
16	口	—	窓部が横長。底部と窓部で窓部の内側 と底部の内側で窓部の内側と底部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	—
17	*	5.4 ± 1.7	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏手すき	手 捏	白 灰白色	白	空洞等なし 刀子等	1a	1
18	無 脚	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏手すき	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
19	脚	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏手すき	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
20	* 田 盆	10.8 ±	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	40
21	有 目 盆	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	—	—	—	47
22	角 盆	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
23	* H	13.0 ± 17.9	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
24	* H	14.6 ± 19.2	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
25	* H	13.6 ± 16.1	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
26	* H	13.5 ± 24.2	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
27	有 盆 高脚	7.0 ± 4.5	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	47
28	高 口	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
29	脚	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
30	* I	7.5	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
31	腰 口	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
32	*	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
33	短 筒	5.5 ± 19.7	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
34	* V	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
35	丸	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
36	*	13.6 ± 12.2	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
37	角 口 盆	9.7 ± 6.0	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
38	* V	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
39	* V	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
40	脚	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
41	脚	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
42	* ノ	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
43	筒	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
44	脚 付 盆	—	窓部が横長。窓部の内側で窓部の内側	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
46	1. 田 盆	2.3±0.6 4.7	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	空洞等なし 刀子等	1a	55
5	2	14.5 ±	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
3	* H	13.4 ± 3.7	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	6号が有 6号が有	—	—
4	* V	14.0 ± 2.8	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	6号が有 6号が有	—	40
5	* V	13.8 ± 2.5	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
6	*	12.6 ± 1.2	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
7	*	10.6 ± 2.3	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
8	*	—	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
9	脚 1	13.2 ± 4.0	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	空洞等なし 刀子等	1a	1
10	*	10.0 ± 4.0	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	6号が有 6号が有	—	—
11	*	11.6 ± 4.1	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
12	脚 2	10.8 ± 3.6	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
13	*	13.2 ± 1.6	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	2ととも外縁は新石器時代の内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	—	—
14	*	16.1 ± 1.5	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
15	*	20.9 ±	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	6号が有 6号が有	—	55
16	*	—	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
17	ふくご付	—	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	6号が有 6号が有	—	56
18	*	—	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
19	*	—	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
20	*	—	内面は斜面状のもので傾斜する。内面 に後退溝。ヘドリ目は1/2程度。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	—	—	—
2-1	軽身土器	16.2 ± 5.5	天井部との間に縦を作り、内部同様に斜 面を作り、内面側は直線的。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	2号が有 2号が有	1a	62
2	*	10.8 ± 4.0	天井部との間に縦を作り、内面側は直線的。	手捏	手 捏	白 灰白色	白	2号が有 2号が有	1a	4

No.	種類	法量cm	形態・手法の特徴	胎土	施成	色調	形状	出土地点	備考	分類Fig.	
7-3	棒 素1型	15.4 3.9	内腹は付子。	砂利を含む 小石を含む	真 赤	青灰 色	右	7号古墳	2.1	I a: 62	
4	"	15.0 4.0	塊が複数個二重、内部は土塊を纏む。	砂利を含む	ノ	青灰 色	右	"	3.5	I b	
5	"	14.9 5.1	塊部は薄い、ヘラ削りは1/2-2/3、内部	砂利を含む	ノ	青灰 色	右	2号	2.6	I b	
6	"	14.8 5.2	はナラと同心円文を彫る。	砂利を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	2.8	I b	
7	"	14.2 4.7	塊が洗練して変化し、内部は段から成形する。ヘラ削りは付子、内部に同心円文	砂利を含む	不 良	灰 白	右	7号古墳	3.3	I d	
8	"	13.8 4.6	砂利を含む	砂利を含む	ノ	青灰 色	右	"	2.2	I d	
9	"	13.5 4.6	支撑物を多く含む	砂利を含む	ノ	ねずみ色	右	7号古墳	2.4	I d	
10	棒 素 日蟹	13.6 3.6	内部の洗練だけとなり小型化する。	砂利を含む	ノ	灰	左	"	"	I d	
11	棒身 T 型	13.9 5.2	立上りから内腹、立上り角は1.6cm	"	ノ	青灰 色	左	3号古墳(上河)	1.6	I a	
12	"	12.0 5.1	程度、大型で表面も高め。ヘラ削りは砂利少	中 少	良	青灰 色	右	7号古墳	5.7 1.9	I a	
13	"	13.9 5.2	2/3、内部は、でも同時	毛を含む	良	青灰 色	右	7号古墳	3.5	I a	
14	"	12.4 4.65	18とともに立上り高さは1.5cm程度。ヘラ削 りは2/2-2/2。	"	ノ	青灰 色	右	14.87 1.4	1.8	I d	
15	"	13.9 4.6	18-20大型である立上り高さは1.1cm	砂粒を多く含む	不 良	白 天	左	"	14.85 1.1	I d	
16	"	13.2 5.2	立上りから内腹、立上り角は1.1cm	砂粒を含む	ノ	青灰 色	左	"	15.4 1.5	I d	
17	"	12.0 5.0	前後ともなる。ヘラ削りは1/2。内部	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	16.7 1.0	I a	
18	"	11.4 5.0	は同心円文の帶を有する。	"	ノ	青灰 色	右	7号古墳	14.4 1.4	I d	
19	素	9.5 4.1	内曲線より外の直線で底盤部等のつまみ が付く。	多孔質陶器(2-3cm) の底盤部等	不 良	青灰 色	一	7号古墳	22.5 3.9	62	
20	無蓋扁瓶	10.1 13.3	2002年2月の発見を示す。内腹はやや内凹、立上りから内腹を示す。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	6.1	I d	
21	"	9.7 7.2	反、立上り等もなくなる。ナ。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	左	"	2.9	I d	
22	無 盖 頭口	8.8	縦6.9cm、横6.9cmの頭部器。内径も才9mm	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I a	
23	廣 扇	--	縦合部の2ヶ所。全体にナギで生上げ	砂粒を含む	良	青灰 色	右	3号古墳(下室)	"	I a	
24	広 口 直	11.4 18.0	立上り下付(平行)、上部はアーチ、内腹	砂粒	素	青灰 色	右	7号古墳	"	I d	
25	広 口 直	9.1	口輪略高み、底盤部は内凹する。ナギ	砂粒	ノ	青灰 色	右	7号古墳	"	I d	
26	縦 扇	--	20-22縦部が尖らずすローラー状かゆみ が付く。底盤部は内凹する。底盤には底盤	砂粒を含む	ノ	灰	左	2号古墳	"	I d	
27	"	11.1	反対して底盤がある。底盤には底盤	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
28	"	9.8	ナギを加えてある。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
29	後 線 I	10.4	耳が浅くないのが特徴である。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
30	無 盖 瓶	--	頭部のみあるが底盤はあらわす。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	3号古墳(韓国) 10.3 7.1	1.0	I d	
31	カ ノ	11.9	内外と手筋を調節して底盤を尖らせる。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	"	I d	
32	廣 扇	0.5 2.7	大型で筒状の平底、内腹は内凹する。	砂粒を含む	良	青灰 色	右	"	"	I d	
33	"	45	33-362年中盤である。37-38は大型のカ。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
34	"	20.2 48.0	33-362年中盤である。最大が頭部が底盤	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
35	"	19.5 36	33-362年中盤である。内腹は内凹する。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	34.4	I d	
36	"	39	33-362年中盤である。内腹は内凹する。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	36.5	I d	
37	"	76	33-362年中盤である。内腹は内凹する。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	60.5	I d	
38	"	41	33-362年中盤である。内腹は内凹する。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	7号古墳	67.6	I d	
8-1	終 素 I 型	14.4 4.5	片端と体部との境に波瀬がある。	砂粒を含む	良	青灰 色	右	8号古墳	2.2	2.5	1.5
2	"	18.8 4.3	ヘラ削りは約7割以上。内腹は弱い。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	左	2.2	"	
3	"	14.0 3.8	天井部と体部との境がなく内腹は底盤が	砂粒を含む	ノ	青灰 色	左	"	"	I d	
4	"	14.5 4.1	入る。大型化しへへと削りは1/2程度である。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
5	"	15.2 4.1	"	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
6	"	13.7 4.7	内腹の内凹部がある。天井部と天井部との境が付子となる。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
7	短身 I	12.7 4.7	内腹となり内外とも波瀬がある。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
8	短身 I	13.7 3.9	小型であるが、内外ともに波瀬がある。	砂粒を多量	良	青灰 色	右	"	"	I d	
9	短身 I	13.8 4.4	ヘラ削りは約7割程度。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
10	短身 II	12.8 4.1	内腹の内凹部がある。天井部と天井部との境が付子となる。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
11	"	13.0 3.8	小型となり内外とも波瀬がある。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
12	"	13.6 3.9	ヘラ削りも1/2以下	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
13	短身 I	12.8 4.4	体側の波瀬がある。立上りは内側に、ヘラ削りは約7割程度。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	"	"	I d	
14	"	12.9 4.4	削りは1/2程度。立上り角は1.2cm	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	10.3 1.2	1.2	I d	
15	"	13.1 4.5	立上りは直線的で、立上り角は1.2cm程度	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	15.6 1.2	1.2	I d	
16	"	13.8 5.0	立上りは直線的で、立上り角は1.2cm程度	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	15.7 1.2	1.2	I d	
17	"	13.6 4.6	18は立上りが1度内側に縫跡で断面する	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	14.4 1.0	1.0	I d	
18	"	10.6 3.9	ヘラ削りは2/2-2/3で立上り角は1.2cm程度	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	13.2 1.1	1.0	I d	
19	"	13.4 4.6	又上りは低いが内側は高い。ヘラ削りは	砂粒を含む	良	青灰 色	左	15.3 0.9	1.2	I d	
20	"	13.9 5.0	又上りは低いが内側は高い。内腹ナギ	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	15.3 0.9	1.2	I d	
21	"	13.1 3.7	1/3以下となる。内腹ナギ	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	14.2 0.8	1.2	I d	
22	"	13.0 3.7	立上りが直線的で内側は小さくなる。	砂粒を含む	ノ	青灰 色	右	13.8 0.6	1.2	I d	

No.	種類	法番	形態・手法の特徴	粘土	焼成	色調	Y/R	出土地点	備考	分類	
8-23	板 爪	174	板状	ヘラ削りはさみ目	無	灰 色	-	生	18.0.7	73	
24	有脊鉢輪	15.5	5.5	輪幅をもじ光面のほか目、内底に目あり	すこし粗粒	良	灰 色	灰	1.7	24	
25	*	II	37.4	4.2	縦の模様となる。内底には目持久。	粗粒	良	灰 色	-		
26	*	II	36.7	5.0	横の模様となる。ヘラ削りはさみ目	粗粒	良	灰 色	-	1	
27	*	III	34.5	5.5	内面のみに目持久。器皿が高くなり	粗粒	良	灰 色	15.5.3.2.1.9		
28	*	III	34.7	6.4	ヘラ削りはさみ目	粗粒	良	灰 色	1.8.2.1.0		
29	*	N	34.0	5.5	内面の高さも増す。輪幅をもじる。	粗粒	良	灰 色	2.6.1.2		
30	*	II	36	5	輪幅をもじる。ヘラ削りはさみ目	粗粒	良	灰 色	-		
31	板不得	14.5	4.2	断面が直角。外側面も傾む。	粗粒	良	灰 色	-			
32	有蓋鉢輪	14.0	19.5	外側の折れ目。内底面も傾む。	粗粒	良	灰 色	16.16.3.3.10.4			
33	*	II	33.7	9.6	輪幅が多少大きくなる。蓋よりは内側面	粗粒	良	灰 色	15.2.1.28.5.25	1	
34	*	III	33.1	9	輪幅が大型化する。蓋よりくらすれば丁度	粗粒	良	灰 色	15.9.1.5.1.1		
35	*	III	34.0	17.8	蓋よりは細かいが輪幅と内側面とした	粗粒	良	灰 色	16.6.1.1.15.5	74	
36	*	III	35.5	9.9	輪幅には目持久と有蓋がある。	粗粒	良	灰 色	16.10.9.6.8.5	75	
37	*	III	35.5	9.9	通常は円錐形と方形である。	粗粒	良	灰 色	16.35.1.0.4.0.9		
38	*	III	32.8	8.7	輪幅には目持久と有蓋。	粗粒	良	灰 色	16.1.0.4.2	1	
39	有蓋鉢輪	33.7	19.5	立上がりが1cm程度で体側に出来る形態	粗粒	良	灰 色	日 1号 漢	9.9.2.10		
40	*	III	33.7	18.6	30%~50%弱。当時はナメられていた。	粗粒	良	灰 色	長		
41	無蓋窓	33.7	7.5	輪幅位子に窓を飾つ小窓。内底面	粗粒	良	灰 色	日 1号 漢	上 20.2		
42	*	III	30.0	7.5	輪幅位子に窓を飾つ小窓。内底面	粗粒	良	灰 色	日 1号 漢	上 20.2	
43	蓋	32.8	8.8	内窓入りの窓を持つ有蓋をもじる目	粗粒	良	好	灰 色	日 1号	1	
44	輪幅鉢輪	n-1	—	輪幅入り。輪幅から有蓋をしならう。蓋部で内窓入り。	粗粒	良	灰 色	日 1号 漢	—		
45	10.海窓	31.5	8.8	45度で輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	灰 色	日 1号 漢	—	75	
46	*	IV	31.7	9.2	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	灰 色	日 1号 漢	—	76
47	*	IV	31.5	9.2	内窓入り。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—
48	蓋	32.2	8.9	輪幅入りではない。おそらく輪幅を曲げてある。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
49	10.海窓	31.4	8.2	45度で輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
50	*	II	30.2	8.7	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—
51	無蓋窓	30.8	9.2	小窓や輪幅入りが輪幅が内側にある。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
52	蓋	31.7	8.1	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
53	鉢	32.8	8.8	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
54	*	30	6.6	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
55	*	23.4	—	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
56	*	24	—	輪幅入り。輪幅をくびくびと輪幅を曲らす。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
57	成	18	8.7	大型で内外両面ともへラ巻きを施す。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
58	*	17.2	9.0	輪幅入りに花巻を入れる。	粗粒	良	好	灰 色	日 1号 漢	—	
59	白 瓶	16.5	6.3	輪幅入り輪幅を内側にして、かかからない。	粗粒	良	好	白 色	日 1号 漢	76	

7号墳出土玉類計測表

(単位: mm)

No.	種類	長径	短径	高さ	孔 径	色 調	材 質	備 考
1	管 玉	1.5	1.2	22	1.2	青 色	玉	青玉空孔
2	?	9	9	24.3	1.4	—	—	青玉空孔
3	?	9	8	24.5	1.2	—	—	青玉空孔
4	?	9	9	23	1.5	—	—	青玉空孔
5	?	7.5	7	20	1.5	—	—	青玉空孔
6	?	8.5	8	25	2.2	—	—	青玉空孔
7	?	8.5	9	22	1.5	—	—	青玉空孔
8	?	9	9	23	1.5	—	—	青玉空孔
9	?	7	7	24	1.2	—	—	青玉空孔
10	?	8	8.5	20	1.5	—	—	青玉空孔
11	?	7.5	7	26	1.5	—	—	月面穿孔
12	?	8	8.5	25	2.5	淡 褐 色	めのう	—
13	?	5	5	21	1.5	淡 褐 色	輪 玉	—
14	?	5	5	18.5	1.5	—	—	青玉空孔
15	?	5	5	15	1.8	—	—	—
16	?	5.5	5	14.6	1.8	—	—	—
17	?	5	5	15	1.5	—	—	—

No.	種類	長さ	直径	高さ	孔径	色調	材質	備考
16	丸玉	6.0	1.5		2.5	褐色	ガラス	片面穿孔
19	x	7	2		2.5	x	x	片面穿孔
20	x	8.2	8.5		1.8	x	x	
21	x	7	8.5		1.8	x	x	片面穿孔
22	x	6.5	7.5		2.5	ぐんこう色	x	
23	x	7	8		2.5	褐色	x	
24	x	6	7		2.5	x	x	
25	x	7	6.5		2.5	x	x	片面穿孔
26	x	6.5	8		2.5	x	x	
27	x	5	9		2.5	x	x	片面穿孔
28	x	7	8		2.5	x	x	片面穿孔
29	x	6.5	8		2.5	x	x	
30	x	4.5	7		2.5	x	x	
31	x	7	8		2.5	x	x	片面穿孔
32	x	6.5	1.0		2.5	x	x	
33	x	5.5	8		2.5	x	x	片面穿孔
34	x	5.5	8		2.5	x	x	
35	x	8.7	8.2		2.5	x	x	
36	x	8	8		2.5	x	x	片面穿孔
37	x	5	7.5		2.5	x	x	
38	x	6	8.5		2.5	x	x	
39	x	5.2	8		2.5	中・深褐色	x	片面穿孔
40	x	6	8		2.5	褐色	x	片面穿孔
41	x	6.5	7.5		2.5	褐色	x	片面穿孔
42	x	2	6		2.5	x	x	
43	x	5.8	6		2.5	x	x	
44	x	6	7.5		2.5	x	x	
45	x	6	7.5		2.5	x	x	片面穿孔
46	小丸玉	3	5.5		2.5	x	x	
47	x	4.2	5.2		2.5	x	x	
48	x	3.5	6		2.5	x	x	
49	x	2.5	2.8		2.5	x	x	
50	x	3	4.5		2.5	x	x	片面穿孔
51	x	3	6		2.5	x	x	片面穿孔
52	x	2.5	4.5		2.5	x	x	
53	x	3.2	5		2.5	x	x	
54	x	1.8	3.8		2.5	褐色	x	
55	x	3	5.5		2.5	褐色	x	
56	x	4	4.5		2.5	x	x	
57	x	4	4		2.5	褐色	x	
58	x	3.5	4		2.5	褐色	x	
59	x	3	4		2.5	x	x	
60	x	2.5	2		2.5	褐色	x	
61	x	3	5		2.5	x	x	
62	x	2	2		2.5	褐色	x	
63	x	3	4		2.5	x	x	
64	x	3.5	4		2.5	褐色	x	
65	x	3.2	4		2.5	x	x	
66	x	4	6		2.5	ブルー	x	
67	x	5.5	6		2.5	x	x	
68	x	6	5.5		2.5	淡ブルー	x	
69	x	3.5	4		2.5	x	x	
70	x	3	3.5		2.5	x	x	
71	x	2	3		2.5	x	x	
72	x	2	3.5		2.5	x	x	
73	x	6	6		2.5	や・緑がかった深いブルー	x	
74	x	5.2	5.2		2.5	x	x	
75	x	3.3	4		2.5	青色	x	

番	種類	長 広 短 様		高さ	孔	溝	色	調	材質	備考
		(A)	(B)							
79	小 玉	3	2.2				黒	色	セラミ	六角穿孔
77	x	3.7	4.5				x		x	x
78	x	2.5	2			0.5	x		x	x
79	x	2.4	3.5			0.5	x		x	x
80	x	2	3			1	x		x	x
81	x	2.2	5			1	黒 緑	色	x	x
82	x	2.8	4.2			0.8	x		x	x
83	x	3.2	4.2			1	x		x	x
84	x	2.8	4			0.8	x		x	x
85	x	2.5	4.5			1	x		x	x
86	x	3	4.5			1.2	x		x	x
87	x	3.5	4.5			1.2	x		x	x
88	x	2.7	4			0.8	x		x	x
89	x	4	4			1	x		x	x
90	x	3	4			1	x		x	x
91	x	3	4			0.8	x		x	x
92	x	2	4			1	淡い 黒 緑	色	x	x
93	x	1.8	4.3			1.2	黒 緑	色	x	x
94	x	3	5.5			2	ブルー	—	x	x
95	x	2.2	5			1.2	x		x	x
96	x	2.3	5			1.5	x		x	x
97	x	4	4			1.2	x		x	x
98	x	2.2	4			1	x		x	x
99	x	3	4.5			0.8	x		x	x
100	x	2.2	4			1	x		x	x
101	x	2	3			1	x		x	x
102	x	2	3.8			1.2	x		x	x
103	x	2	3.5			1.2	x		x	x
104	x	2	2.5			0.7	x		x	x
105	楕 圓	6	8			0.7	黒	色	丸	x
106	x	6.5	9			2	x		x	x
107	x	7	9			2	x		x	x
108	x	10	9.5			2.5	x		x	x
109	x	6.5	7.7			2.5	x		x	x
110	x	7	7			1.2	x		x	x
111	x	6	7			1.5	x		x	x
112	x	7.5	8.5			2	x		x	x
113	x	7	8			0.8	x		x	x
114	x	6	8.5			1.8	x		x	x
115	x	8	8.5			1.7	x		x	x
116	x	7	9			1.2	x		x	x
117	x	7	7			1.5	x		x	x
118	x	7	7.5			1.5	x		x	x
119	x	6	7			1.5	x		x	x
120	x	4	6			1.5	x		x	x
121	x	6	6.5			2	x		x	x
122	x	5.8	6.5			2.5	x		x	x
123	x	6	7.5			2.5	x		x	x
124	x	6	7			1.5	x		x	x
125	x	5.5	7			1.2	x		x	x
126	x	6	6			1.5	x		x	x
127	x	6	7			1.5	x		x	x
128	x	7.5	7.5			1.2	x		x	x
129	x	7	7.5			2.5	x		x	x
130	x	6	7.2			1.2	x		x	x
131	x	6.5	8.5			1.7	x		x	x

# 図 版



4号玄室出土土器

## 図 版 目 次

P.L.	1 (1) 1号墳現況近景	(2) 1号墳周溝と石室全景
P.L.	2 (1) 石室全景	(2) 石室
P.L.	3 (1) 2号墳現況近景	(2) 2号墳全景
P.L.	4 (1) 3号墳現況近景	(2) 3号墳全景
P.L.	5 (1) 石室内から羨道部をのぞむ	(2) 羨道部床石状態
P.L.	6 (1) 側壁	(2) 羨道部側壁
P.L.	7 (1) 4号墳現況近景	(2) 全景
P.L.	8 (1) 石室近景	(2) 石室全景
P.L.	9 (1) 石室と出土土器	(2) 土器出土状態
P.L.	10 (1) 5号墳現況近景	(2) 5号墳全景
P.L.	11 (1) 5号石室全景	(2) 側壁状態
P.L.	12 (1) 6号墳現況近景	(2) 6号墳全景
P.L.	13 (1) 6号墳石室	(2) 周溝内七器出土状態
P.L.	14 (1) 7号墳現況近景	(2) 7号墳全景
P.L.	15 (1) 石室全景	(2) 石室近景
P.L.	16 (1) 羨道部側壁状態	(2) 石室内上器出土状態
P.L.	17 (1) 8号墳現況近景	(2) 8号墳全景
P.L.	18 (1) 8号石室全景	(2) 8号石室近景
P.L.	19 (1) 8号閉塞状態	(2) 8号側壁状態
P.L.	20 1・2号墳出土土器 (1/3)	
P.L.	21 3・4号墳出土土器 (1/3)	
P.L.	22 4号墳出土土器 - 1 (1/3)	
P.L.	23 4号墳出土土器 - 2 (1/3)	
P.L.	24 5号墳出土土器 - 1 (1/3)	
P.L.	25 5号墳出土土器 - 2 (1/3)	
P.L.	26 6号墳出土土器 (1/3・1/4)	
P.L.	27 7号墳出土土器 (1/3・1/4)	
P.L.	28 7・8号墳出土土器 (1/3)	
P.L.	29 8号墳出土土器 (1/3・1/4)	
P.L.	30 1・2・3・4号墳出土土器 (1/3)	
P.L.	31 4・5・6・7号墳出土鉄器 (1/3)	
P.L.	32 7号墳出土鉄器と各古墳出土の玉類 (1/2・1/3)	



(1) 1号墳現況近景

(西から)



(2) 1号墳周溝と石室全景

(西から)



(1) 石室全景

(西から)



(2) 石室

(東から)



(1) 2号墳現況近景

(南から)



(2) 2号墳全景

(南から)



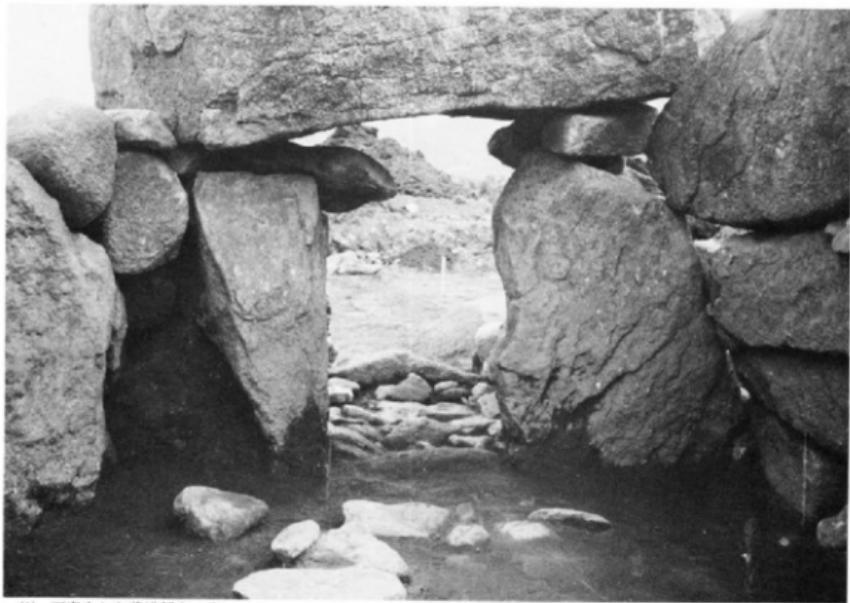
(1) 3号墳現況近景

(南から)



(2) 3号墳全貌

(南から)



(1) 石室内から西道部をのぞむ

(北から)



(2) 西道部床石状態

(南から)



(1) 側壁

(東から)



(2) 渡道部側壁

(東から)



(1) 4号墳現況近景

(西から)



(2) 全 景

(西から)



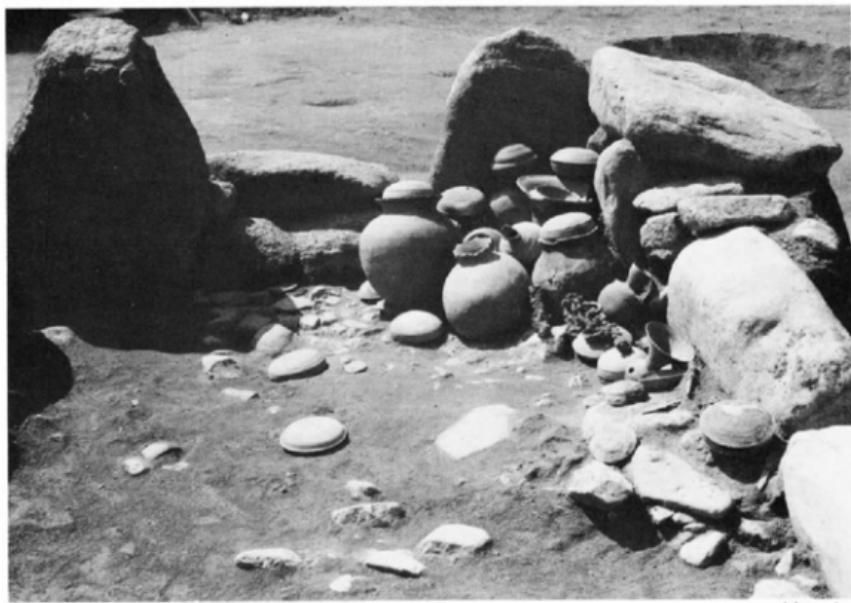
(1) 石室近景

(西から)



(2) 石室全景

(西から)



(1) 石室と出土土器

《東から》



(2) 土器出土状態

《南から》



(1) 5号墳現況近景

(北から)



(2) 5号墳全景

(南から)



(1) 5号石室全貌

(南から)



(2) 倒壁状態

(東から)



(1) 6号墳現況近景

(西から)



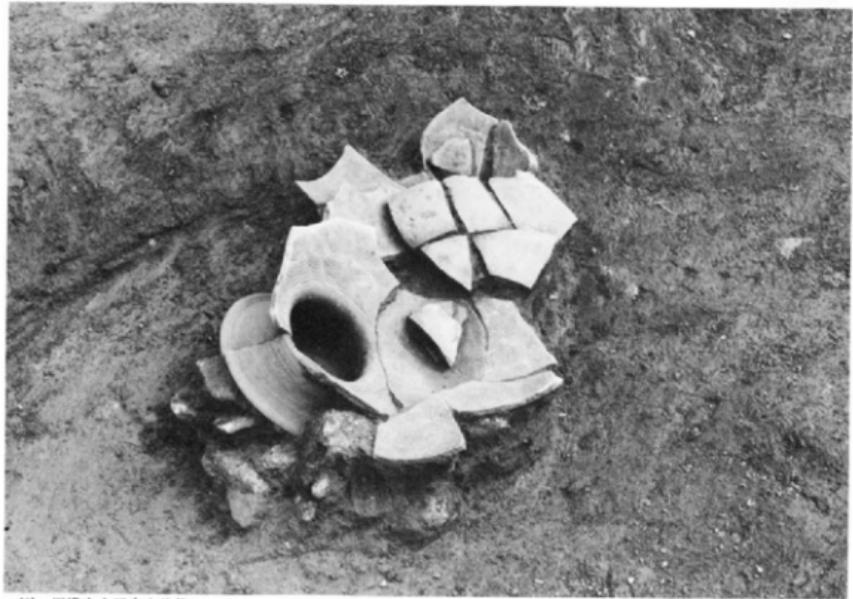
(2) 6号墳全景

(南から)



(1) 6号填石室

(北から)



(2) 周溝内土器出土状態



(1) 7号墳現況近景

(南から)



(2) 7号墳全景

(南から)



(1) 石室全景

(南から)



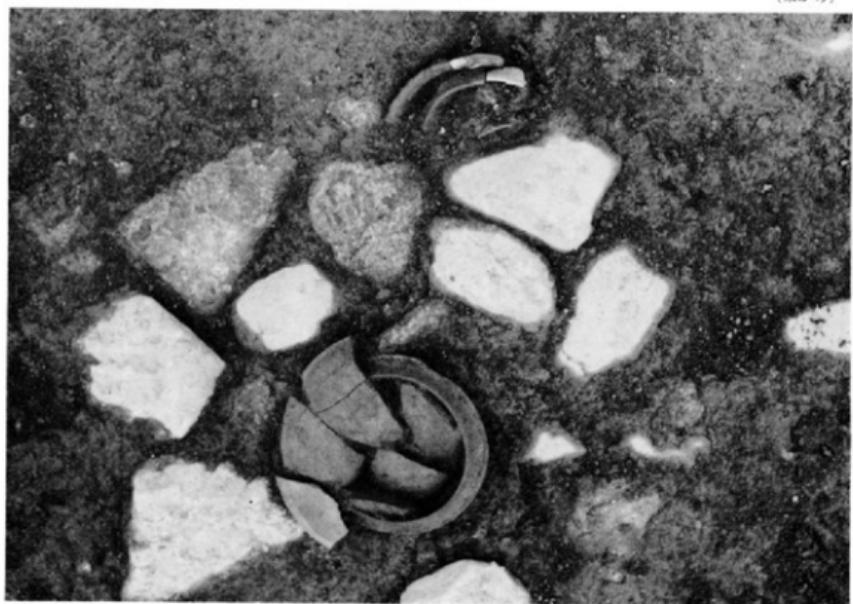
(2) 石室近景

(南から)



(1) 無道部側壁状態

(東から)



(2) 石室内土器出土状態



(1) 8号墳現況近景

(北西から)



(2) 8号墳全景

(南から)



(1) 8号石室全景

(南から)



(2) 8号石室近景

(南から)



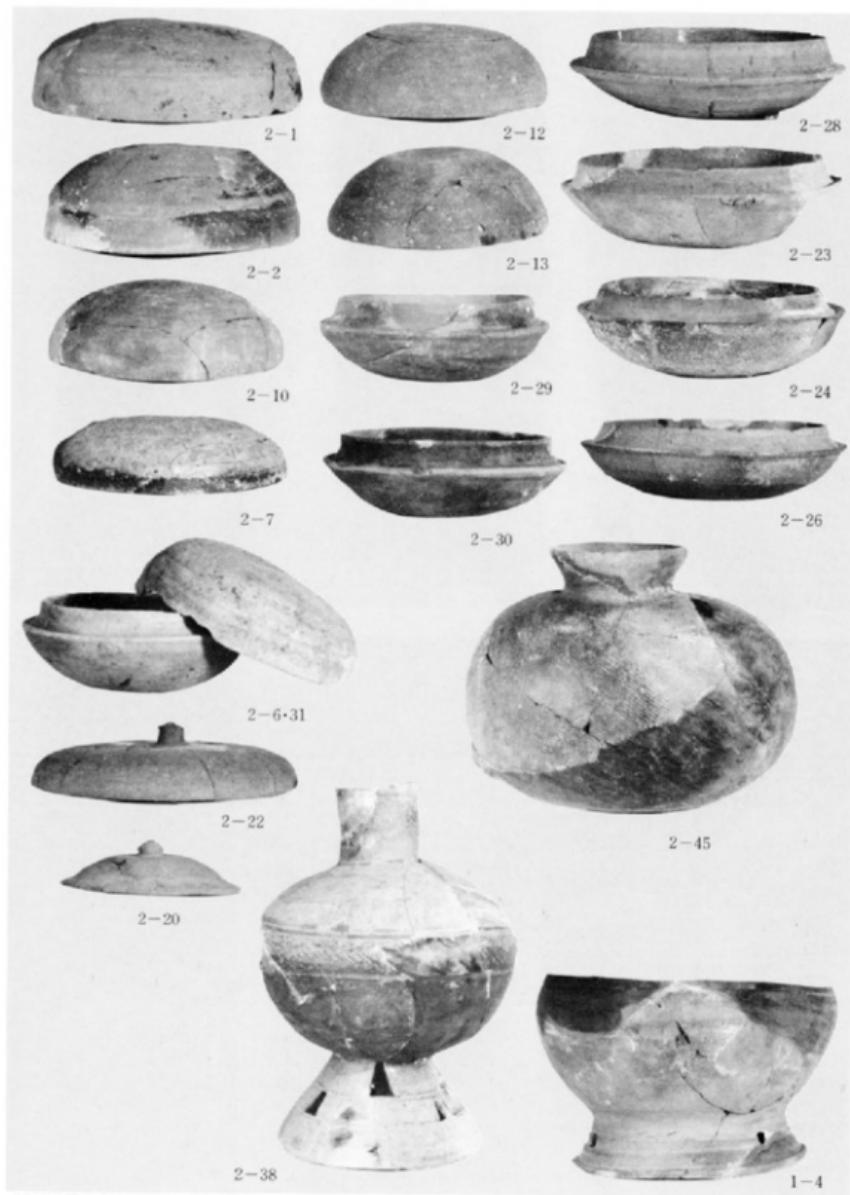
(1) 8号閉塞状態

(南から)

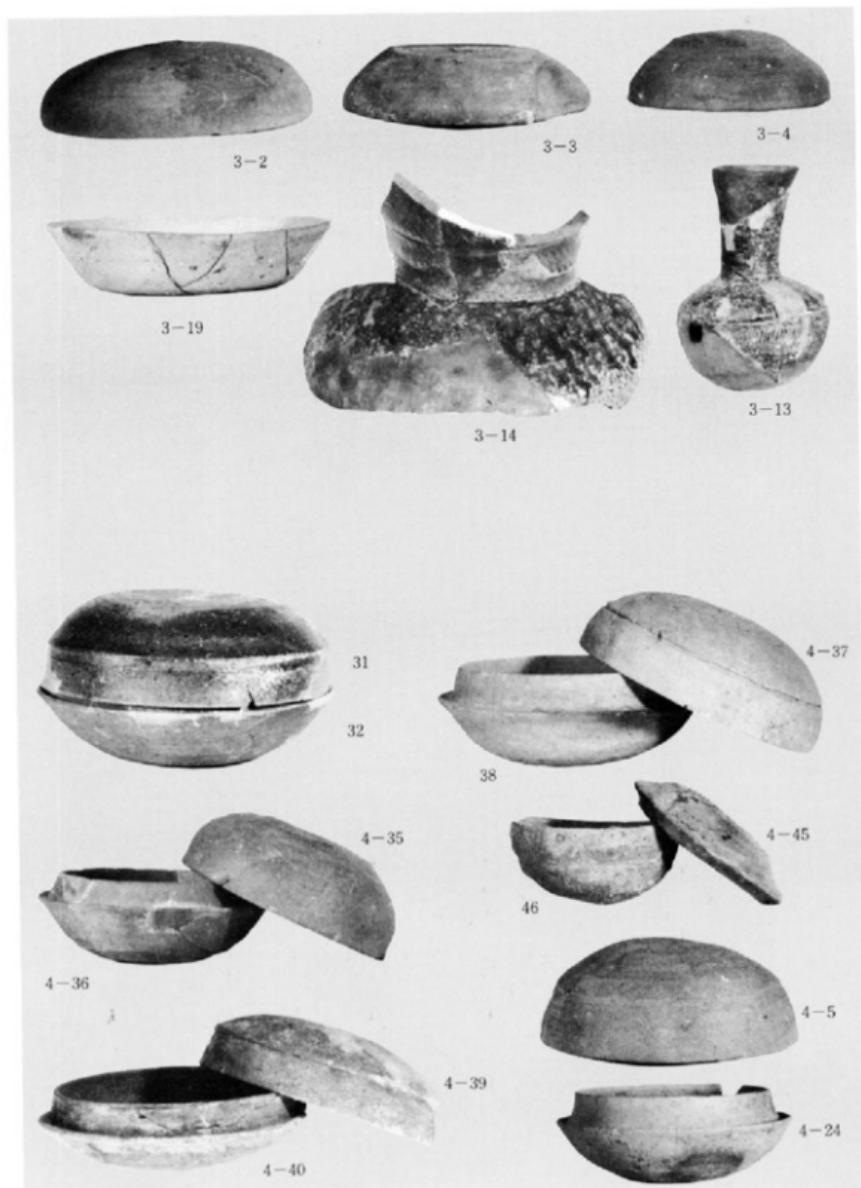


(2) 8号開墻状態

(西から)



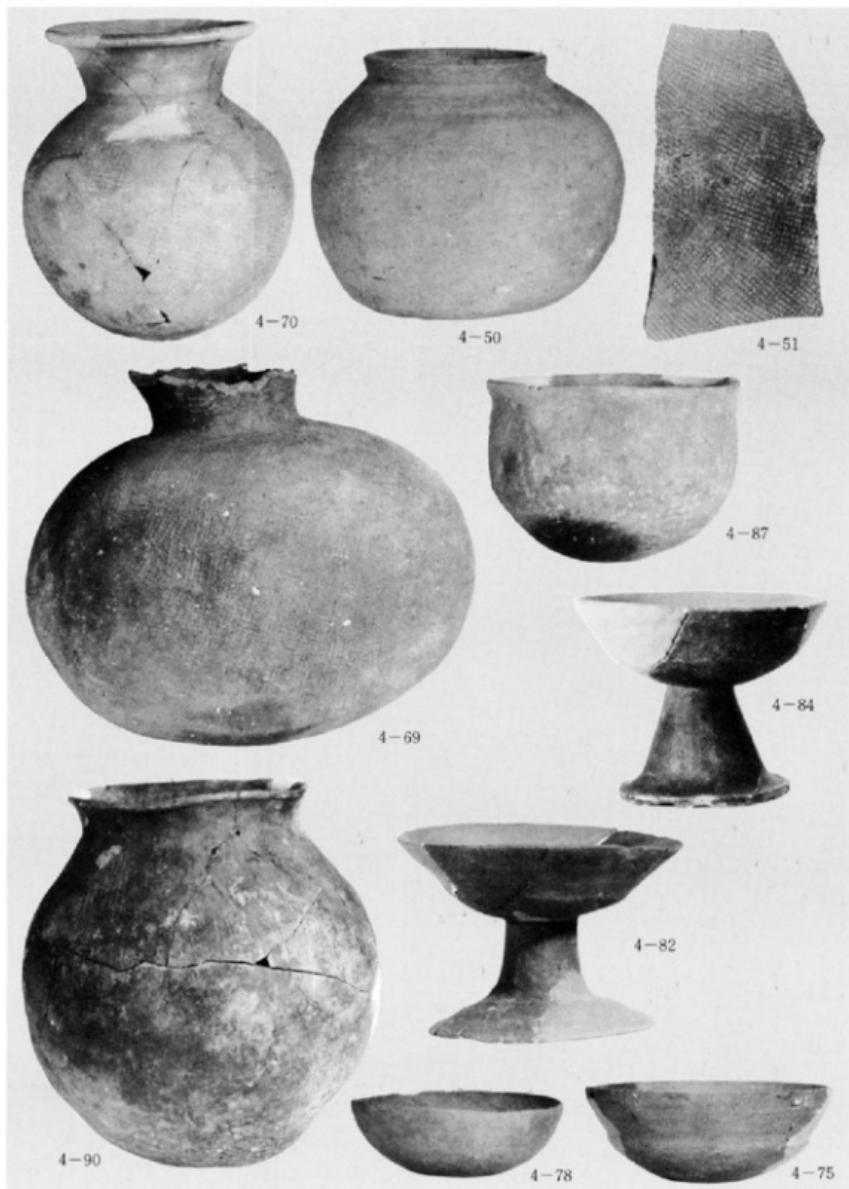
1・2号出土土器 (1/3・1/4)



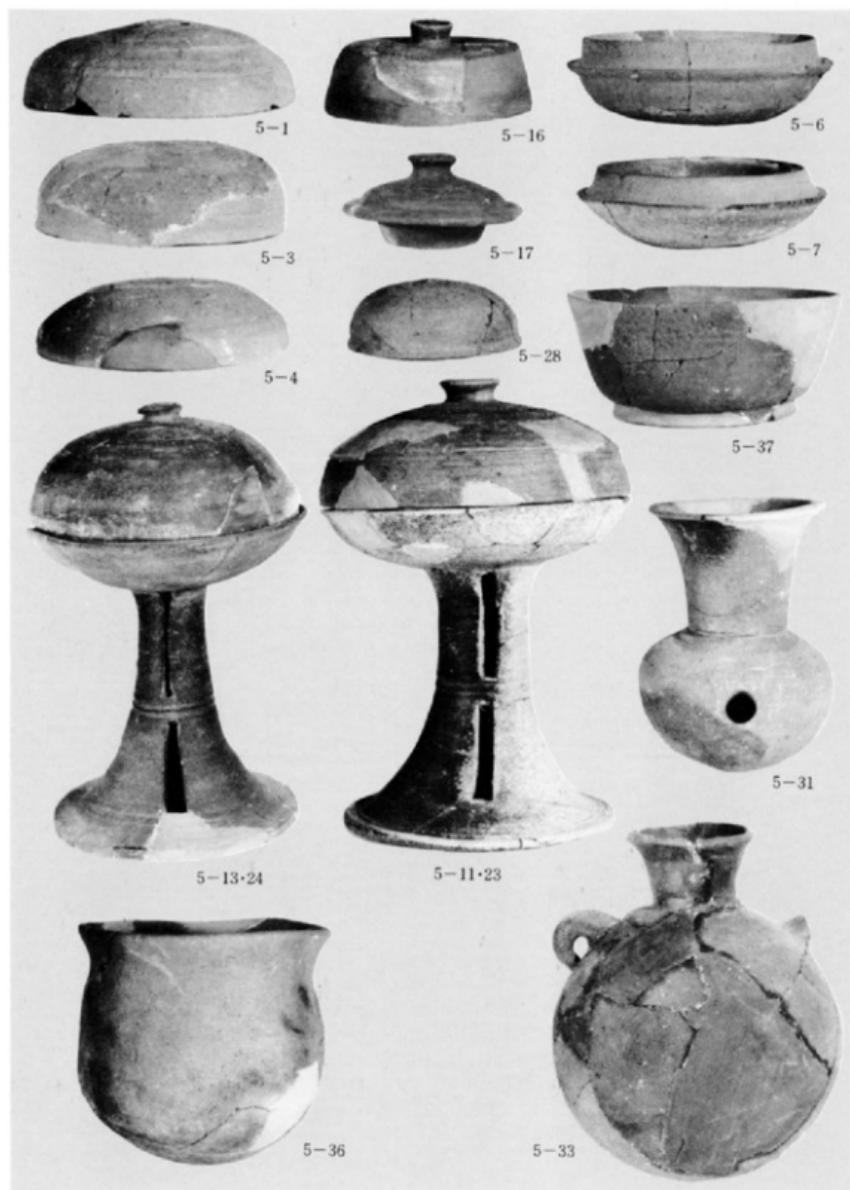
3·4号出土土器 (1/3)



4号墳出土土器-1 (1/3)



4号填出土器-2 (1/3·1/4)



5号填出土土器-1 (1/3)



5号填出土器 - 2 (1/3)



6-1



6-10



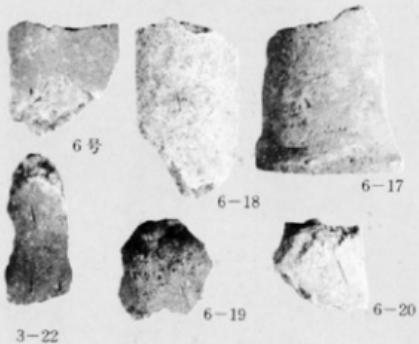
6-13

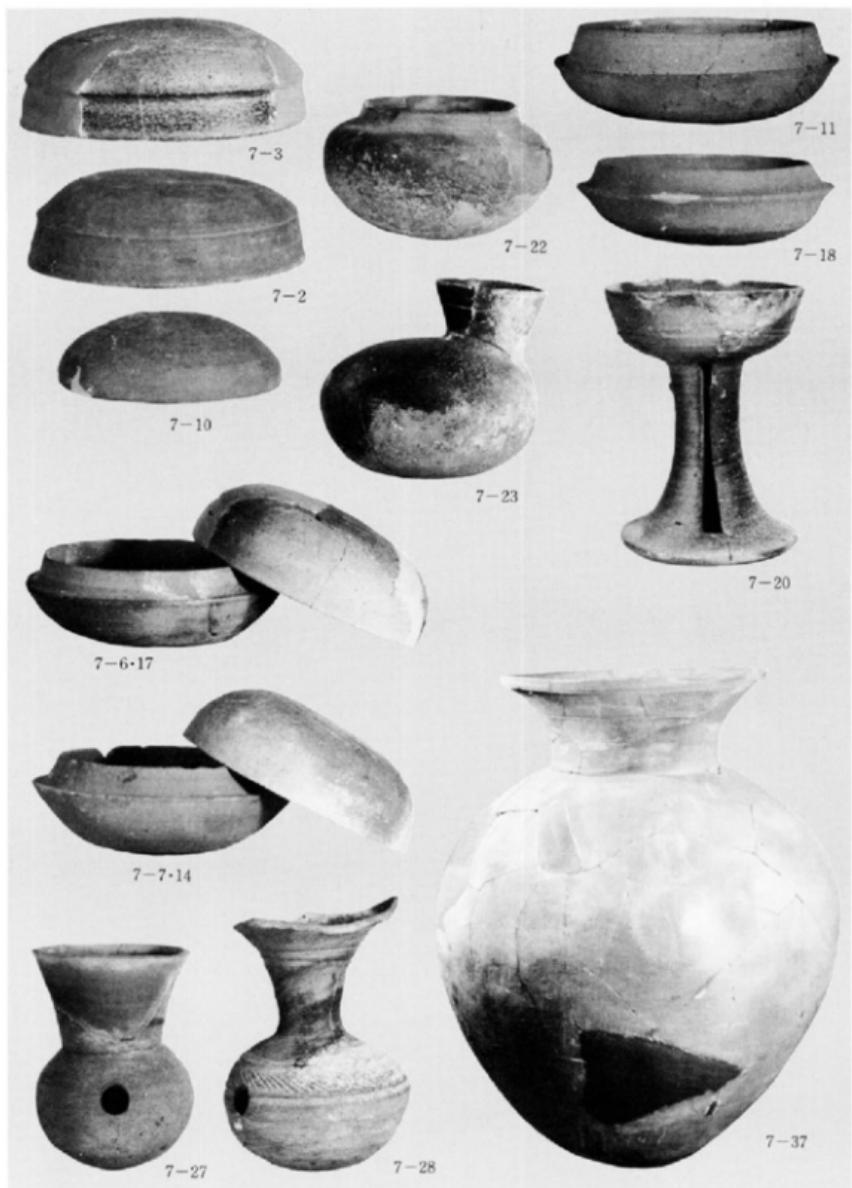


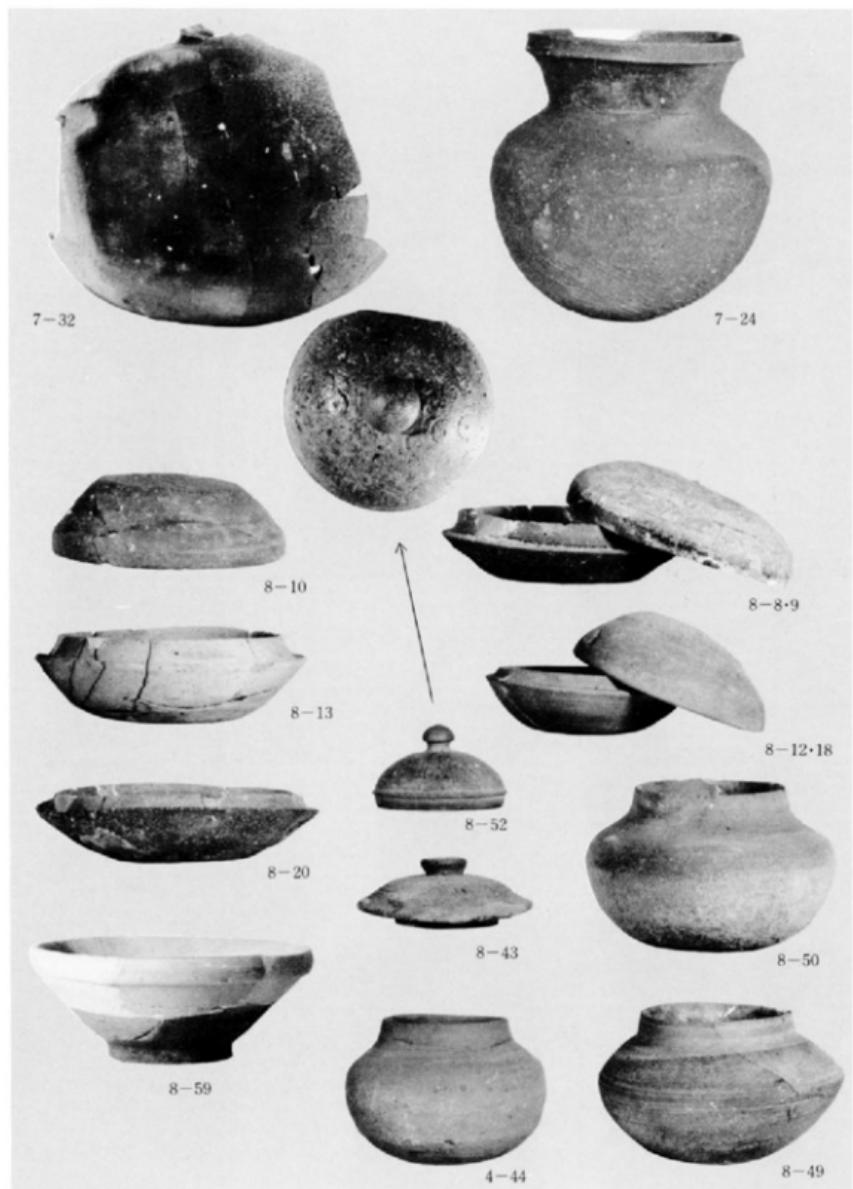
6-16



6-14







7 · 8 号 墓出土土器 (1/3)



8-26·33



8-54



8-31



8-41



8-42



8-51



1・2・3・4号出土鐵器 (1/3)



4·5·6·7号墳出土鐵器 (1/3)



7号墳出土鉄器と各古墳出土の玉類 (1/2・1/3)

福岡市西区

吉武塚原古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集

1980年（昭和55年3月31日）

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 (株)西日本新聞印刷



手稿



吉武塚原古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集

福岡市教育委員会